Epistemological Framework と英米文学

(課題番号 14310206)

平成 14 年度~平成 17 年度 科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 研究成果報告書

平成18年3月

研究代表者 鷲津浩子 筑波大学大学院人文社会科学研究科 教授

クジラ漁の始まったころ¹ ---『白鯨』と船舶位置確定

鷲津浩子

ハーマン・メルヴィル『白鯨』(一八五一年;以下、作品名は『白鯨』と表記) ²をめぐる 読みについては、マイケル・ポール・ローギンの『サブヴァーシヴ・ジニアロジー』(一九八三年) ³以降、多かれ少なかれ、政治的・イデオロギー的観点から、アメリカ拡張主義の帝国的・搾取的側面を指摘することによって展開してきた先行研究を無視することはできないだろう。本稿はそのような読みが発見した、侵略・植民地・異文化・人種・境界・ジェンダー・セクシュアリティ・労働などの問題について批判的でも否定的ではない。けれども、これらの問題をこれ以上敷衍することに紙数を費やそうとは思わない。というのも、第一には、この分野ではすでに数多くの優れた労作があり、それらに匹敵する独自の読みを創出することは難しいと思うからである。また、十九世紀アメリカという時代と地域を限定して扱うとき、『白鯨』という特定のテクストには、アメリカ拡張主義の表象だけではなく、それとは反対向きの読みを許容する装置がしかけられていると考えるからである。

本稿は、『白鯨』を同時代の捕鯨航海記とは一線を画する個別のテクストととらえ、そこに固有に見られる構図を、主にピーコッド号の海上での位置確定にかかわる問題に焦点をあて、その船舶航路が「進出」や「侵略」というよりは、むしろ「回帰」や「遡行」の方向に向かっていることを論じるものである。

1

『白鯨』の「抜粋」で引用されている同時代の捕鯨航海記には、トマス・ビール『マッコウクジラの自然誌』(一八三九年)、フレデリック・デベル・ベネット『世界一周捕鯨航海記』(一八四〇年)、J・ロス・ブラウン『捕鯨素描』(一八四六年)、ヘンリー・T・チューヴァー『鯨と捕獲者』(一八四九年)などがあるが、これらの航海記と『白鯨』との大きな違いは、一方が捕鯨をあくまで無批判かつ楽観的にとらえているのに対し、他方はクジラや捕鯨や捕鯨船を意識的に描いていることである。4これは、何も一方が「事実」であり、

他方が「虚構」であるということでも、一方が生還した成功者の物語であり、他方がクジラによって沈められた捕鯨船の生き残りの物語であるという違いだけではない。両者を比較するとき、次のような相違点・疑問点が指摘できるだろう。

第一に、なぜイシュメールはナンタケットから出航する必要があったのだろうか。彼が出発点として選んだのは、ピーコッド号出航時(一八四二年)あるいは『白鯨』執筆時(一八五〇年)に捕鯨基地として繁栄していたニュー・ベッドフォードではなく、明らかに落ち目のナンタケットであった。5たとえば、『捕鯨航海のできごと』(一八四一年)のフランシス・アリン・オルムステッドは、一八三九年にコネティカット州ニュー・ロンドンから出航している。6また、『素描』のブラウンはワシントン、フィラデルフィア、ニューヨーク、プロヴィデンスを経由して、ニュー・ベッドフォードから出航している。しかも、出航地を選んだ理由として、ニューヨークの街頭で見かけた船員募集のビラをあげ、「いくぶん見込みがある」(一〇)としてニュー・ベッドフォードへと向かうのだ。ナンタケットは、その砂州のために大型船を入港させられないという地理的条件から、一八四〇年ごろにはすでに捕鯨基地前線としての役割を譲っていた。しかも、イシュメールが乗り込むピーコッド号は「旧式に属する船」(六九)であり、明らかにナンタケットの栄光が過去のものであることを示唆するものとなっている。

実のところ、ウィルソン・L・ヘフリンの指摘によれば、メルヴィルが最初で最後のナンタケット訪問をしたのは一八五二年のことで、これは『白鯨』を出版した翌年にあたる。ちなみに、ジェイ・レイダの『メルヴィル・ログ』では、この日は七月八日、たった一日だけの訪問であった。また、ジョン・ブライアントによれば、自ら捕鯨船に乗り組んだ経験のあるメルヴィルは、ニュー・ベッドフォードについては熟知していたものの、ナンタケットについての知識がなかったため、この港町を想像で書き上げたという。7だとすれば、イシュメールの出発地としてわざわざナンタケットを選ぶには、それだけの理由がなければならないだろう。

さらには、ニュー・ベッドフォードとナンタケットの興隆と没落は、歴史上の事実であるばかりでなく、『白鯨』本文でも明確に記されている。たとえば、第二章「旅行鞄」の冒頭では、多くの若人はニュー・ベッドフォードから鯨捕りに出かけるだろうが、「わたしが心に決めていたのは、ナンタケット以外の船では出帆しないということだった」(八)とされている。また、第十二章「出自」では、イシュメールはクイークェッグに「ナンタケットから出帆するのは、そこが冒険好きな鯨捕りが船出するのにいちばん幸先がいいところ

だから」(五六)と説明している。

第二に、同時代のほかの捕鯨航海記が、寄港地の異国情緒を大いに利用し喧伝しているのに対して、ピーコッド号はどこにも寄港しない。確かに、第五四章「タウン・ホー号の物語」と第一〇二章「アルサシードのあずまや」では寄港地の風物が描かれているが、いずれも物語内物語であり、他の章と同等には論じられない。また、同じ著者の『タイピー』や『マーディ』では寄港地の様子が描かれていることからも、ピーコッド号の無寄港航海は意図的にしくまれたと考えられる。8

第三に、モービィ・ディック(以下、鯨の名前はモービィ・ディックと表記)を追跡するとき、ピーコッド号上の航海器機(navigational instruments)は歴史上の発展に逆行し、昔の器機へと遡行していく。老朽船ピーコッド号に最新器機クロノメターは望むべくもないにしても、天体観測による位置確定はエイハブの四分儀破壊によって不能となり、紐つき測程器は水中投下したとたん紐が切れ、羅針儀も雷によって正しい方向を指さなくなってしまう。メルヴィル自身、捕鯨船に乗り組んだ経験があるのだから、捕鯨船の航海器機に無知であるはずもなく、したがってこの遡行もまた意図的に選択されたものと考えられよう。9

第四に、ピーコッド号の航跡を現在のメルカトール地図(図1 a & b)に投影するのは便宜上有効ではあるが、当時の捕鯨船の心象地理概念つまり海域中心の見取り図ではまったく異なった意味合いを帯びてくる。ことに、メルヴィル自身の捕鯨船経験が東向きであったのに反して、ピーコッド号に東向きの航路をとらせているのには、それなりの理由が必要だろう。10 ちなみに、この二葉ではピーコッド号の航跡が異なり、後者では南アメリカ大陸の東岸に接近しているが、これは第五一章の「潮吹きの霊」の冒頭でピーコッド号が四つのクジラ漁場に立ち寄ったことを地図に反映させたものと考えられる。

また、たとえばウィリアム・スコーズビー・ジュニア『北洋捕鯨航海記』(一八二三年)のグリーンランド地図や、ジェイムズ・ウェデル『南極行航海記』(一八二五年、二七年)のケープ岬付近の海図が示すように、当時の地図・海図は、正確とはいいがたいものであったことも忘れてはならないだろう。11この問題は、本稿の後半で論じられる。

第五に、『白鯨』のテクストに挿入されている「鯨学」の問題がある。本文中では明らかにクジラを哺乳類とする描写があるにもかかわらず、第三二章「鯨学」でクジラを「魚(fish)」に分類しようとしている(一三六~三七)のは、当時最先端の自然誌、たとえばジョルジュ・キュヴィエ(「鯨は後足のない哺乳動物である」、xxin)やカール・フォン・リンネ(「鯨

を魚から切り離 [して分類する]、一三六) よりも、旧約聖書の「創世記」「ヨブ記」「ヨナ書」「詩篇」「イザヤ書」(xvni)を意識したものとなっている。もしピーコッド号の捕鯨を、たとえばチーヴァーの『鯨と捕獲者』のように、あるいは一六三五年から一八三五年までのニュー・イングランドの捕鯨者をあつかったエドゥワール・A・ストックポールの『海の狩人』のように、捕獲者と捕獲物の関係を象徴したものととらえるのならば、「水平の尾をもつ潮ふく魚」(一三七)を追いかける漁業よりも、むしろキュヴィエやリンネに従って「哺乳類」であるクジラを「狩猟する」行為とするほうが、その構造が明白になるだろう。 12 この問題は興味深い論議を呼ぶはずであるが、本稿では立ち入らない。また、「鯨学」の同時代コンテクスト、その自然誌的・百科事典的側面については、後日にゆずる。

続く各項では、上記項目のうち第三点の航海器機と第四点の航路に焦点を絞って、ピーコッド号の海上での位置確定を検証することにより、『白鯨』には「回帰」や「遡行」の方向性が隠されていることを論じることにしよう。

2

船舶位置の確定は、外洋に出た途端、難しいものとなる。地中海の内だけを航海している間は、ポルトランという陸地の目印と風向きを記録した地図で充分だった。ジブラルタル海峡を巡航することも、陸地が見えさえすれば、ちょっとした注意だけで足りた。赤道を南下することも、アフリカ海岸に沿っている限り、勇気と決断の問題だった。十四世紀中ごろの地図には、位置が不正確とはいえ、すでにアフリカ沖にあるアゾレス諸島が描かれている。十五世紀、ポルトガルの航海王エンリケの時代には、カボヴェルデ諸島が発見され、大西洋航海の道標および停泊地となった。コロンブスが夢のアジアに向けて出帆したとき、彼はまずカナリア諸島を訪れ、食料を調達するとともに、既に位置が確定されていたこの地から西へと航路をとった。これらの歴史上の事実は、すべて同じ問題に集約している。それは、海上での船舶位置の確定の難しさ、ことに経度の確定の不確実性にまつわるものであった。13

経度に比べると、緯度を確定することは、それほど難しいことではない。正午すなわち 太陽が最高点に達したときに、四分儀(あるいはその発展形態としての八分儀や六分儀) を使ってその角度を測れば、船舶が赤道からどんな角度の場所にいるか、比較的簡単に計 算できるからだ(図2a&b)。この方法に問題点がなかったわけではないが、いずれも解 決が不可能なくらい重大なものではなかった。太陽は直接見つめると眼を痛め視力を失わせる原因にもなるのだが、それならば間接的に観測して高度を測定すればいい。そのために、鏡(図3a&b)をとりつける工夫がなされた。また、高緯度の場所では太陽の高度を正確に測ることは難しかったが、北極か南極にでも探検に行かない限り、大きな問題にはならなかった。揺れる船の上で四分儀を扱うのは煩わしかったが、慣れによって熟練の域に到達できると考えることによって、その不便さを解消しないまでも軽減しようとした。

これに対して、経度の確定は困難を極めた。精密とは言いがたい測量器機によって作られた不正確な海図を頼りに、経度を確定する器機も持たず、大雑把な位置しかわからないまま、多くの船が海上で方向を見失い、難破し、最悪の場合には永遠に戻らなかった。実のところ、あの「輝かしい」大発見時代(Age of Discovery)は、二度と発見されることも回収されることもない数多くの船(unre(dis)covered ships)の時代でもあったのだ。

決定的な経度確定法が見つからないまま、初期の海洋航海者たちはあやふやな、しかし次善の方策に頼らざるを得なかった。そのひとつが、羅針儀と簡単な速度測程器を使って位置を測定し、記録に残す方法である。羅針儀じたいは、画期的な発明だった。磁気を帯びた針が北を指すという原理を応用したこの器機は、十二世紀に中国から伝来したと言われている(羅針儀にまつわる大問題、磁気偏差 magnetic variation や磁伏角 magnetic dipについては、ここでは立ち入らない)。大発見時代の外洋航海では、この器機を使って方位を知り、前日の記録と比較検討した上で現在の船の進行方向を推定した。速度測定は、丸太に紐を結び、その紐に一定の間隔で結び首をつけたものを海中に投げ込み、一定時間内(たいていは砂時計による計量)にどのくらいの結び目が船外に出て行くかを数えることで算出した。この方法で得られるのは、せいぜい推測にすぎず、正確さや精密さは望むべくもないのだが、それでも頻繁に用いられた方法であることは、現在でも航行記録をログ、航行速度をノットと呼ぶことからもわかるだろう。この方法は航程を推測することから「推測航法」と呼ばれているが、英語では deduced reckoning がなまって dead reckoning と呼ぶようになったという説が有力視されている。この航海術が、『白鯨』の第一二五章で、「紐つき側程器」と記されているものの正体である。

推測航法より正確な経度確定は、時差を応用するものであった。地球は二四時間で自転するのだから、ある地点の位置を知るためには、基準地との時差がわかれば、簡単に計算でわりだすことができる(ちなみに、グリニッジを標準時とするのは慣習に過ぎず、理論上は経度が既に確定されているところならどこでも基準点となりえる)。もし時差が一時間

ならば、両地点は経度で十五度西か東に離れていることになるし、二時間ならば三〇度ということになる。けれども、この方法は言うは易く行うに難いものだった。出発地の時刻を船上で保持できる正確な時計(クロノメター)の発明には、十八世紀まで待たなければならなかった。¹⁴

出発地の時刻を船上で保持することが不可能ならば、他の方策を捜さなければならない。そこで登場したのが、地球上の二地点で同時観測が可能な天文現象を「標準時」として使う着想である。たとえば、プトレマイオスは月食を提唱し、たとえば月食をアレクサンドリアとジブラルタルで観測すれば、それぞれの現地時間を比較することによって、両地点の経度の違いがわかることを示唆している。また、ガリレオは自作の望遠鏡で見つけた木星の四衛星を使い、それらが木星に対して作る衛星食を基準点とすることを推奨している。けれども、この天体食観測による経度確定は、推測航法よりははるかにましであるにしても、問題の解決にはほど遠いものだった。天体食は頻繁に起きる現象ではないし、観察するには遠すぎた。いつ天体食に入ったのかを的確に判断し正確に観測することは、望遠鏡の精度から考えても無理な注文だったし、現地時間の確定も、厳密とはいいかねる時計ではあてにならなかった。

そこで、太陰距離(lunar distance)と呼ばれる方法が登場する。これは、月と任意の星が形成する角度を四分儀によって測り(図4)、その結果を既に経度が確定されている場所でのデータと比べ、数式に当てはめて計算し、現在の位置を知るというものである。この基準点として天体観測をするために一六七五年に設置されたのがグリニッジ天文台であり、その任務のひとつは経度表として使える航海暦(nautical almanac)の発行だった。とはいえ、これもまた容易ならざる問題を孕んでいた。いくら慣れで熟達するとはいえ、揺れる船上で四分儀を扱うのは面倒だったし、計算式は煩雑で一般船員には手におえなかった。ちょっとした観測や計算のミスが、とんでもない誤差を生んで、難破事故や失踪事件の原因となった。

以上のような航海器機の発展の歴史は、『白鯨』の最後の部分、モービィ・ディック追撃に新しい見方を提供するだろう。というのも、ピーコッド船上では明らかに航海器機は、歴史上の発展過程とは反対に、逆行して昔のそれへと回帰し遡行していくからである。¹⁵ピーコッド号にクロノメターがないのは、さほど不思議なことではない。この高価な最新器機は、国家が装備してくれる海軍とは異なり、商船や捕鯨船では船長個人の所有物と考えられていたから、「なしですます」ことも可能だった。ことに、捕鯨から最大収益を上げ

ようとする船主や株主は、捕鯨船に最低限の装備をすることさえ渋った。けれども、この知識をメルヴィルが持っていたことは、『ピエール』の挿話、プロティナス・プリンリモンのパンフレット『クロノメトリカルズとホロロジカルズ』でも明らかだろう。また、『白鯨』でもただ一箇所、第二六章「騎士と従者」でスターバックの気質のたとえとして登場している(一一五)。比喩であるとはいえ、他の航海機器が紹介される前、いちばん最初にクロノメターに言及されていることは、明記しておく必要があるだろう。

実際、『白鯨』には、地図や海図にまつわる比喩が見られる。たとえば、クイークェッグの出身島は「どんな地図にも載っていない。真の場所は地図には載らないものだ」(五五)とされている。また、エイハブが皺になった海図の空白部分に何本もの線や航路を書きこむと、彼の額の深く刻まれた海図状の皺にも「見えない鉛筆が線や航路を引く」(一九八)。あるいはまた、鯨捕りがたまさか山の背に見る鯨の似姿は、ソロモン諸島のように「まだ位置の確定ができていない」(二七一)から、いったん眼を離すと見つからなくなってしまうとされる。にもかかわらず、ピーコッド号の正確な位置を経度と緯度で示す描写は皆無といって差し支えない。たとえその位置が示されるとしても、せいぜい大体の地域が示されるか、近くの島によって示唆されるだけである。

経度にいたっては、緯度と組み合わせて比喩の中で使われているだけであり、ピーコッド号の位置とは直接の関係はない。たとえば、第四四章「海図」の註で示唆されている海域を「緯度五度ごと経度五度ごと」に区切ったクジラ分布図の作成(一九九)、あるいは季節によって予測可能な鯨漁区の目処としての「緯度または経度」(二〇〇)、前述した山の背に鯨の似姿を再発見するために必要な立ち位置確認のための「緯度と経度」(二七一)、ユングフラウ号との邂逅を稀有なものとする比喩「どれほど緯度と経度がへだたっていようと」(三五一)などである。確かに、エイハブがモービィ・ディックによって傷つけられた「緯度と経度」に辿りついたことが第一三〇章「帽子」の冒頭で示されるが、具体的数字は示されない(五三六)。また鯨が呼吸のため再浮上する位置を「緯度や経度」にいたるまで正確に推測してみても、この推測は風と海の状況によって左右されてしまうとされている(五五六)。

これに対して、緯度の計算は、ピーコッド号では毎日の習慣となっている。エイハブは、正午に四分儀を使って太陽の高度を図り、義足の上部にとりつけたメダル状の図表をたよりに、計算で割り出している(一四九)。第一一八章「四分儀」では、四分儀を使って経度をわりだす毎日の儀式が描かれている(五〇〇一〇一)。

ここでは、ことにメダル状の図表が義足の上部にとりつけられていることに注目してみよう。エイハブの義足は、一方で、モービィ・ディック探索の原因となっている。というのも、エイハブの片脚は、ピーレグ船長によれば、「途方もねえマッコウ」(七二)にとられてしまったからだ。義足はまた、他方で、モービィ・ディック解体という復讐の目的を示唆するものとなる。というのも、それが「磨き上げられたマッコウクジラのあごの骨から作られた」ものだからだ(一二四)。こうして、ピーコッド号の位置確定は、その計算図表が義足にとりつけられていることによって、モービィ・ディック追撃の原因と目的と密接に結びついていく。

ところで、ピーコッド号で緯度確定に用いられているのが四分儀であり、その発展形態の八分儀でも六分儀でもないことにも、注意しておく必要があるだろう。四分儀(図 5 a)の歴史は古く、プトレマイオスまでさかのぼる。八分儀(図 5 b)は、ジョン・ハドレーによって一七三一年の『フィロソフィカル・トランザクションズ』に報告され、一七五〇年には一般に用いられるようになり、十九世紀の終わりまで使われている(「ハドレーの四分儀」と呼ばれているものは、実は八分儀である)。また、より精密度を増した発展形態である六分儀(図 5 c)は、一七七〇年頃には船上で使われるようになり、一八〇〇年以降はさかんに生産されるようになっていたのだが、値段が高かったため一般には広まらず、かわりに古い形態である四分儀や八分儀が残った。メルヴィル自身、『マーディ』の第二九章(九三)で四分儀と六分儀を使い分けていることから、ピーコッド号には意図的に旧式の航海器機が装備されているといえよう。16

以上のように航海器機の歴史を参照して『白鯨』テクストの詳細を検討すれば、第一三章での四分儀破壊は、ローギンが言うような「科学的機械によって航行することを拒否する」(一三八)以上の別の大きな意味を帯びてくるだろう。当時の航海器機の最先端クロノメターも最新式六分儀も持ち合わせていない「老朽船」ピーコッド号は、旧来の四分儀による太陽観測で緯度の計算をして大体の位置を割り出していたが、その四分儀を破壊することによって、「紐つき側程器」による推測航法での航海を余儀なくされる。この航海術、すなわちデッド・レコニングが、その後のピーコッド号の運命を予告するものとなることは明らかだろう。しかも、この紐つき側程器は、海中に投げ込んだとたん、紐が切れてしまうのだ(五二一)。もはや位置の確定が不可能となったピーコッド号は、自力で航路を決定することもままならない。

しかしながら、航海器機の遡行は、ここにとどまらない。第三五章の「カラスの巣」エ

ピソードが示すように、ピーコッド号には羅針儀磁石の局部引力(船上の鉄製品によって羅針盤の針が影響をうけること)を修正する器機は備え付けられていない(一五七)。したがって、第一二四章「羅針」で、雷によって磁石が狂ってしまうことは、致命的欠陥となる(五一七)。たとえエイハブが自前の羅針を調達したとしても、航海の危うさ危なさが軽減されることはない。こうして、ピーコッド号は、「やつはまったく磁石だ!」(四四一)というエイハブの叫びに象徴されるように、モービィ・ディックによって先導されていく。すでに四分儀破壊によって天体観測による航行も不可能であり、いまや羅針儀すら機能しないばかりか、翌日には紐つき測程器の紐も切れてしまう事態に、ピーコッド号はモービィ・ディックの磁力の支配に抗しようもないのだ。

その最終的な運命と習的地へと、ピーコッド号は航海術の歴史を遡っていく。船の名前が「今では古代メディア人のように絶滅した、マサチューセッツ・インディアンの高名な部族」(六九)のそれであったように、その航海は過去への回帰をともなった死出の旅となる。この意味で、ピーコッドの航跡を追うことは、とりもなおさず、「クジラ漁の始まったころ(the earlier days of the sperm whale fishery)」(一八二)へと我々を連れ戻す回帰と遡行の行程なのである。

3

さて、以上のようにピーコッド号の航海器機が歴史上の発展に逆行して過去の航海術へと遡行していくならば、その航路をいま現在の世界地図に投影して云々するだけでは不充分だろう。実のところ、この時代に書かれた多くの捕鯨航海記には、沿岸探検や新島の発見・消失とその追認が記録されている。たとえば、『白鯨』第五七章では、メンダーニャが一五六八年に発見し、フィゲロアが記録しているソロモン諸島は、「まだ未発見のまま」(二七一)であること述べられている。それらが再発見され宣教師たちがおくりこまれるのは、一九世紀後半のことである。

また、エドガー・アラン・ポウの『アーサー・ゴードン・ピムの物語』(一八三八年)でピムたちが海上を捜索するオーロラ諸島は、発見と消失を繰り返している。それらは、まず一七六二年にスペイン船オーロラ号によってフォークランド諸島の東に発見され、一七九〇年と一七九四年に存在が確認されている。けれども、その後、誰にも見つけられないまま姿をしてしまう。けれども、その位置は海図上で一八七〇年代まで記載されていたし、

何とまた一八五六年に発見されるのだ。もちろん、それらが存在しないことは、今となっては明らかである。17この間にも、『南極への航海』(一八二七年)を書いたイギリス人捕鯨船長ジェームズ・ウェデルはオーロラ諸島の探索に失敗したことを記しているし、『四つの航海』(一八三二年)のベンジャミン・モレルも、『世界一周旅行』(一八三三年)のエドモンド・ファンニングも失敗したことを書き残している。18

さらには、ウェデルやモレルがオーロラ諸島の存在の典拠としたものが、一八〇九年の「マドリッド水界地理学会」会報での発見報告であることにも、注意しておこう。というのも、実はこの学会と会報自体が虚構であった可能性も、否定できないからだ。ちなみに、スペイン国立図書館には、いずれの資料も存在していない。19 しかも、「南海のほら吹き男爵」の異名を持つモレルが、どのくらい信用できるのかという問題も残っている。また、モレルの「手記」は、その出版社ハーパー兄弟社の意向によって、サミュエル・ウッドワースが代作したものだということもわかっている。おまけに、彼の四番目の航海に同行した妻アビー・ジェーン・モレルの『旅行記』(一八三三年)にいたっては、女性読者を想定していたにもかかわらず、サミュエル・L・ナップ大佐によって代作されるというジェンダー転換がおこっている。20オーロラ諸島にまつわるこれらの挿話は、あたかも「事実」のみを書いていると想定される旅行記も、実はかなり信憑性を疑われるものであったことを例示するだろう。

あるいは、一八三八年から一八四二年のチャールズ・ウィルクス指揮による合衆国探検隊(U. S. Exploring Expedition、通称 Ex Ex)をとりあげてもいいだろう。この探検航海は、明らかに拡張主義の使命(ことに捕鯨基地確保)を視野にいれたものだったが、その大きな目的のひとつは、海図および内陸探検に必要な地図の整備にほかならない(図 6 a)。21 スミソニアン博物館編の『威風堂々の航海者たち』によれば、ウィルクスに与えられた指令は「あやふやな島や浅瀬の存在を確固とする」(一六九)ことであった。また、海図作成に細心の注意を払ったにもかかわらず、サンフアン島(現ワシントン州北西部)付近に記されている「ゴードン島」と「アドルフ島」は、一八五三年の調査で「存在しない」ことが確認されている(図 6 b)。つまりは、領土拡張の基盤となる地図ですら完備されていなかったことになるだろう。しかも、デイヴィド・マクゴニアとリン・ウッドワースの『南極』によれば(四〇七)、ウィルクスは「故意についた嘘」によって軍法会議にかけられている(重罪には問われなかった)。大量の人員と多額の税金をつかい、国家の威信をかけた探検であったにもかかわらず、エクス・エクスの報告は、その信憑性を問われることになっ

たのだ。ウィルクスに代表されるこの時代の「アメリカ拡張主義」も、事実や詳細を取り 上げてみれば、不確かで怪しげな情報によってなりたっていたことになる。

しかも、そもそもこの探検航海の必要性を政府に陳情したのが、ジェレマイア・N・レイノルズであったことも特記に値するだろう。このレイノルズ(ウィルクス探検隊に参加したウィリアム・レイノルズとは無関係)は、今ではポウの『ピム』との関連で言及される以外に思い出されることはほとんどないが、当時はちょっとした有名人だった。というのも、彼は自ら参加した世界一周旅行の記録『合衆国フリゲート船ポトマック号の航海』(一八三五年)の著者として知られていただけではなく、翌年には下院議会で演説を許されるほど熱心な「シムズの穴」の信奉者であったからある。レイノルズの提案した合衆国探検隊の目的のひとつは、南極海域の調査だったが、それは、何と、この穴を探しに行くことを意味していた。22

「シムズの穴」を提唱したのは、一八一二年戦争の英雄ジョン・クリーヴ・シムズだったが、彼によると、地球の両極には大きな穴が通じており、その穴には地中人が住んでいる。だから、北極あるいは南極探検、というわけだ(図7a)。シムズ自身、自説を携えそのころ各地に誕生していた講演会を廻ったし、そのための地球儀も作られていた(図7b)。また、一八二〇年には、アダム・シーボーン船長の手になる『シムゾニア』なる「航海記」までが出版されるにいたった。今では、この「人類初の男の名」を持ち「海で生まれた」ことを誇示する怪しげな名前の船長は、実はシムズと特定されているし、この説もまた噴飯ものと笑えもしようが、その当時には両極地方の精密な地図さえなかったことを考えれば、これを単なる法螺話と片付けるだけでは不充分だろう。23

あるいはまた、白鯨』の「抜粋」に登場し、捕鯨の資料を提供した『極地報告』(一八二〇年)の執筆者スコーズビーが、一八二三年に出版した『北洋捕鯨』から二葉の地図を比較してみよう。最初の地図(図8a)が一八二二年の探検の結果を示す海岸線の地図で、この地図(四角で囲った部分)をグリーンランド全体の地図に組み込んだのが次の地図(図8b)である。24もちろんスコーズビーは鯨捕りであって地図製作者ではなかったことを割り引かなければならないのだが、それにしても海岸線でさえ途切れ途切れ、内陸部はまったく白紙のままとなっていることに注意を喚起しておく必要があるだろう。ことほどさように島が発見され消失し再発見され再消失し、海岸線でさえその輪郭を把握できていないとしたならば、利益最優先で最低限の装備すらままならない捕鯨船が正確な地図や海図を装備していたとは考えにくい。

しかも、捕鯨船は、明らかに探検隊とは違った地理感覚を持っていたと考えられる。たとえば、アイヴァン・T・サンダソンの捕鯨史『クジラを追え』(一九五六年)に収録されている興味深い地図を見てみよう。最初の地図(図9a)はサンダソン自身の手になるナンタケット捕鯨者の心象地理による大西洋地図(十八世紀末)であり、次の地図(図9b)もサンダソン自身の手になる、イギリスの有名な捕鯨会社サミュエル・エンダビー社が見た太平洋の地図(一八二〇年代)となっている。25この会社は、『白鯨』でモービィ・ディックに二度会ったと報告するイギリスの捕鯨船の名前でもある(一〇〇~一〇一章)ことからもわかるように、当時の捕鯨を先導する会社であった。サンダソンの最初の地図では、ナンタケットが下部中央にあり、メルカトール地図での南北がここではやや東よりに逆転している。次の地図では、ホーン岬を巡回した捕鯨船が、メルカトール地図では東西に描かれる大西洋を「下っていく」様子が描かれている。これらの地図を見る限り、捕鯨船の航路は海上に描かれたものであり、陸地は目印あるいは中継点にすぎない。

さて、これらの地図をメルカトール図法による世界地図(図1 a & b)と比較してみれば、その違いは明らかだろう。これらのメルカトール図法の地図が示すのは、すでに緯度も経度も確定され、海岸線も場所の呼称も定まった(あるいは「定まった」という前提の)世界である。したがって、この地図に十九世紀前半の捕鯨船の航跡を書き込むことは、とりもなおさず現在の世界観でピーコッド号を解釈することになるだろう。

当時の老朽捕鯨船にどのような地図あるいは海図が装備されていたかについては、特定不可能、あるいはとても難しい。けれども、『白鯨』の第四四章「海図」の冒頭で、エイハブが海図に「これまで空白だった部分に鉛筆で新しい線を引く」(一九八)場面から、少なくともピーコッド号上にはモービィ・ディック追跡のための海図が存在していたことはわかるだろう。とはいえ、その海図に書きこまれる線は、うずたかく積もれた古い航海日話をもとにしたものだ。つまり、ここでの海図は、実際にクジラがいる場所を特定するものではなく、書かれた「情報」(その信憑性は問われていない)を転写したものとなっているのである。

ところで、この「海図」の章には原註がついていて、『白鯨』出版時に「経度五度緯度五度ごとに区切った地域」におけるクジラ分布図表が作成されていることが述べられている (一九九)。一八五一年四月十六日号のワシントン国立観測所発行の通達に、モーリー中尉のクジラ分布図表が「完成されつつある」という記事が掲載されているというのだ。この通達と思われる文書は、一八五一年五月付国立観測所の「風と潮流の海図に付随した説明

と航海心得」(Explanations and Sailing Directions to Accompany the Wind and Current Charts) の二〇八ページに掲載されている図表(図 10) と思われる。「チャート」は「チャート」でも、海図ではなく統計図表だったわけだ。26さらには、原註の「モーリー中尉」の正体はマシュー・フォンテン・モーリーと思われるが、実際の分布図表は、二人のアメリカ捕鯨船船長の記録と三人の海軍中尉による統計処理によって作成されている。この図表から読みとれるのは、統計にとられたクジラが南大西洋上の「西経」に偏っているということである。もちろん、このクジラ「偏在」が、コッド岬付近から出航した捕鯨船の南進、さらには海上での経度確定の難しさと無関係ではないことは、自明の理である。

以上のような事実からわかるのは、一八五〇年代半ばのクジラ情報はとても豊富かつ正確であったとはいえず、むしろやっと集積されるようになったということだろう。そして、このような状況から見れば、サンダソン提案になる時代限定・地域限定の捕鯨地図は、きわめて示唆的だといえる。それは、精密とは言いがたい測量器機によって作られた不正確な海図を頼りに、経度を確定する器機も持たず、大雑把な位置しか分からないまま、多くの船が方向を見失い、難破し、最悪の場合には永遠に戻らなかったという時代コンテクストである。

同時代の海難事故のなかで最も有名なのが、一八二〇年十一月二〇日、鯨によって難破させられた捕鯨船エセックス号だろう。この歴史上の事実は、生還した一等航海士オーウェン・チェイスによって出版され(一八二一年)、『白鯨』のみならず、ポウの『ピム』にも着想を与えているのだが、その船員たちの漂流は飢えと渇きとの戦いだったのと同時に、見渡す限り何もない海上をいつ果てるともない試練の旅を続けていく絶望感との戦いでもあった。皮肉なことに、途中三人の船員たちを残していった島をデューシー島と誤認しないでヘンダソン島と正しく認識していれば(両島はほぼ同じ緯度にあるので、経度確定に誤りがあったことになる)、至近距離にあるピトケアン島(バウンティ号の反乱者たちが棲みついた島)にたどりつけたかもしれなかった。けれども、もちろん本船から持ち出した羅針盤と四分儀とナサニエル・バウディッチの『新アメリカ実用航海術』(図11 a & b)だけでは正確な位置確定は不可能だったし(実際には一六〇キロ近くずれていた)、しかもバウディッチの『実用航海術』には肝心のピトケアン島は記載されていなかった(どこが「実用」なのかという疑問が残らないわけではない)。27

チェイスらの見た海はまた、ピップの見た「まだ歪んでいない原始の世界に棲息する、 見慣れない影かたちが跋扈する」(四一四)海でもあった。それはまた、最初の鯨捕りペル セウスの「騎士道的な時代」(三六一) への回帰の旅であり、「真の鯨捕りはイロクォイ族 と同じくらい野蛮である」(二七〇) ことを是認する過去への遡行でもあった。

したがって、イシュメールが旅立つのは「この水陸からなる球体の三分の二をわがものとするナンタケット人」(六四)の港でなくてはならない。そこは、陸上の「国家」という概念がもはや通用しないか、少なくとも国境線が明確には引かれていない太古の海上世界へと出帆する地となる。そして、彼の乗り込む船は、老朽船で、しかも絶滅したインディアンの名前を持つピーコッド号でなくてはならない。さらには、クジラは哺乳類とする描写にもかかわらず、「鯨学」でクジラを「魚」に分類することによって、当時最先端のリンネやキュヴィエの自然誌への「進行」を回避し、聖書のヨナ書へと意図的に回帰していく。『白鯨』が描いている世界は、原初の鯨捕り物語を再編成することによって成立している。

ナンタケット以外のどこから、あの原初の鯨捕りである赤い肌の男たちが最初にカヌーに乗って出撃し、レビヤタンを追跡したというのだろうか。そしてまた、ナンタケット 以外のどこから、最初の怖れを知らぬ小さな帆船が出航し[中略]、その船首の先から銛を投げつけるような危険を冒したというのだろうか。(八) 1本稿は、Herman Melville, *Moby-Dick* を航海器機(navigational instruments)に焦点を絞って論した"The Earlier Days of the Sperm Whale Fishery An Instrumental Approach to *Moby-Dick*," *Studin Iaponici ad Honorem Wolfgang Viereck*, ed Guido Oebel (Munich Lincom GmbH, 2006)(英文、近刊)に大幅に加筆改稿したものである。本稿を書くにあたっては、八木敏雄氏の岩波文庫版『「白鯨――または、モービィ・ディック』(岩波書店、二〇〇四年)の翻訳と註釈を参照し、またメールによる教唆を受けた。ここに記して、謝意を表す。本稿はまた、二〇〇五年九月二三日に開催された筑波大学アメリカ文学会シンポシウム「Epistemological Framework と英米文学」(科学研究費プロジェクト)で口頭発表された「クジラ魚の始まったころ」を改稿したものである。このシンポジウムにご出席くださった方々、質疑応答にご参加くださった方々に、厚く御礼を申し上げる。

² Herman Melville, *Moby-Dick, or The Whale*, eds, Harrison Hayford, Hershel Parker and G Thomas Tanselle (1851; Evanston & Chicago: Northwestern UP & Newberry Library, 1988). 引用は すべてこの版により、ページ数は括弧に入れて示す。

検索には、次のサイトも用いた。 (http://www.princeton.edu/~batke/moby/ghindex.html)

Michael Paul Rogin, Subversive Genealogy The Politics and Art of Herman Melville (New York-Knopf, 1983)

4Thomas Beale, The Natural History of the Sperm Whale Its Anatomy and Physiology—Food Spermaceti—Ambergris—Rise and Progress of the Fishery—Chase and Capture—"Cutting In" and "Trying Out"—Description of the Ships, Boats, Men, and Instruments Used in the Attack. With an Account of Its Favourite Places of Resort, to Which is Added, a Sketch of a South-Sea Whaling Voyage, Embracing a Description of the Extent, as Well as the Adventures and Accidents That Occurred During the Voyage in Which the Author was Personally Engaged (1839, London: Holland, 1973), Frederick Debell Bennett, Narrative of a Whaling Voyage Round the Globe, from the Year 1833 to 1836, Comprising Sketches of Polynesia, California, the Indian Archipelago, etc., with an Account of Southern Whales, the Sperm Whale Fishery, and the Natural History of the Climates Visited (1840; Amsterdam Israel, 1970), J Ross Browne, Etching of a Whaling Cruise, with Notes of a Sojourn on the Island of Zanzibar, to Which is Appended a Brief History of the Whale Fishery, its Past and Present Condition (1846, Cambridge Harvard UP, 1968), Henry T Cheever, The Whale and His Captors; or, The Whaleman's Adventures, and the Whale's Biography, as Gathered on the Homeward Cruise of the "Commodore Preble" (New York Harper, 1848)

5 アレクサンダー・スターバックの『アメリカ捕鯨史』によれば、一八四二年の船舶保持数は、ニュー・ベッドフォードの6 5 隻に対して、ナンタケットは1 6 隻である。ナンタケットの歴史については、Obed Macy, History of Nantucket が本稿執筆中には入手できなかったため、以下の鯨学および捕鯨についての文献を参照した。Anon, "The American Whale Fishery," Hunt's Merchants' Magazine (Nov 1840) 361-94; Alexander Starbuck, History of the American Whale Fishery (1878; Secaucus, NJ Castle, 1989), Walter S Tower, A History of the American Whale Fishery (Mansfield Centre, CY Martino, 1907), Anon, Whale Fishery of New England An Account, with Illustrations and Some Interesting and Amusing Anecdotes, of the Rise and Fall of an Industry which has Made New England Famous throughout the World (Boston State Street Trust Company, 1915), Charles Boardman Hawes,

Whaling Wherein are Discussed the First Whalemen of Whom We Have Record; The Growth of the European Whaling Industry, and its Offspring, the American Whaling Industry; Primitive Whaling among the Savages of North America; the Various Manners and Means of Taking Whales in All Parts of the World and in All Times of its History, The Extraordinary Adventures and Mishaps That Have Befllen Whalemen the Seas Over; The Economic and Social Conditions That Led to the Rise of Whaling and Hastened its Decline, and, in Conclusion The Present State of the Once Flourishing and Lucrative Industry (Garden City, NY Doubleday, Page & Co, 1924); Clifford W Ashley, The Yankee Whaler (New York Dover, 1926, 1938), E. Keble Chatterton, Whalers and Whaling The Story of the Whaling Ships up to the Present Day (Philadelphia J B Lippincott, 1926), Elmo P Hohman, The American Whaleman (1928, Clifton, Augustus M. Kelley, 1972), Albert Cook Church, Whale Ships and Whaling (New York Bonanza Books, 1938), Tyrus Hillway, Melville and the Whale (Stonington Stonington Publishing, 1950), E J Slijper, Whales, trans A. J Pomerans (New York) Basic Books, 1962), Charles M Scammon, The Marine Mammals of the North-western Coast of North American and the American Whale Fishery (Riverside Manessier, 1969), J. T. Jenkins, A History of the Whale Fisheries from the Basque Fisheries of the Tenth Century to the Hunting of the Finner Whale at the Present Date (Port Washington, NY Kennikat, 1971), Robert Costello, The Whale (New York Crescent, 1975), L Harrison Matthews, The Natural History of the Whale (New York Columbia UP, 1978), Robert McNally, So Remorseless a Havoc: Of Dolphins, Whales and Men (Boston Little, Brown & Co, 1981), Daniel Vickers, "The First Whalemen of Nantucket," William and Mary Quarterly 40 (Oct 1983) 560-83; Richard Ellis, Men and Whales (New York Knopf, 1991), Lance E Davis, Robert E Gallman & Karin Gleiter, In Pursuit of Leviathan Technology, Institutions, Productivity, and Profits in American Whaling, 1816-1906 (Chicago U of Chicago P, 1997), Margaret S Creighton, Rites & Passages The Experience of American Whaling, 1830-1870 (Cambridge Cambridge UP, 1995), K L Evans, Whale! (Minneapolis U of Minnesota P, 2003), 森田勝昭『鯨と捕 鯨の文化史』名古屋大学出版会、一九九四年,奈須敬二『鯨と海のものがたり』成山堂書店、二〇〇二年; 山下埗登『捕鯨』(全二巻)法政大学出版局、二〇〇四年。

⁶ Francis Allyn Olmsted, Incidents of a Whaling Voyage To Which are Added Observations on the Scenery, Manners and Customs, and Missionary Stations, of the Sandwich and Society Islands (1841, New York Bell, 1964)

7 Wilson L Heflin, "Melville and Nantucket," Moby-Dick: Centennial Essays, ed Melville Society (Dallas Southern Methodist UP, 1953), 165·79, John Bryant, "Moby-Dick as Revolution," The Cambridge Companion to Herman Melville, ed Robert S Levine (Cambridge Cambridge UP, 1998), 65·90, Jay Leyda, The Melville Log'A Documentary Life of Herman Melville, 1819·1891, vol 1 (New York Cordian, 1961), 452 メルヴィルと捕鯨については、次の文献を参照した。Hillway, Melville and the Whale. Thomas Philbrick, "Melville's 'Best Authorities," Nineteenth·Century Fiction 15 (Sept 1960) 171·79, David Jaffé, The Stormy Petrel and the Whale Some Origins of Moby-Dick (Baltimore' Port City, 1976); Gill B Gidmark, Melville Sea Dictionary' A Glossed Concordance and Analysis of the Sea Language in Melville's Nautical Novels (Westport' Greenwood, 1982), Wilson Heflin, Herman Melville's Whaling Years, eds Mary K Bercaw Edwards and Thomas Farel Heffernan (Nashville Vanderbilt UP, 2004)

8 『白鯨』の無寄港航海を、同じ著者になる『タイピー』『マーディ』で描写されている寄港地の異国情緒との対比で指摘する必要性を示唆したのは、山口善成(高知女子大学)である。ここに記して、謝意を表する。一八二〇年代から一八四〇年代にかけて、捕鯨記あるいは捕鯨に関係する旅行記は数多く出版されているが、そのほとんどが航海記録であると同時に、寄港地の異国情緒や風物を伝えるものであり、またその異国情緒風物を副題に入れることによって「売り物」にしようとしている。しかしながら、異なる著者が異なる土地の異なる風物を伝えているにもかかわらず、多くは退屈なほど似通っている。

9 クロノメターについては、鷲津浩子『時の娘たち』(南雲堂、二〇〇五年)の参考文献「II 個別項目 3 クロノメター・経度の確定」を参照のこと。それ以外の航海器機については、以下の文献を参照した。Gerard L'E Turner, Nineteenth・Cantury Scientific Instruments (Berkeley & Los Angeles U of California P, 1983), William Goetzman, New Lands, New Men America and the Second Great Age of Discovery (New York Viking, 1986), Robert Bud, Deborah Warner & Jean Stephen Jonston, eds, Instruments of Science An Historical Encyclopedia (New York and London Garland, 1998); Gerard L'E Turner, Scientific Instruments 1500・1900 An Introduction (Berkeley & Los Angeles U of California P, 1998), Derek Wilson, The Circumnavigators, a History The Pioneer Voyagers Who Set off around the Globe (New York Carroll & Graf, 2003); Alan Gurney, Compass: A Story of Exploration and Innovation (New York and London W W. Norton & Co., 2004), 荒俣宏『年表で読む荒俣宏の博物 探検史――あの珍種この珍種が発見された探検航海を年表で辿る』 平凡社、二〇〇〇年, 飯島幸人『航海技術の歴史物語――帆船から人工衛星まで』 成山堂書店、二〇〇三年。

10 本稿に使われている図版処理は、杉本裕代 (筑波大学大学院生) によるものである。ここに記して、謝意を表する。地図・海図については、以下の文献を参照した。John Noble Wilford, The Mapmakers The Story of the Great Pioneers in Cartography from Antiquity to the Space Age (New York Vintage, 1982), Peter Whitfield, The Image of the World 20 Centuries of World Maps Rpt. (San Francisco Oinegrabate Artbooks, 1994), Atlas of Exploration (New York Oxford UP, 1997), Carl Moreland & David Bannister, Antique Maps, 3rd ed. (London Phaidon, 1998), Denis Cosgrove, ed Mappings (London Reaktion Books, 1999); Norman J W Thrower, Maps & Civilization Cartography in Culture and Society, 2nd ed (Chicago U of Chicago P, 1999), David N. Livingstone & Charles W J Withers, Geography and Enlightenment (Chicago U of Chicago P, 1999)

11 William Scoresby, Jr, Journal of a Voyage to the Northern Whale-Fishery, Including Researches and Discoveries on the Eastern Coast of West Greenland, Made in the Summer of 1820, in the Ship Baffin of Liverpool (Edinburgh Archibaold Constable & Co & London Hurst, Robinson & Co., 1823), James Weddell, A Voyage towards the South Pole Performed in the Years 1822-24, Containing an Examination of the Antarctic Sea (London Longman, Rees, Orme, Brown, and Green, 1825, 2nd ed, 1827, Devon David & Charles Reprints, 1970)

- 12 鯨学についての文献は、上記(註 5)を参照のこと。Edouard A Stockpole, *The Sea·Hunters The New England Whalemen During Two Centuries 1635-1835* (Philadelphia Lippincott, 1953).
 - 13 海洋航海の歴史・緯度の確定・経度の確定については、上記(註9)(註 10)を参照のこと。
- 14 クロノメターによらない「出発地の時刻の保持」に関する種々の大胆な提案については、『時の娘たち』を参照のこと。
- 15 口頭発表では、『白鯨』における航海器機の歴史的逆行を「退化」と呼んでいた。それは、単にピーコット上の航海器機がしだいに昔のそれへと置き換えられていくことをさしているのであって、ターウィ

ニズムの「進化」の反対概念でも、文化・文明に対する優劣価値判断でもなかった。この概念の定義が曖昧であり、再定義が必要であることを指摘したのは、佐藤憲一(筑波大学大学院生)である。ここに記して、謝意を表す。したがって、本稿では多義に捉えられる「退化」を使用することを避け、「回帰」あるいは「遡行」と書き改めている。

¹⁶ Herman Melville, Mardi, and A Voyage Thither, eds Harrison Hayford, Hershel Parker & G Thomas Tanselle (1849, Evanston & Chicago: Northwestern UP & Newberry Library, 1970)

17 南アメリカ沖「オーロラ諸島」の発見・消失・再発見・再消失を、エドカー・アラン・ポウの『アーサー・コードン・ピムの物語』との関連で考察したものとしては、次の論文を参照のこと。Washizu, "Mapping the Fictitious Verifiability of Testimony in the Antarctic Explorations," *Return to Postmodernism* Theory—Travel Writing--Autobiography, ed Klaus Stierstrofer (Heidelberg Winter, 2005), 23-57 (英文)

18 Edmund Fanning, Voyages Round the World: With Selected Sketches of Voyages to the South Seas, North and South Pacific Oceans, China, etc., Performed under the Command and Agency of the Author, Also, Information Relating to Important Late Discoveries; Between the Years 1792 and 1832, Together with the Report of the Commander of the First American Exploring Expedition, Patronised by the United States Government, in the Brigs Seraph and Annawan, to the Southern Hemisphere (New York Collins & Hannay, 1833, Upper Saddle River Gregg, 1970), 428-30

19 スペイン国立図書館での検索は、レオナルド・デ・アリサバラガ・イ・プラド(Leonardo de Arrızabalaga y Prado)

氏によるものである。ここに記して、謝意を表す。

²⁰ Benjamin Morrell (ghostwritten by Samuel Woodworth), A Narrative of Four Voyages, to the South Sea, North and South Pacific Ocean, Chinese Sea, Ethiopic and Southern Atlantic Ocean, Indian and Antarctic Ocean, from the Year 1822 to 1831, Comprising Critical Surveys of Coasts and Islands, with Sailing Directions, and an Account of Some New and Valuable Discoveries, Including the Massacre Islands, Where Thirteen of the Author's Crew Were Massacred and Eaten by Cannibals, to Which is Prefixed a Brief Sketch of the Author's Early Life (1832, Ann Arbor: UMI, 2004), Abby Jane Morrell [ghostwritten by Colonel Samuel L Knapp], Narrative of a Voyage to the Ethiopic and South Atlantic Ocean, Indian Ocean, Chinese Sea, North and South Pacific Ocean (New York J & J Harper, 1833, Upper Saddle River Gregg Press, 1970)

21 Ralph E Ehrenberg, John A. Wolter and Charles A Burroughs, "Surveying and Charting the Pacific Basin," Magnificent Voyagers' The U S Exploring Expedition, 1838·1842, eds Herman J Viola and Carolyn Margolis (Washington, D C Smithsonian Institution, 1985), 164·187 ウィルクス 探検隊については、上記の(註7)(註9)にあげたもののほか、以下のものを参照した。Philip I Mitterling, "The United States Exploring Expedition 1838·1842," Americans in the Antarctic to 1840 (Urbana U of Illinois P, 1959, Goezman, New Lands, New Men. David McGonial and Lynn Woodworth, Antarctic The Complete Story (London: Frances Lincoln, 2003), Nathaniel Philbrick, Sea of Glory America's Voyage of Discovery The U S Exploring Expedition, 1838·1842 (New York Harper Collins, 2004)

22 ジェレマイア・レイノルズに関しては、上記(註4)(註5)(註21)のほか、以下の文献を参考にした。Jeremiah N Reynolds, Voyage of the United States Frigate Potomac under the Command of Commodore John Downes, during the Circumnavigation of the Globe, in the Years 1831,1832,1833.

and 1834; Including a Particular Account of the Engagement at Quallah-Battoo, on the Goast of Sumatra, with All the Official Documents Relating to the Same (New York, Harper & Brothers, 1835, Ann Arbor, UMI, 2004), Raynolds, Pacific and Indian Oceans or, The South Sea Surveying and Exploring Expedition Its Inception, Progress, and Objects (New York Harper & Brothers, 1841, Ann Arbor UMI, 2004)

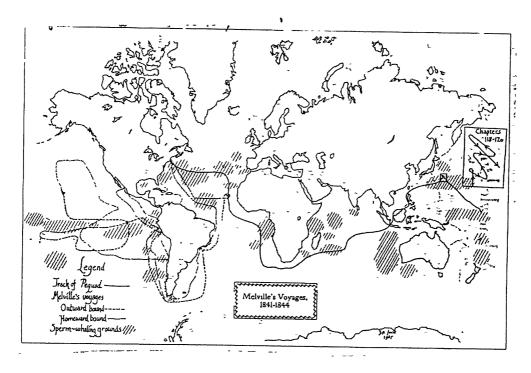
23 ポウの『ピム』の関連での「シムズの穴」については、次の論文を参照のこと。Washizu, "Mapping the Fictitious" 「シムズの穴」については、上記 (註9) のほか、以下の文献を参考にした。Paul Collins, Banvard's Folly Thirteen Tales of Renowned Obscurity, Famous Anonymity, and Rotten Luck (New York' Picador, 2001), 54·70, Captain Adam Seaborn [pseudonym of Summes], Symzonia A Voyage of Discovery (New York Seymour, 1820, Gainesville Scholars' Facsimiles & Reprints, 1965).

²⁴ Scoresby, Journal of a Voyage to the Northern Whale Fishery, 1 (図 6a) & 326 (図 6b).

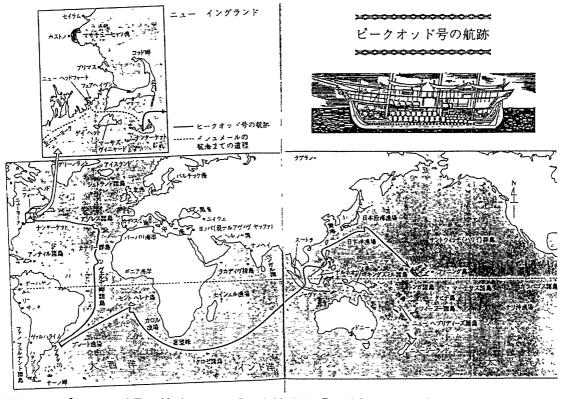
25 Ivan T Sanderson, Follow the Whale (Boston' Little, Brown & Co, 1956), 215 (図 7a) & 233 (図 8a) これらのサンダソン地図を再録したのが、森田『鯨と捕鯨の文化史』(一九九四年)と山下『捕鯨』第二巻(二〇〇四年)である。両者ともそれぞれの改訂を加えているが、基本的にサンダソンの地図を変えるものではない。たとえば、森田の図版は、(図 7 b & 図 8 b) で示したものであり(六六&八五)。山下の図版は(図 7 c & 図 8 c) である(二五&四九)。この日本語資料が原典のサンタソンと違うのは、原典を「踏襲」しながらも、イデオロギー色の強い解釈をうちだしている点である。たとえば、森田によればナンタケット捕鯨者の心象地図は「捕鯨船団の拡張運動」(八三)をあらわすものであり、山下によれば捕鯨船は人種差別(二二)と「搾取のシステム」(七七)の場である。確かに捕鯨文化史や捕鯨経済学の見地からは、そのような解釈も可能だろうが、それを『白鯨』というテクストに無批判にあてはめることはできないだろう。既述のとおり、『白鯨』にはむしろそのような解釈を転覆させる装置が施されているからである。

26 この「クジラ分布図表」についての情報は、すべて吉田恭子 (慶應義塾大学) の調査による。驚くべき発見も、「チャート」の現物も、彼女の協力なくしては叶わぬ夢であった。ここに特記して、厚い謝意を表す。出典 National Observatory, "Notice to Whalemen," *Explanations and Sailing Directions to Accompany the Wind and Current Charts* (Washington, 1851), 207-208

27 「エセックス号」については、上記の(註5)にあげた捕鯨の歴史関係のほか、以下の文献を参照した。Owen Chase, The Wreck of the Whaleship Essex 'A Narrative Account by Owen Chase, First Mate, ed Lola Haverstick & Betty Shepard (1821, San Diego Harcourt Brace, 1993); Thomas Nickerson, Owen Chase and Others, The Loss of the Ship Essex, Sunk by a Whale, eds Nathaniel Philbrick & Thomas Philbrick (New York Oenguin, 2000), Nathaniel Philbrick, In the Heart of the Sea The Tragedy of the Whaleship Essex (New York Penguin, 2000) [ナサニエル・フィルブリック、相原真理子訳『復讐する海』(集英社、2003年)].

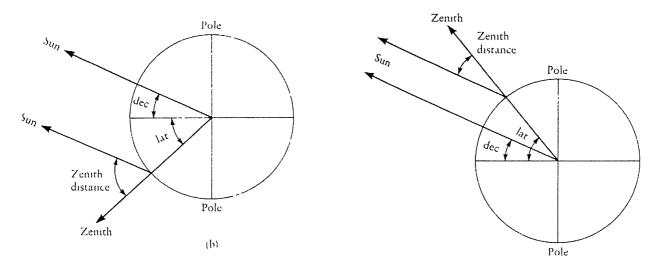


(図 1a) Melville's Voyages, 1841·1844. [Herman Melville, *Moby-Dick*, ed. Hershel Parker & Harrison Hayford (New York: Norton, 2002), inset]



(図 1b) ピーコッド号の航跡。 [八木敏雄訳『白鯨』(岩波書店、2004年)、挿画。]

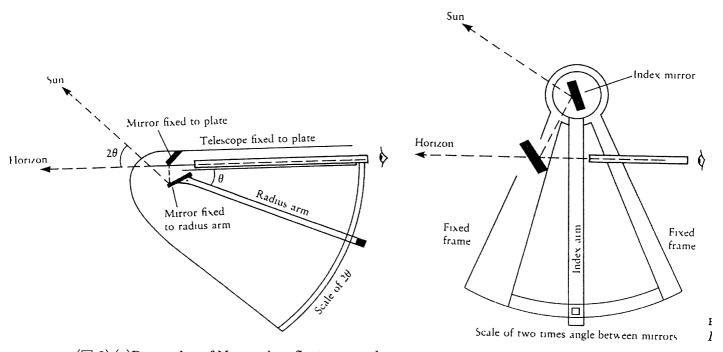
(図2) Latitude by noon sight



(a) summer in Northern hemisphere

(b)winter in Southern hemisphere.

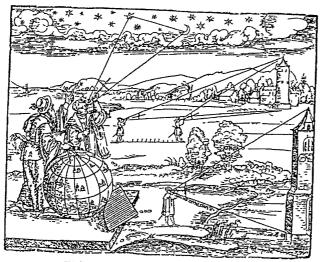
[J E. D Williams, From Sails to Satellites The Origin and Development of Navigational Science (Oxford Oxford University Press, 1994), 33].



(図 3) (a)Principles of Newton's reflecting quadrant

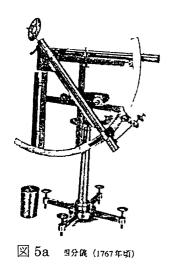
(b)Principles of Hadley's quadrant.

[Ibid, 98 & 99] These two illustrates in fact octants, an improved version of the quadrant



四分儀 六分儀 八分議による太陰距離測定 - 足茶物高度計測

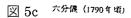
図 4 Peter Apian, Introductio Geographica Petri Apiani in Docitissimas Verneri Annotationes, title page. [William J. H. Andrewes ed., The Quest for Longitude (Cambridge Collection of Historical Scientific Instruments, 1996), 151.]

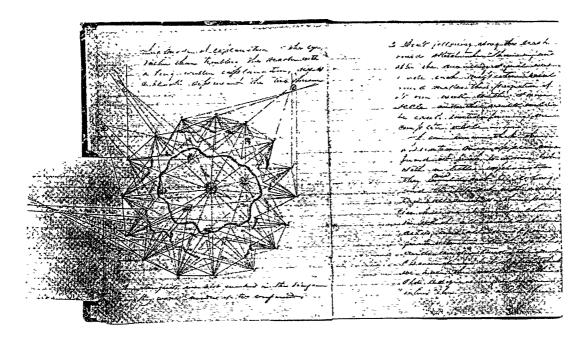




八分儀の絵を使った名朝(1783年頃)

- 図 5a Twelve-inch astronomical quadrant by John Bird, c 1767. Science & Society Picture Library [Robert Bud and Deborah Jean Warner, Instruments of Science An Historical Encyclopedia (New York: Garland, 1998), 502]
- 図 5b Trade card, depicting an octant in use by R. Rust, C 1783. Science & Society Picture Library. [Ibid, 420.]
- 図 5c Sextant by Troughton,
 with double frame design, c. 1790.
 Science & Society Picture Library
 [Ibid., 531]





🗵 6a Ralph E Ehrenberg, John A Wolter and Charles A Burroughs, "Surveying and Charting the Pacific Basin," *Magnificent Voyagers The U S Exploring Expedition, 1838-1842*, eds Herman J Viola and Carolyn Margolis (Washington, D C Smithsonian Institution, 1985), 177

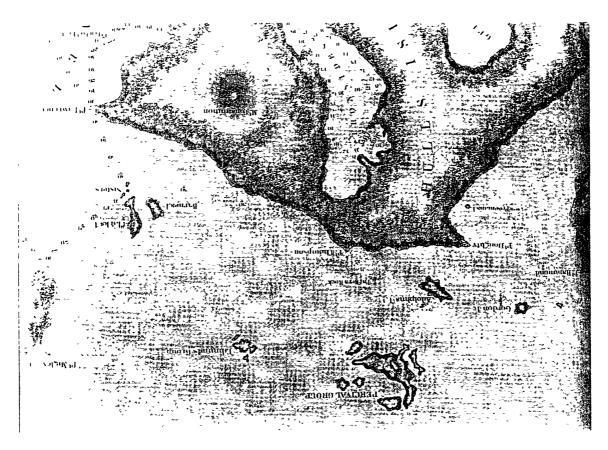


Chart of Wilkes's San Juan Island region in the Pacific Northwest with inset detail showing "Gordon" and "Adolphus" islands, which were determined by the U-S Coast Survey in 1853 to be nonexistent. It is believed they had been deliberately added to the original survey by a disgruntled midshipman. Courtesy Geography and Map Division, The Library of Congress

☑ 6b Ralph E Ehrenberg, John A Wolter and Charles A Burroughs, "Surveying and Charting the Pacific Basin," *Magnificent Voyagers The U S Exploring Expedition, 1838-1842*, eds Herman J Viola and Carolyn Margolis (Washington, D C Smithsonian Institution, 1985), 173

SECTIONAL VIEW OF THE EARTH

SHOWING THE

OPPNISGS AT THE POLES

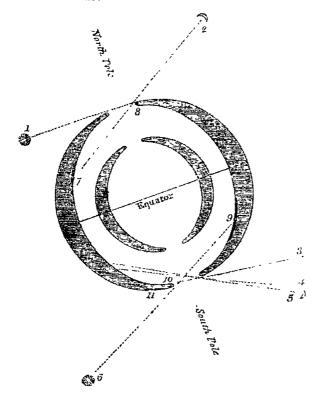


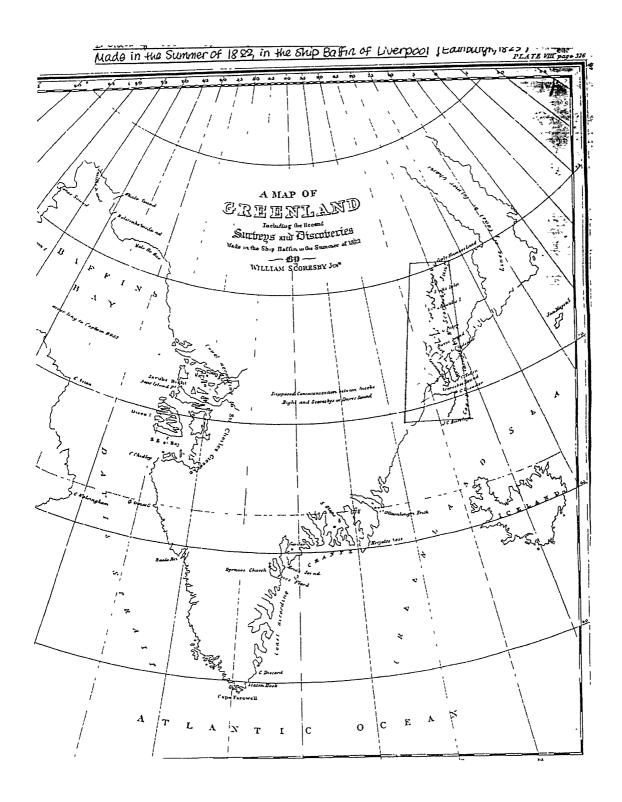
図 7 a



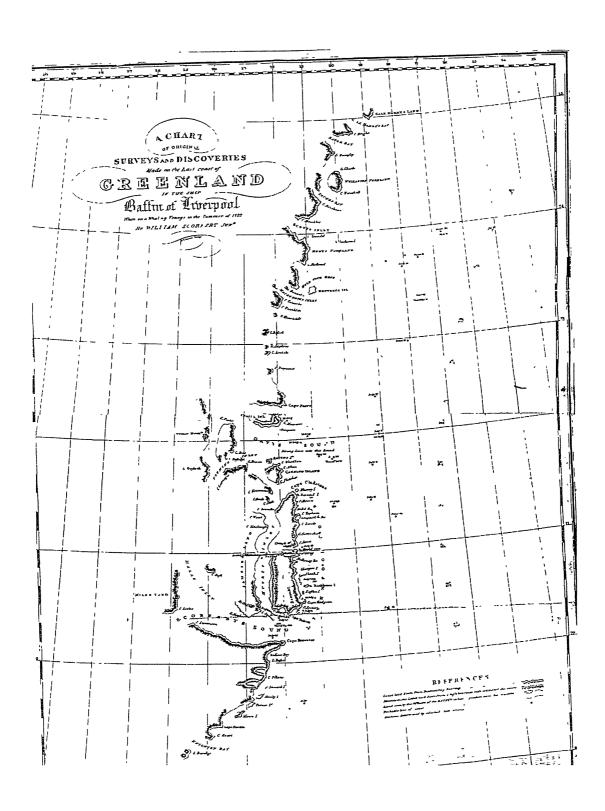
図 7 b

I thin there's Sorm esswooden model of the globe sort boses in the poles of ad-

🗵 8b A map of Greenland including the recent surveys and discoveries made in the ship Baffin in the summer of 1822 [Ibid., 326.]



⊠ 8a A chart of original surveys and discoveries made on the east coast of Greenland in the ship Baffin of Liverpool when on a whaling voyage in the summer of 1822 [William Scoresby, Jr, Journal of a Voyage to the Northern Whale-Fishery (Edinburgh Archibald Constable & Co & London Hurst, Robinson & Co, 1823), 1]



The Central Atlantic, as Seen by the Nantucketers

The eastern senboard of North America runs more nearly west to est than north to south, and it hangs far out over the "top" of the Atlantic oceans if we look at a map directed at the North Pole Nantucket Island thus faces due south and directly toward the great island of Hispaniola, with Berniuda slightly to the left Straight ahead and not far offshore, the Gulf Stream runs from right to left in a concentrated flow

Sperm whales are warm-water and tropical animals, and since it was in their pursuit that the Nantucketers first earnestly went to sea, they naturally set straight out to the south from their shores. This led them, by easy and progressive stages, first to the ocean off the Carolinian coasts, thence right into the Caribbean, half left to the northern coast of South America, and, skirting this, to the narrow neck between the North and South Atlantics. The hop from there to the west coast of Africa was predicated by following the whales, but was complicated by the south-east trade winds which tended always to force them back up north towards Europe Moreover, it was by taking this easy course homeward that they stumbled upon the great Canary Islands, Morocco, Western Islands, and Western Grounds, and this explains why the two last were so called by them for, on this home passage, they saw the Atlantic from the same point of view as a European going west.

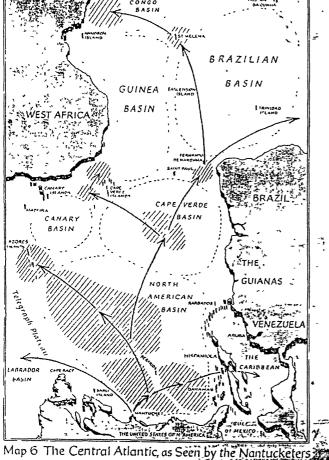
the same point of view as a European going west.

The Nantucketers also turned half right when they got into the South Atlantic and fished off Brazil, but the hunting was never good there and southeast trade winds kept blowing them back. The Carroll Ground off West Africa was so fertile a field that many ships made the hard run there first in the season and then used the trades to return home in a westerix direction via the famous Twelve-Forty Ground.

For identification of Central Arlantic whaling grounds, shown on the accompanying map by diagonal shading, see endpaper maps

☑ 9a The Central Atlantic, as Seen by the Nantucketers [Ivan T. Sanderson, Follow the What (Boston Little, Brown & Co, 1956), 215]

12) Ivan T. Sanderson, Follow the Whale (Boston; Little, Brown & Co, 1956), 215.



Miller Modified Mercator Projection

TRISTAN DACUNHA HELENA BRAZILIAN BASIN GUINEA ; ASCENSION BASIN ISLAND RINIDAD ISLAND WEST AFRICA FERNANDO DE NARONHA SAINT PAUL CANARY ISLANDS MADEIKA LERDE BRAZIL CANARY AZORES BASIN THE **GUIANAS** NORTH AMERICA 30 BASIN ENEZUELA HISPANIOL THE CARIBBEA BASIN

ナンタケット捕鯨者の心象地理による大西洋

THE UNITED STATES OF N AMERICA

図 9b ナンタケット捕鯨者の心象地理による大西洋。[森田勝昭『鯨と捕鯨の文化史』(名古屋大学出版局、1994年)、66。]

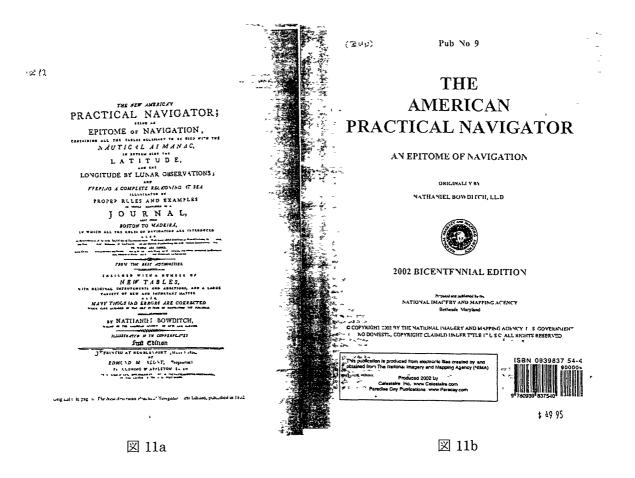
	85° W	Dei		, ,	31 4		May	т.	Test .	1	*****	Δ.	····
	33-11				-Y1, Y	-r'1k	MAY	JL	7017		Sept.		-101
Days of scorch.		125	11	2	7	7:2	90	155	148	183	138	112	94
No. of days Whales seen	Sperm .	18	O.	0	1	21	13	29	3)	-11	37	35	\$
	(Right.	0	0	0	×.	U	Ú,	0	0	C	(1	0	(
Days of search		53	Si	108	186	135	97	157	179	160	139	139	SI
No. of days Whales seen	Speim.	ؠٙ	8	10	17	8	3	2.3	22	10	14	5	
	Right.	0	0	0	v	U	0	0	0	0		0	(
Day- of search		45	111	70	56	56	50	51	125	119	=== 95	94	97
No of days Whiles seen.	Sperm	3	9	2	1	- 5	2	6	S	13	10,	8	
	Right	0	3.	0	P.	()	0	0	U	ŧ,	ı	0	(
	80° W.				В.								
Days of search.		148	96	39	54	25	5	3	0,	26	116	223	25
No. of days Whales seen.	Sperm.	2'	3,	O	16	2	0	0	0	1	1	10	
	Right	27	7	1	Q.	2	0	G	0	7	21	70	10.
Days of search.		48	58	16	8	3	ō	6	(1	0	 5,	4	2:
No. of days Whales seen.	Sperm.	5	0	3	R	0	0	0.	0	0	0	0	-
	Right.	 5!	1	0	0	O	0	o	0	0	O,	0	10

The above is an extract from the Chart, which not being ready for publication, nevertheless affords information that I have thought might prove of some value to the great netional in crosss which at ach to the American whaling business.

It will appear from the above sample, that I have had examined the Log-books of whalers who altogether have spent 1,131 days in the district (N) between the equator and 5° N —80° and 85° W, without every having seen a right whale. In the district (M) that joins it on the South, sperm whales have been seen in every month of the year, but less frequently in April, May, August, and October. This, too, is a place to share right whales never come, and it appears that the district (P) which joins this one immediately on the such, is much frequented by the sperm while, but only now and then by a straggling right whole, in January

It the information afforded by the great number of vessels, whose Logs have chanced the examined for

☑ 11a Nathaniel Bowditch, *The New American Practical Navigator* (Newburyport Edmund M Blunt, 1802), title page



☑ 11b Nathaniel Bowditch, *The American Practical Navigator: An Epitome of Navigation*, 2002 Bicentennial Edition (Bethesda: National Imagery & Mapping Agency, 2002), title page.

「アメリカ」を輸出する国アメリカ ---知識の枠組みとしてのアメリカ研究---

宮本 陽一郎

アメリカ研究という学の成立と冷戦とのあいだには、やや不気味 な同時代性が存在する。とりわけイラク戦争以降、アメリカ合衆国 の覇権主義とそして「アメリカ」のグローバルな拡張に対し意識的 ならざるをえなくなった現在、アメリカ研究者の研究対象としての 「アメリカ」が、どのような歴史的政治的背景のもとに創出された かは、無関心でいることの出来ない問題である。アメリカ研究の世 界輸出の嚆矢といえる第一回ザルツブルク・セミナーが開催された のは一九四七年、つまりウィンストン・チャーチルが「鉄のカーテ ン」演説を行った翌年のことである。最初でそしてある意味では最 後の決定版のアメリカ文学史であるロバート・スピラーらの『合衆 国文学史』が刊行されたのが一九四八年、これはトルーマン・ドク トリンが冷戦の始まりを宣言した翌年にあたる。そして今日に至る までアメリカ研究の中枢である学会アメリカン・スタディーズ・ア ソシエーションが機関誌『アメリカン・クォータリー』を創刊する のは一九四九年、朝鮮戦争勃発の前年である。冷戦とアメリカ研究 の共謀関係を疑うべき状況証拠は枚挙にいとまがない。

初期アメリカ研究と冷戦イデオロギーのあいだの関係性は、ある 種 の ス キ ャ ン ダ ル の よ う に 暴 露 さ れ た り あ る い は 隠 蔽 さ れ た り し て きた。昨今のアメリカ批判という文脈のなかでのアメリカ研究の危 機を概観したジョージ・リプシッツの『危機の時代におけるアメリ カ研究』(二〇〇一年)が、第一章のエピグラフとして「冷戦は単に 超大国の対決が広範な政治的影響を及ぼしたというだけではない。 冷戦は知の形態でありまた世界の認識論的構造でもあった」という キャサリン・ヴァーデリーの言葉を引用しながら、しかしアメリカ 研究という「知の形態」と冷戦とのあいだの関係性をほとんど解明 せずに終わっているのは象徴的である。ドナルド・ピースを筆頭と するいわゆる「ニュー・アメリカニスト」たちが、従来のアメリカ 研究の限界を鋭く批判し、さらに「アメリカ」という知の枠組みそ のものの脱構築を図ろうとするとき、冷戦期のアメリカ研究の成立 過程そのものが問い直されることは必然といわねばならない。ピー スとロビン・ウィグマンの編集になる大規模な論文集『アメリカ研 究の未来』(二〇〇二年)においては、アメリカ研究が冷戦時代のア メリカ例外主義のプロパガンダとしての役割を果たしたということ が、すでに前提化されている。ここに収められたジェイン・ラダウ ェイの論文「いかなる名の下に?」は、「多くの人が指摘するように、

……アメリカン・スタディーズ・アソシエーションは、合衆国に関して何が例外的であるかを広めようとする願望を生み出した冷戦状況によって作り上げられた」(Radaway 47)と、何の注記も施すことなく断定してしまう。

もっぱら状況証拠によって冷戦の共犯者と断定された観のある初期アメリカ研究について、その当事者たちから弁護の声があがるのも、ある意味では当然である。アメリカ研究の成立の生き証人の一人ともいえるレオ・マークスは、「アメリカ研究の〈原〉理論を復元する」(二〇〇五年)において、ピースらの批判に反論する論陣を張る。マークスはこの論文のなかで、アメリカ研究の起源を冷戦イデオロギーに遡る言説を真っ向から否定し、むしろー九三〇年代のスペイン市民戦争期におけるアメリカ左翼知識人たちの思想にその起源を求めている。マークスにとってニュー・アメリカニストたちの「アメリカ」批判としてのアメリカ研究は、一九三〇年代の原点を補完するものであれ、覆すものではまったくない。マークスは、それゆえにアメリカ研究というプロジェクトは現在においても、あるいは現在においてこそ有効であると結論づける。

アメリカ研究という「知の形態」と冷戦イデオロギーをめぐるこうした論争は、アメリカ研究の歴史をいかなる時代枠で捉えるかによって左右される。ニュー・アメリカニストたちは冷戦期に注目し、

いっぽうアメリカ研究を擁護する陣営は人民戦線期に目を向ける。本章が注目するのは、この論争から奇妙に欠落した第二次世界大戦期のアメリカ研究の展開である。この時期のアメリカ研究およびアメリカ文学研究の代表者たちの思弁のなかで、いかにして輸出可能な「アメリカ」が構築されていったか、そして人民戦線期の左翼思想と冷戦期のアメリカニズムが、いかに橋渡しされていったかを本章は明らかにする。

アーチボルド・マクリーシュ---人民戦線から愛国主義へ

アメリカ研究の起源を一九三〇年代の反ファシズム人民戦線に求めるというレオ・マークスの議論は、少なくともアメリカ研究の創始者たちの思想的背景という点では、十分な説得力を持っている。マークスが在籍した当時のハーヴァードにあっては、公然と左翼としての信条を表明していたグランヴィル・ヒックス、ダニエル・ブーアスティン、F・O・マシッセンのみならず、英文科と歴史学科の最も穏健な学者たち(ハワード・マムフォード・ジョーンズ、ルパート・マードック、アーサー・シュレジンジャー・ジュニア)や、大学院生およびインストラクターたち(ダニエル・アーロン、エドマンド・モーガン、ヘンリー・ナッシュ・スミス)でさえ「左寄りのニューディーラーだった」(125)とマークスは証言する。

しかし同時にマークスの論は、一九三〇年代左翼からアメリカ研究へという道のりが決して平坦ではなかったことも、浮き彫りにする。つまりアメリカ人によるアメリカ研究が多少なりとも含意せざるをえないナショナリズムは、三〇年代左翼思想と単純に相容れるものではなかったのである。

[一九三〇年代]に文化戦線の立場を貫いた人々は、……ほかのどの時代のアメリカ人にも増してラディカルな平等主義の信奉者だった。今日から振り返って考えるならば、こうした姿勢は文化的ナショナリズムの表れととられてもしかたがあるまい。ただし私たち自身は、そのようには捉えていなかったというだけのことである。私たちの一九三〇年代の語彙のなかにあっては、ナショナリズムは反動的な思考パターンであり、外国人嫌悪やファシズムの温床に他ならなかった。私たちの左翼思想はインターナショナリズムだった。(127)

批判の対象であるべきはずだったナショナリズムと左翼思想との接合、あるいはナショナリズムと反ファシズムとの連携という事態を もたらした背景は、言うまでもなく第二次世界大戦である。そして 第二次世界大戦のもたらした屈折こそが、アメリカ研究の研究対象 としての「アメリカ」、あるいは冷戦時代の輸出可能なイデアとして の「アメリカ」を構築するうえで決定的な役割を担うのである。

マークスの証言が皮肉にも再現している、左翼思想とナショナリズムとのあいだの葛藤は、大戦の勃発の直後に一つの激しい論争としてかたちを表す。一九四〇年、アーネスト・ヘミングウェイと並ぶ人民戦線の闘志だった詩人アーチボルド・マクリーシュが、「無責任なる者たち(The Irresponsible)」と題する激越な文章を『ネイション』誌に発表する。マクリーシュはファシズムと闘うことをためらう芸術家・知識人たちを、次のように糾弾する。

 めてこの戦いに勝利することができる。(32-33)

芸術家たちに政治参加を呼びかける論調そのものは、スペイン市民 戦争に赴いた多くの左翼知識人たちの情熱の再現にほかならないが、 しかしマクリーシュはここで言論思想の自由というすべてに優先す る原則を設定しつつ、それが保証されている「国」を守ること、そ してそれを脅かす勢力と闘うことを呼びかけているのである。

この文章は同じ年にただちにパンフレットとして刊行され、また数多くの反応が『ネイション』誌のみならずさまざまな媒体に寄せられ、一大論争を引き起こす。ヴァン・ワイク・ブルックスを始めとする多くの知識人がマクリーシュの呼びかけに賛意を表明した一方で、意外にもマクリーシュとともにスペイン市民戦争に参戦したへミングウェイや、批評家エドマンド・ウィルソン、そして左翼ないまに『パルティザン・レビュー』のジェイムズ・T・ファレルルら激しい批判の声が挙ったことは、注目に値する。彼らの目には、マクリーシュの立場は、国際主義から愛国主義への転向であり、マクリーシュの立場は、国際主義から愛国主義に道を開く危険な選択と映ったのである(Donaldson 336-37)。 言い換えるなら、型知年の独ソ不可侵条約によって、反ファシズム人民戦線が左翼知識人の共通の旗印となりえなくなったあと、マクリーシュはアメリ

カを明らかな中心とする西欧世界の防衛という道を主張したのに対し、マクリーシュを批判した左翼知識人は、これを危険な愛国主義とみなしたことになる。

こうした論争は、マクリーシュの「無責任なる者たち」が、スペイン市民戦争期の反ファシズム人民戦の延長線上にあるように見えながら、じつはそこから一歩踏み出したものであったことを物語る。つまり「無責任なる者たち」の激越さは、ファシズムに対する怒りに根ざすものである以上に、ファシズムによって脅かされる「アメリカ」を、さらには民主主義、自由主義のイデオロギーと等価にみなされる「アメリカ」を発明したことによってもたらされたものなのである。マクリーシュの「無責任なる者たち」が主張する自由と民主主義の存亡をかけた「インテレクチュアルな戦争(intellectual warfare)」という図式は、冷戦の構図を先取りするものにほかならない。

大学と諜報

マクリーシュの「無責任なる者たち」における主張は、国家と知識人とのあいだの緊密な連帯にも道を開くことになる。マクリーシュのその後の歩みは、スペイン市民戦争と冷戦とをつなぐさまざまな経路のうちの一つを、太い実線にしてみせてくれる。フランクリ

ン・D・ローズヴェルト大統領は、マクリーシュの主張する「インテレクチュアルな戦争」の意義を直感的に読み取ったかのように、マクリーシュを戦時政府のブレーンとして重用する。まずローズヴェルトは、議会図書館内部の反対を押し切って、マクリーシュを議会図書館館長(Librarian of the Congress)に据え、さらには国務副長官に抜擢するのである。国務副長官としてマクリーシュは OFF(事実統計局、The Office of Facts and Figures)なる部局を創設する。ナチスのプロパガンダに対抗するために、客観的な事実と統計を調査し対抗プロパガンダとして広報することを意図したこの部局は、それ自体としてはきわめて短命に終わるが、歴史的な意義は大きい。OFFは、一九四二年に組織される OW(戦時情報局、The Office of War Information)の母体となり、未曾有の規模における学問・芸術とプロパガンダそして諜報活動を統合することになる。

さらにマクリーシュは、一九四一年に組織される OSS (戦略情報局、The Office of Strategic Services)の研究調査部(Research and Analysis Division)の編成にも重要な役割を果たす。言うまでもなく OSS は、大戦終結後改組され CIA となるのであり、ここでもマクリーシュは冷戦に向けてのアメリカの知の大再編に立ち会うことになる。一九四一年七月、マクリーシュは学会の代表者たちを集め OSS の研究調査部の中心となる人選を行う。合衆国公文書館に残る

メモによれば、マクリーシュは OSS の長官となるウィリアム・ドノヴァン将軍および南米の諜報プロパガンダ活動を統括していたネルソン・ロックフェラーと毎日昼食をともにしそこで諜報組織間の分担協力体制を整備することを提案し、ドノヴァンもこれに合意している。一九四一年十月以降、冷戦時代の原型を作った三人が毎日情報交換をしていたということになる。図書館と後の CIA という取り合わせはやや意外ではあるが、OSS 研究調査部は、発足当初議会図書館に隣接する建物に設営され、議会図書館の保有する資料を主な情報源として活動を始めるのである。左翼人民戦線から議会図書館を経て OSS に至るマクリーシュの足跡は、アメリカの戦前・戦中・戦後、そしてそのなかでの文化構造の変容を理解するうえで見逃すことのできない、いわば歴史理解の補助線となっている。

OSSが戦後のアメリカの学術研究に残した影響は、測り知れないものがある。アメリカ歴史学会(AHA)の戦後の会長のうち八名(コンヤーズ・リード、ウィリアム・ランガー、バーナドット・シュミット、クレイン・ブリントン、ハーヨ・ホルボーン、ジョン・フェアバンク、デイヴィッド・ピンキー、ゴードン・クレイグ)、アメリカ経済学会(American Economics Association)の会長のうち五名が OSS に在籍している(Katz 203, n. 15)。これ以外にも、『世紀末のウィーン』で知られる歴史学者カール・ショースキ、『カリガリか

らヒットラーまで』の著者ジークフリート・クラカウアー、ワイマールの社会学者フランツ・ノイマン、人類学者のグレゴリー・ベイトソン、映画監督ジョン・フォード、そしてケネディー政権のアドヴァイザーとなったアーサー・シュレジンジャー・ジュニアが OSSに加わっている。一方の OWI に目を転じるなら、海外士気分析部(Foreign Morale Analysis Division)という一部署に、ルース・ベネディクト、ジェフリー・ゴアラー、ジョン・エンブリーといった恐るべき才能が集められる。ルース・ベネディクトは一九四四年から OWI の報告書第二五号「日本人の行動パターン」の執筆に着手し、翌四五年九月十五日に完成する。これを改稿したものが『菊と刀』(一九四六年)であることは周知の通りである。

マクリーシュがその出生に立ち会った、OSS および OWI に集った才能を見渡せば、それは戦中の知の総動員であるのみならず、すでに戦後の知の構築であったことがわかる。『菊と刀』に代表されるような、OSS および OWI による敵国文化の総動員態勢による研究は、地域研究という新たな戦後の学問の形態を生成したのである。大戦終結後、こうした研究は全米のさまざまな大学で立ち上げられた地域研究プログラムに引き継がれ、そして大学の地域研究プログラムは、CIA および国務省と連携しつつ、冷戦時代のアメリカの外交政策を支えていったのである。

マクリーシュがローズヴェルト大統領の委嘱によって編纂した OFF の報告書『国民への報告ーーアメリカの戦争準備』(一九四二 年)には、すでに戦後の冷戦の原型がみられる。冊子の中央に見開 きで配された世界地図には、「民主主義の兵器庫」というキャプショ ンがつけられ、アメリカから世界各地への兵器の輸出が白い矢印で、 世 界 各 地 か ら ア メ リ カ へ の 原 材 料 の 流 入 が 黒 い 矢 印 で 示 さ れ る 。 ま たこの報告書のかなりの部分を占める戦時の経済政策に関する記述 は、「経済戦争」と題され、さらに「静かなる戦争」という副題が施 されているのは、戦後の「冷たい戦争」を想起させずにはおかず、 象徴的である (U.S. Dept. of State Foreign Affairs 21)。そこに示され た経済政策も、枢軸国に協力的な人物や企業を「ブラックリスト」 化して経済封鎖を行うというもので、冷戦期の「封じ込め政策」を すでに先取りしている (24-25)。ローズヴェルト大統領がこの報告 書を正式に委嘱したのは一九四一年十二月二日、マクリーシュが報 告書を提出したのは一九四二年一月一四日のことである。つまり真 珠湾攻撃と相前後するかたちで、すでに冷戦というパラダイムは構 築されつつあったのである。

科学哲学宗教学会

マクリーシュのややドン・キホーテ的な戦闘宣言「無責任なる者

たち」は、第二次世界大戦初期において知識人およびアカデミアのなかで展開した新たな論題のひとつの切り口とみなされるべきであるう。それはファシズムとの戦いに歴史的政治的な意味を与える枠組みが模索され、そのなかで冷戦構造が醸成されていくプロセスともいえる。

同じ年に、ユダヤ教のラビであるルイス・フィンケルシュタインの呼びかけで、七十九人の知識人たちによって「科学哲学宗教学会」なる組織が結成され、一九四〇年から一九六八年まで毎年セミナーを開催する。この学会の正式名称(Conference on Science, Philosophy, and Religion and Their Relation to the Democratic Ways of Life, Inc.)が物語るように、この学会の基調となる問題意識は、ファシズム/民主主義という対立図式と、民主主義=アメリカ合衆国という等式とを両輪とする世界観、そして危機感である。

今日では顧みられることの稀なこの学会にここであえて注目するのは、ひとつにはこの学会に参加した顔ぶれのただならぬ充実ぶりの故であり、もうひとつにはこの学会が反ファシズム闘争という一九三〇年代的な問題意識から出発して、そのまま冷戦時代に生きながらえていった故である。そこには前節で指摘したアメリカ研究の二つの起源ーー反ファシズム人民戦線と冷戦ーーを結ぶ、もうひとつの補助線を読み取ることが可能である。一九四二年に開催された

第二回シンポジウムの参加者にはアルバート・アインシュタインを始め、ヴァン・ワイク・ブルックス、フランツ・ボアズ、マーガレット・ミード、ルース・ベネディクト、エンリコ・フェルミ、ハワード・マムフォード・ジョーンズ、アラン・ロック、ペリー・ミラーなどが含まれ、瞠目すべき陣容となっている。また各年次のシンポジウムが掲げたテーマ(「国家的統一の諸相」「現代社会における権力の対立」「アメリカ教育の目標」「教育と世界平和」)は、第二次世界大戦から冷戦に向けてのアメリカ思潮の俯瞰図を見るようである。ここでも大戦の勃発と平行するように冷戦パラダイムの構築は始まっていたのである。

一九四一年の第一回大会の報告書で序論を書いているのは、当時の文学研究のなかで疑いなく最も重要な位置を占めていたヴァン・ワイク・ブルックスである。ブルックスは、またマクリーシュの「無責任なる者たち」に対していち早く支持表明をした一人でもある。ブルックスはこの学会の結成の動機を次のように説明する。

科学哲学宗教学会は、集団的な思考という実験によって、われわれの文化の危機に対峙しようとする試みである。この学会の前提となる問題意識は、まず第一に、多くの学術分野におけるアメリカの学者たちが、全体主義のアメリカ民主主義に対する脅威に危

機感を持っているということである。そして第二に、こうした学者たちは、科学者であれ哲学者であれ神学者であれ、アメリカ的な生活と思想のなかである程度のリーダシップを担わなければならないという集団的な責任を自覚している。ここに集まった学者たちは、個々が担う学術領域とその伝統が、全体主義よりも民主主義になじむものだと確信している。しかし全体主義的な生き方が世界中に広がり、そして文明を差し迫った危機にさらしているのである。("Conference on Science, Philosophy and Religion in Their Relation to the Democratic Ways of Life" 1)

スペイン市民戦争の際には、ファシズムに対する団結は、「左翼」を基軸とする国際的な労働者あるいは人民の団結というかたちを取っていたのに対し、ブルックスが提起しているのはアメリカの団結であり、アメリカの内部における学問分野の壁を越えた連帯、いわば学際的な連帯である。アメリカン・デモクラシー対全体主義という対立構図は、マクリーシュよりもさらに鮮明になり、いっそう冷戦に近づいている。冷戦はトルーマン・ドクトリンに先駆け、広島長崎に先駆け、ヤルタ会談に先駆けすでに知識人たちによって着々と構築されつつあったのである。

ブルックスの序文に引用されている、この学会の最初のプレス・

リリースは、こうした危機感のなかで「アメリカ」が再発見・再定 義されていくプロセスをさらに端的に物語る。

われわれの時代の知的な混迷を克服するために必要なのは、全体主義などでは決してない。アメリカは連邦主義を大陸規模で展開した最初の国家である。アメリカという国家の天才性をもってすれば、同じ原理を異なる宗教のあいだの、異なる政治観・教育観の共生に応用することが可能であるはずである。哲学や科学のいかなる分野の持つ真の自律性を奪うことなどありえず、….われわれの共有する背景が、一致団結した民主主義的なアメリカの生き方という共通の基盤をもたらすだろう。("Conference on Science, Philosophy and Religion in Their Relation to the Democratic Ways of Life" 8)

アメリカの歴史は固有のものであり、その固有の特性あるいは「天才」性は、第二次大戦中の現代にとって特別な意味を持ち、原理としての「アメリカ」は世界の共存と調和のために応用が可能であると、この学会の主催者たちは考えたのである。

この学会に集った学者たちがアメリカを語る情熱は、たしかにレオ・マークスが指摘するように「文化的ナショナリズム」とは似て

非なるものだった。彼らの語るアメリカは、国民国家というカテゴリーを離れて、全体主義以降の戦後世界のモデル、輸出可能なあるいは輸出されねばならない理念としての「アメリカ」であった。そしてまさにそれゆえに「民主主義の盟主アメリカ」というドグマは、単なる超大国のナショナリズムという範疇を超えた問題を今日の世界にまで投げかけるのである。

再教育プログラム

戦後国際社会の構成原理として、応用可能で教育可能で輸出可能な「アメリカ」という理念の探求は、第二次世界大戦中にはるかに現実的なレベルで進行する。それはドイツ人捕虜の再教育プログラムである。

ローズヴェルト大統領は、国民を煽動した一部の指導者を罰するという、第一次大戦後の戦後処理は致命的な誤りであり、戦後の平和を築くためには、教育を通じてドイツ人の国民性の根底から改造することが必要であると考えた。(Robin 19-20)。こうした政策に具体性を与えたのが、精神科医リチャード・M・ブリックナーが著わした『ドイツは治療不可能か?』(一九四三年)である。ブリックナーはナチズムを精神異常ーーパラノイアとメガロマニアーーの一形態と断定するのみならず、戦後処理のなかにあっては、ドイツと

国際社会の関係は、患者とその家族の関係をモデルとする必要があることを主張する。今日の私たちの目から見れば、きわめて乱暴な疑似精神医学に見えてしまうこの書は、しかしながら一九四三年の段階では広い支持を集めた。ルース・ベネディクトとマーガレット・ミードもブリックナーを強く支持し、とくにミードはこの書に序文まで寄せている。

ブリックナーが提起した対ドイツ戦後処理の青写真を現実に遂行したのが、一方において戦略爆撃であり、もう一方においてアメリカ文学およびアメリカ史の教育である。戦略爆撃は、「強烈はショックを与え……既に確立された生き方や行動パターンを断ち切り、新しい影響力が浸透することを可能にする」ための手段として捉えられる(Robin 16)。これは同時代に急速にアメリカの精神科医療に普及していったショック療法の応用といえる発想である。付け加えるまでもなく、この発想は日本の主要都市に対する空襲、さらには広島・長崎の原爆投下につながるものである。戦後のショック療法に関する報道にしばしば原爆への隠喩的な言及がみられるのは、このことを逆の方向から物語るものと言える。

しかし戦略爆撃によるショック療法の次の段階で想定される、民 主主義的なアメリカ文化の移植という作業は、遥かに大きな困難を 伴った。とりわけアメリカの文化は物質主義的でそれ故に通俗的な 文化であるという、あながち的外れとは言い難い先入観を刷り込ま れたドイツ人に対して、アメリカ文化を教育するという試みは、無 謀とさえいえるものだった。そればかりかドイツ国民の世界観をい ったん破壊することは、共産主義の浸透という、ある意味ではファ シズムを放置する以上に危険なシナリオも招きかねないことをアメ リカ政府は認識していた(Robin 23)。さらにジュネーヴ協定とい う意外な障壁も存在した。ジュネーヴ協定は、捕虜に対するプロパ ガンダを禁じており、アメリカがこれに違反した「再教育」を行え ば、ドイツのアメリカ人捕虜が同様の扱いを受ける危険を意味した (Robin 22)。その結果、アメリカの再教育プログラムは、ジュネ ーヴ協定に認められた「知的な娯楽」の範囲で、「読み物と限定的な 範囲における視覚的な補助教材を用い、狡猾なプロパガンダのライ ターではなく協力的な捕虜の書いた新聞を刊行することによって、 アメリカン・ウェイに捕虜たちを引きつけることを「再教育」プラ ンは目指した」(Robin 27)。アメリカン・ウェイの緩やかな浸透に よる全体主義の防止という戦略は、冷戦時代のアメリカの文化政策 そのものといってよい。

もちろん今日の視点から振り返れば、このような目的のためには、 ハリウッド映画を用いる方がはるかに効果的ではないかと思わずに はいられない。しかし再教育プランのなかでは、映画は「限られた 範囲の視覚的教材」という範囲でしか考慮されておらず、あくまでもその中心は文学を中心とする「読み物」であった。このことはアメリカン・ウェイの教育という課題に使命感を持っていたのが、次に言及するハワード・マムフォード・ジュニアのような文学関係の人々に限られていたという事情を反映するものと考えられる。

ハワード・マムフォード・ジョーンズのアメリカ

SPD(特別計画部、Special Project Division)の部長として、ドイツ人捕虜の再教育プログラムの中核となっていったのは、ハーヴァード大学の若い英文科教授ハワード・マムフォード・ジョーンズだった。レオ・マークスがアメリカ研究創成期のハーヴァードの穏健派の「左寄りニューディーラー」の一人として名を挙げているジョーンズは、ニューディーラーとして当然のことながら反ファシズム戦争には積極的な立場を取っていた。とはいえ彼が大戦当初に務めた役割はハーヴァードの学内警察の副署長として、ケンブリッジ市内の警備に当たるという名目ばかりの戦争協力だったので、その意味では大胆な抜擢でもあった。しかしジョーンズは、冷戦時代の文化戦略を最も早い時期からヴィジョンとして持っていた一人でもあった。すでに一九三八年に『アトランティック』誌に寄せた論文「愛国主義――しかしどのような?」において、ファシズムと関う

ためには、独裁者たちの魅力的な神話に対抗する民主主義の神話を 創出する必要があり、そのためにリベラル・アーツの教育が重要な 役割を果たすべきであるという、驚くほど先駆的な論を展開してい たことを考えるなら、この抜擢は至当のものであった.

ハワード・マムフォード・ジョーンズは、アメリカ研究の創始者 としてただちに思い浮かべられる名前では必ずしもないし、またア メリカ文学研究の必読書を残した著者でもない。しかしジョーズの 存在は、アメリカ研究の確立に至るまでの過程の中核に常にある。 ジョーンズは一九三六年からハーヴァード大学で教鞭をとり、前述 の科学哲学宗教学会に常連として参加しているのみならず、戦後に はスピラーを中心とする『合衆国文学史』の編者のなかに名を連ね ており、またアメリカン・スタディーズ・アソシエーションの学会 誌「アメリカン・クォータリー」の創刊号にも寄稿している。さら にー九四四年から一九五一年までアメリカ芸術科学アカデミーの会 長を務め、一九五五年から一九五九年まで ACLS(アメリカ学術評 議会、American Council of Learned Societies)の会長を務めている。 『アメリカン・ヒューマニズムーーその世界における意味』という 彼の著書のタイトルが端的に物語るように、冷戦期アメリカのリベ ラリズムおよび教育文化政策のグローバルな展開の中核にいた知識 人といってよい。ハーヴァード大学英文科の一教員から、冷戦時代 の教育文化政策の中枢へという、ジョーンズの転身の重要なきっか けと考えられるのが、彼のドイツ人捕虜の再教育プログラムへの関 与なのである。

しかし、その後のジョーンズの果たした役割から振り返って考えるとき、逆に印象的なのは、発足当初の再教育プログラムがいかに貧相なものであったかである。ジョーンズの自伝によれば再教育プログラムの初期の仕事は、マンハッタンのオフィスで、ジョーンズができる限り簡潔平明な英語でアメリカ史を執筆し、そして彼の協力者だったヘンリー・エーアマンがドイツ語の対訳をつけるというものだったという(*An Autobiography* 217)。アメリカ研究の成立までの道のりは気が遠くなるほどのもといわなければならない。

さらにアメリカの大学教育のなかにおいて、そもそも自国文学・自国文化の研究がないに等しかったという致命的ともいえる事態がそこにあった。ハワード・マムフォード・ジョーンズの『アメリカの諸思想(Ideas in America)』(一九四四年)の第一章に報告されている、当時のアメリカ文学研究の実情は、あらためて愕然とさせられるものがある。ジョーンズは、「アメリカ文学史という名に値する研究はまだない」(2)とし、当時の典型的なアメリカの大学の英文科の編成にあって、十五名から十六名のスタッフのうちアメリカ文学の授業の担当者は一名に過ぎず(3)、また一八八四年から一九三

四年の五十年間に『PMLA』誌に掲載された一四〇五点の論文のうち、アメリカ文芸と多少なりとも関連を持つものがわずか四十五点しかなかったことを報告している。ジョーンズがヴァン・ワイク・ブルックスの「使用可能な過去」という言葉を引き合いに出しながら、「どのような分野であれ、学問の目的は「ブルックスのいうような意味での」過去を創りだすことである」(10)であると主張するとき、そこには悲壮感すら漂う。ジョーンズは、ドイツ人捕虜にアメリカン・ウェイを教育するという難題に取り組むのみならず、教育すべき「アメリカ」を創り出すというところから出発しなければならなかったのである。

まさにドイツ人捕虜に対する再教育プログラムが本格的に始動した年に発表された『アメリカの諸思想』第一章に見られる、自文化研究への熱烈な訴えかけは、レオ・マークスの言うところの「文化的ナショナリズム」と容易に見誤られかねないものである。『アメリカの諸思想』の最終章は、そうした先入観を大きく覆す意外な展開を見せる。「部族主義(Tribalism)」と題されたこの章は、われわれがともすれば抱きがちな初期アメリカ研究のイメージとその実態とのあいだの気の遠くなるほどの距離を記録にとどめたものである。

言うまでもなく「部族主義」とはナチスの人種差別主義である。 ジョーンズは、アメリカ研究がナチスの人種差別主義に対する反撃 として機能するためにはどのような要件が必要かを論じる。

アーリア人 [の優越]をめぐるおとぎ話をまともに受け入れてしまうような人間がいるとすれば、それは黒人の血に何か穢れたものが流れているとか、ユダヤ人には金儲けに向かいがちな遺伝子があるとか、イタリア人には何か臆病な遺伝形質があってだから勇敢な兵士にはなれないとか、そういうことを信じてしまう人たちだろう。ところでナチスの部族主義を、わたしたちの多少穏やかな部族主義に置き換えたとして、それで戦争に勝てるだろうか。わたしたちの手からしっかりと罪を洗い落としたと言えるだろうか。そこを考え直してみよう。(225)

ジョーンズはまず、対日戦争を白人文明を守るための戦争として意味付けようとするオーストラリア政府高官の蒙昧さを批判し、その一方であるインドの知識人の発言ーーファシズムとの闘いのためなら命を捨てるが、西欧民主主義や大英帝国やキリスト教文明のために死ぬつもりなどないーーを紹介する(225-26)。ここからジョーンズが引き出す結論は、瞠目に値する。ジョーンズは、対ファシズム戦争に勝利するためには、「西欧民主主義」「キリスト教文化」「白人至上主義」「アメリカの世紀」といった理念をも批判し克服しなけれ

ばならないと呼びかける。

地上の抑圧された人々は、ナチスの圧政から逃れるために闘っているのであり、別の形態の部族主義を守ったり、復活させたり、強化したりするために闘っているのではない。それゆえに「アメリカの世紀」といった言い方は、アフリカやアジアやロシアや南アメリカの人々の心には訴えかけないのである。わたしたちアメリカ人が、自己防衛のために武器を多くの国々に貸し与えたからといって、そうした国々が、平和が戻ってきたときに、諾々とアメリカの影響力を受け入れるなどと考えるのは、もうやめるべきだ。それでは、全人類的な会議の殿堂を創ることも、全世界的な連邦を創ることも、決してできないのだ。

グローバルな戦争は、グローバルな思考を必要とする。そして グローバルな思考は、グローバルな教育を必要とする。わたした ちは単に戦争に勝つためではなく、平和を築くための知を準備し ているといえるだろうか。(231)

ジョーンズの熱烈な訴えかけは、アメリカ研究のひとつのルーツで ある一九三〇年代の人民戦線の国際主義を明確に継承しつつ、「文化 的ナショナリズム」を斬り捨てるのである。

この書の冒頭でアメリカ研究の不在を嘆いたジョーンズは、その 最終章においてこれからの大学カリキュラムでアメリカや西欧がそ の中心になることを許してはいけないとまで主張する。日本研究や 中東研究はアメリカ研究と同じ重要性が与えられなければならず、 西欧研究は東洋研究と平行して位置づけられねばならないとジョー ンズは指摘する。そしてそうした教育のなかで学生たちは西欧がグ ローバルな文化と歴史のほんの一部でしかないことを学ばなければ いけないという、目を疑うばかりに今日的な教育観にハワード・マ ムフォード・ジョーンズは到達する。私たちがともすればアメリカ 批判、アメリカ研究批判の文脈のなかで持ち出す議論が、ここにす でに曖昧さのないかたちで提示されている。そしてこれは時代を先 取りした理想主義などではなかったことも銘記される必要がある。 ジョーンズの主張は、大戦中のまったく現実的な文化戦略として導 きだされたものなのである。

序章の主張と最終章の教育観とのあいだの距離は、今日の私たちにとってこそ目眩をさそうほどのものだが、しかしジョーズにとってその懸隔は存在しない。両者のあいだを継ぎ目なしに橋渡しするのが「アメリカ」という理念である。この章の締めくくり近く、ジョーンズはアメリカ合衆国の独立宣言に「人種」という言葉が存在しなかったことに読者の注意を喚起する。二〇世紀後半のアメリカ

研究批判の出発点が、独立宣言の起草者たちのなかに黒人も女性もいなかったという微笑ましい発見から出発していたことと照らし合わせてみることは、無意味ではないだろう。ジョーンズにとって大切なことは、白人しかいなかったことではなく、そこに人種という概念がなかったということなのである。そしてそれゆえにジョーンズの「普遍的なヒュマニティ」への希求は、アメリカ研究という主題に回帰するのである。

ジョーンズを始めとする初期のアメリカ研究者たちにとって、研究主題であると同時にイデアでもあった「アメリカ」とは何だったのか。それは国民国家としてのアメリカという実体ではなく、さまざまな意味における橋渡しの論理の集合体であったということができる。一九三五年のスペインにおけるローカルな反ファシズムと関争と、一九三九年以降のグローバルなイデオロギー戦争とを橋渡しするなかで醸成された論理である。あるいはスペイン市民戦争における反ファシズム人民戦線というグローバルな連帯意識と、一九三九年以降の知識人たちの戦時愛国主義とのあいだの懸隔に橋を渡す計算であり、また大戦中の反ファシズム関争と、大戦後の反共産主義とのあいだの隔たりを隠蔽する論理でもある。初期アメリカの場合とのあいだの隔たりを隠蔽する論理でもある。初期アメリカの場合との表にとっての「アメリカ」とは、こうした隔たりと矛盾を論争し克服するための論争の場であり、そのなかで形成された記号と

しての「アメリカ」こそがグローバルに輸出されうる「アメリカ」であったと、結論づけることができる。アメリカの覇権主義や「アメリカナイゼーション」が今日もなお未解決の問題として残っているとすれば、それはアメリカが旧態然たる帝国主義国家であり続けるからではなく、ナショナリズムや帝国主義を批判する論理をあらかじめ取り込んだ「アメリカ」として大戦期に再生したからにほかならない。

言説としての「戦後」

「戦後」という概念は、日本の近現代史および文芸批評のなかでは、今日に至るまで、動かしがたい論題であり続けている。それは、一九四五年八月一五日を境とした国家体制の類例のない変貌を考えれば、まったく避けがたいそして当然の帰結といえる。それに対してアメリカ合衆国に関して、「戦後」が二十一世紀の今日までも含む時代区分として論じられることは稀である。合衆国の「戦後(Postwar)」が語られるとすれば、それは第二次世界大戦終結直後の短期間の社会経済現象をさして、限られた射程距離において用いられるにすぎない。それ以上に広い射程距離を持って第二次世界大戦以降のアメリカ史を論じる場合、もっぱら「戦後」をめぐる議論は「一九五〇年代」あるいは「冷戦」といった別の時代区分のなか

に吸収されることになる。アメリカ合衆国が、戦勝国としてその国家体制をファシズムの脅威から守ったという意味では、大戦の終結にアメリカ史の決定的な区切り目を見ないという歴史観は、ある意味では当然と言える。

日本に関して「戦後」がこれほどまでに重大な論題であり続けた根拠は、戦前および戦中の政治的イデオロギーの抹消、そして歴史的記憶の抹消、戦争責任の忘却、さらには天皇制に変わる新たな政治的イデオロギーの移植といった問題に求めることができるだろう。八月一五日、あるいは広島・長崎の閃光を契機として、日本は一瞬のうちに別の国家体制として初期化されたかのように見える。まさに日本の「戦後」は構築されたイデオロギーそして構築された文化ということができる。

しかし本章の考察のなかで明らかにしたように、「アメリカ」も日本と同じようにラディカルな再編成を第二次世界大戦中に経過したことは見逃されるべきではない。まさにそのようにして構築された「アメリカ」という概念装置の故に、一九四五年八月一五日以降の「日本」の「戦後」の構築が可能になったのである。「アメリカ」に照らして「戦後」を構築するという論理は、大戦終結後の過渡期にのみいえることではなく、今日にまで波及する問題でもある。イラク戦争以降、ジョージ・W・ブッシュ政権が、たびたびイラクの「戦

後」を語る際に、第二次世界大戦後の日独の民主化に言及してこれを正当化しようとし、またそれが大きな批判を招いたことは、そのことの証左といえるだろう。日本の戦後とアメリカの戦後が異なる 論題としてあるのではなく、「戦後」と「アメリカ」と「日本」は、切り離すことのできない問題系としてあり続けるのである。

このような問題系のなかにあっては、「戦後」は何らかの客観性を 持った時代区分としてではなく、ひとつの言説としてとらえ直され るべきである。そして言説としての「戦後」は、必ずしも一九四五 年八月十五日を境として始まったものではない。「戦後」を語ること はすでに第二次世界大戦に先立って始まっていたとさえいえる。す で に 述 べ た よ う に 、 口 一 ズ ヴ ェ ル ト 政 権 に と っ て 、 第 二 次 世 界 大 戦 に参戦することの目的は、国土を守ることや帝国主義的な権益を守 ることであると同時に、あるいはそれ以上に「戦後」を構築するこ とであった。マルリーン・メイヨの先駆的な研究が指摘するように、 ローズヴェルト大統領はきわめて早い時期から、戦後の日本の改革 案の作成を諮問し一九四三年三月八日には、終戦に二年以上先駆け て答申を得ている(23)。第二節で言及した OSS の残した文書のな かでも、しばしば「戦後計画(Postwar Planning)」という用語に遭 遇し、そこにはすでに「戦後」の日本の教育改革、宗教改革から経 済改革に至る詳細な「戦後計画」が学者たちの学際的協力の下に書 き記されている。捕虜の再教育プランから、日独への戦略爆撃、そして広島・長崎への原爆投下に至る、戦争行為そのものも、すでに論じたように「戦後」という思考と切り離して理解されるべきものではない。

このように常に「戦後」を参照点とした戦争に知識人たちが関わるなかで、「アメリカ」は構築されていった。民主主義の防衛を正当化の最終的な論理とする、教育・文化・軍事力のグローバルな輸出
——「アメリカ」のグローバルな輸出——という冷戦時代のアメリカの戦略は、こうした知識人たちの営為のなかで醸成されたものといえる。

輸出される「アメリカ」

ジョーンズが戦中のアメリカに自国文学史もなければ、アメリカ文学研究の制度的受け皿もなかったことを指摘していたことを想起するなら、戦後直ちにアメリカ研究の世界輸出が始まったことは、驚くべき事態である。一九四六年にウィンストン・チャーチルの「鉄のカーテン」演説が冷戦の始まりを宣言した翌年始めに、ハーヴァード大学の大学院生クレメンス・ヘラーの提案のもとに、「ザルツブルク・アメリカ文明研究セミナー」(現在の「ザルツブルク・アメリカ文明研究セミナー」(現在の「ボルツブルク・アメリカ研究セミナー」)が企画され、それは同じ年の夏にただちに実現し

てしまう。ヨーロッパ十八カ国から九十名の学生を集めて開催された第一回セミナーには、アメリカから F・O・マシッセンとマーガレット・ミード、そして経済学者ワシリー・レオンティエフが派遣される。ザルツブルク・セミナーはこの種のアメリカ研究セミナーの原型となり、わが国でも一九五一年に京都アメリカ研究夏期セミナーが開催される。ジョーンズ自身も一九五〇年にミュンヘンに渡り、ミュンヘン大学におけるアメリカ研究センターの立ち上げに参画している。(An Autobiography 224-26)

ジョーンズがアメリカ研究の不在を嘆いた三年後に世界輸出が始まり、約十年後にはアメリカ研究の使節たちが世界中でセミナーを開催していたという事実は、「戦後計画」がほぼ開戦と同時に始まっていたという事実を踏まえてこそ、理解が可能になる。こうした展開を後押ししたのが、戦後の混乱のなかで共産主義の浸透を恐れた冷戦時代のアメリカ政府の意図であったことは言うまでもないが、しかし共産主義の浸透への防波堤としての「アメリカン・ウェイ」の散布という発想自体、すでに戦時期の捕虜再教育プログラムのなかに、さらには一九三八年のジョーンズの『アトランティック』誌掲載論文に遡ることができる。

冷戦が「アメリカ」の輸出をもたらしたのではない。輸出可能な「アメリカ」も、「冷戦」も「戦後」も、同じひとつの状況と同じひ

とつの思考系のなかで生み出されたのである。

参考文献

- Benedict, Ruth. "Recognition of Cultural Diversities in Postwar World." The Annals of the American Academy of Political and Social Science 228(July, 1943): 101-107.
- -----. The Chrysanthemum and the Sword 1946. Boston: Houghton Mifflin, 1989.
- Bennett, Wendell B. Area Studies in American Universities New York: Social Sciences Research Council, 1951.
- Berghahn, Volker. America and the Intellectual Cold Wars in Europe Shepard Stone between Philanthropy, Academy, and Diplomacy Princeton: Princeton U P, 2001.
- Brickner, Richard M. Is Germany Incurable? New York: Lippincott, 1943.
- ----- "Extension of 'Neuropsychiatry and Cultural Behavior.'"

 Perspectives on a Troubled Decade. 25-41.
- Brooks, Van Wyck. "On 'The Irresponsible.'" Nation 150 (June 8, 1940): 718.
- Relation to the Democratic Ways of Life." Science Philosophy and Religion: A Symposium. 1-10
- Bryson, Lyman, and Louis Finkelstein, eds. Science, Philosophy and Religion Second Symposium. New York: Harper, 1942.
- Bryson, Lyman, Louis Finkelstein, and Robert M. MacIver, eds.

 Approaches to National Unity: Fifth Symposium. New York:

 Harper, 1945.
- New York: Harper, 1947.
- York: Harper, 1948.
- ----- Goals for American Education: Ninth Symposium. New York: Harper, 1950.

- Bush, Douglas. "'The Irresponsibles': A Comment." Approaches to National Unity Fifth Symposium. 308-35.
- Canby, Henry Seidel. American Memoir. Boston: Houghton Mifflin, 1947.
- Chomsky, Noam, et al. The Cold War and the University. Toward an Intellectual History of the Postwar Years. New York: The New Press, 1997.
- Conrad, Herbert S. "On 'The Irresponsible.'" Nation 150 (June 8, 1940): 718.
- Cumings, Bruce. "Boundary Displacement: Area Studies and International Studies During and After the Cold War."

 Universities and Empire: Money and Politics in the Social Science During the Cold War. Ed. Christopher Simpson. New York: The New Press, 1998.
- De Huszar, George B. "Regional Approach to the Study of the Contemporary World." Approaches to National Unity 691-707.
- Diamond, Sigmund. Compromised Campuses. The Collaboration of Universities with the Intelligence Community, 1945-1955. New York: Oxford U P, 1992.
- Donaldson, Scott. Archibald MacLeish: An American Life. Boston: Houghton Mifflin, 1992.
- Einstein, Albert. "Science and Religion." Science Philosophy and Religion: A Symposium. 209-14.
- Evans, Allan. Research in Action: The Department of State's Bureau of Intelligence and Research Washington, DC: Department of State, 1965.
- Fairchild, Hoxie Neale. "Communicating Ideas Through the Teaching of Literature." Approaches to National Unity. 841-48.
- Feeley, Francis. "The Ideological Uses of Japanese-Americans in U.S. Concentration Camps." Sources, Revue d'études anglophones 4(printemps 1998,): 41-74.
- Fenton, William Nelson. Area Studies in American Universities.
 Washington DC: American Council on Education, 1947.
- Finkelstein, Louis. "The Aims of the Conference." Science Philosophy and Religion: A Symposium. 11-19.
- Fletcher, John Gould. "More on Mr. MacLeish." Nation 150(June 22, 1940): 766.
- Gilbert, James. Redeeming Culture American Religion in an Age of Science Chicago: U of Chicago P, 1997.

- Goodman, Henry. "On 'The Irresponsible.'" *Nation* 150 (June 8, 1940): 718-20.
- Greene, Theodore M. "Liberal Education and Democracy."

 Approaches to National Unity: Fifth Symposium. 122-29.
- Grew, Joseph C. "Japan and America: An Interpretation." Return to Freedom. The Affairs of Our Time and their Impact upon Youth Ed. Thomas H. Johnson. New York: G. P. Putnam's Sons, 1944. 169-85.
- Hall, Robert B. Are Studies With Social Reference to Their Implications for Research in the Social Sciences. Social Science Research Council. Pamphlet 3. New York, 1947.
- Hamilton, Talbot. "The Real 'Irresponsibles.'" Nation 150(June 29, 1940): 787.
- Huberman, M. A. "More on Mr. MacLeish." Nation 150(June 22, 1940): 768.
- Johnson, Thomas H., ed. Men of Tomorrow. Nine Leaders Discuss the Problems of American Youth. New York: G. P. Putnam's Sons, 1942.
- ----, ed. Return to Freedom: The Affairs of Our Time and their Impact upon Youth. New York: G. P. Putnam's Sons, 1944.
- Jones, Howard Mumford. "The General Educational Stream of the Liberal Arts." What is a University? Four Addresses Delivered by Howard Mumford Jones, James Bryant Conant, Harlow Shapley [and] James Phinney Baxter, 3rd Boston: Associated Harvard clubs, 1938.
- -----. "Patriotism -- But How?." Atlantic Monthly 162(1938): 585-92.
- ----. Ideas in America. Cambridge, MA: Harvard U P, 1944.
- ----- "Education and One World." Goals for American Education 213-33.
- -----. The Scholar as American. Cambridge, MA: Harvard, 1960.
- -----. An Autobiography. Madison: U of Wisconsin P, 1979.
- Jones, Howard Mumford, ed. *Primer of Intellectual Freedom*. Cambridge, MA: Harvard U P, 1949.
- Kramer, Hilton. The Twilight of the Intellectuals: Culture and Politics in the Era of the Cold War. Chicago: Ivan R. Dee, 2000.

- Lewis, Lionel S. Cold War on Campus. A Study of the Politics of Organizational Control New Branswick, NJ: Transaction Books, 1988.
- Lipsitz, George. American Studies in a Moment of Danger Minneapolis: U of Minnesota P, 2001.
- Locke, Alain. "Pluralism and Intellectual Democracy." Science, Philosophy and Religion: Second Symposium. Ed. Lyman Bryson and Louis Finkelstein. New York: Harper, 1942. 196-212.
- Lockwood, Dean P. "More on Mr. MacLeish." Nation 150(June 22, 1940): 766-68.
- Lyndenberg, John, ed. *Political Activism and the Academic Conscience Harvard Experience*, 1936-41. Geneva, NY: Hobart and William Smith Colleges, 1977.
- MacLeish, Archibold (1940) The Irresponsible. A Declartaion New York: Duell, Sloan and Pearce.
- Marx, Leo (2005) "On Recovering the 'Ur' Theory of American Studies." American Literary History Vol. 17, No. 2.
- Mathews, Robert E. "On 'The Irresposible.'" Nation 150 (June 8, 1940): 718.
- Matthew, Robert John. Language and Area Studies in the Armed Services Their Future Significance Washington DC: American Council on Education, 1947.
- McDowell, Tremaine. American Studies. Minneapois: U of Minnesota P. 1948.
- Mayo, MarleneJ., J. Thomas Rimer, and H. Eleanor Kerkham, eds. War, Occupation, and Creativity. Japan and East Asia, 1920-1960. Honolulu: U of Hawai'i P, 2001.
- Mead, Margaret. "The Comparative Study of Culture and the Purposive Cultivation of Democratic Values." Science, Philosophy and Religion Second Symposium. Ed. Lyman Bryson and Louis Finkelstein. New York: Harper, 1942. 57-97.
- Mead, Margaret, and Rhoda Métraux, eds. The Study of Culture at a Distance. Chicago: U of Chicago P, 1953.
- Miller, Richard F. "Some Unexpected Results of College Military Programs." College English 6(1945): 444-48.
- Nef, John U. "On 'The Irresposible.'" Nation 150 (June 8, 1940): 718.
- Pronay, Nicholas, and Keith Wilson, ed. The Political Re-education of Germany and her Allies after World War II Totowa, NJ: Barnes and Noble, 1985.
- Radway, Jane (2002), "What's in a Name?" in Pease, Donald/Wiegman,

- Robin (ed.), The Futures of American Studies, Durham: Duke University Press.
- Richars, Thomas F. The Cold War within American Higher Education Rutgaers University as a Case Study. Raleigh, NC: Pentland Pres, 1999.
- Robin, Ron. The Barbed-Wire College: Reeducating German POWs in the United States During World War II Princeton, NJ: Princeton UP. 1995.
- Schonberger, Howard B. Aftermath of War: Americans and the Remaking of Japan, 1945-1952. Kent, OH: Kent State U P, 1989.
- Schumway, David R. Creating American Civilization: A Genealogy of American literature as as Academic Discipline. Minneapolis: U of Minnesota P, 1994.
- Science Philosophy and Religion A Symposium. New York: Conference on Science, Philosophy and Religion in Their Relation to the Democratic Way of Life, Inc., 1941.
- Science Philosophy and Religion: Second Symposium. New York: Conference on Science, Philosophy and Religion in Their Relation to the Democratic Way of Life, Inc., 1942.
- Schlatter, Richard. "On Being a Comunist at Harvard." *Partisan Review* 44(1977):605-15.
- Schrecker, Ellen W. No Ivory Tower: McCarthyism and the Universities. New York: Oxford UP, 1986.
- Schwartz, Lawrence H. Creating Faulkner's Reputation: The Politics of Modern Literay Criticism. Knoxville, TN: U of Tennessee P, 1988.
- Simpson, Christopher., ed Universities and Empire Money and Politics in the Social Sciences During the Cold War New York: The New Press, 1998.
- Smith, T. V. The Re-education of Germany, Italy, and Japan. Claremont, CA: Friends of the Colleges at Claremont, 1947.
- Texas P, 1962.

 A Non-Existent Men An Autobiography Austin, TX: U of
- Szanton, David, ed. The Politics of Knowledge Area Studies and the Disciplines. Berkeley, CA: U of California P, 2004.
- U.S. Dept of State Foreign Affairs Outlines; Building the Peace. Serial publication 1945-46.
- Vanderbilt, Kermit. American literature and the Academy: The Roots, Growth, and Maturity of a Profession. Philadelphia: U of

- Pennsylvania P, 1986.
- Vittorini, Elio. "American Influences on Contemporary Italian Literature." American Quarterly 1(1949): 3-8.
- Winkler, Allan M. The Politics of Propaganda. The Office of WarInformation, 1942-1945 New Haven, CT: Yale U P, 1978.

オークの賢者の地を疾走した自動車レース

――ジョイス「レースの後で」の交通表象と植民地問題――

荒木 正純

一 第四回ゴードン・ベネット自動車レース

に向けられていた。(結城訳、下線引用者)喜んで虐げられていた。(結城訳、下線引用者)喜んで虐げられている者たちの歓声が上がった。だが、彼らの共感は青い車に――友人であるフランス人たちの車ていた。この貧困と無為の道筋の間をぬって、ヨーロッパ大陸がその富と勤勉とを疾走させた。時おり、人垣からチコアの丘の頂では、いくつかの塊をなして集まった見物人たちが、家路へ向かって猛スピードで走る車を見守っ何台もの車がダブリンに向かって飛んで来て、溝のようなネイス道路を弾丸のように、滑るように走った。イン

報じられていた」とあるので、レースがおわっていることはまちがいない――
る自動車」としているのだ。だが、これにつづく一節に、「優勝したドイツの車の運転手はベルギー人だとる自動車を描いているとすら読める。事実、高松訳版(一九八七、一九九九)は、「出発点に馳世戻ってくということばがなければ、「ネイス道路」や「インチコアの丘」を通り、ダブリンのゴールをめざし疾走すスがおわり、その後、関係車が帰路についている模様が描かれているらしい。ここに「家路に向かって」するおのは、いゆ正確には、結城訳版(二〇〇三)はこうはじまっている。この箇所は、ある自動車レージェイムズ・ジョイス『ダブリンの市民』(Dubliners)(一九一四)所収の短編小説「レースの後で」(After

(結城訳)登りつめると二倍の歓迎を受け、そして車に乗った人々も歓迎の喝采が起こるたびに笑顔と会釈でそれに応えた。三位に入り、優勝したドイツの車の運転手はベルギー人だと報じられていた。だから、青い車はどれも丘の頂に まそれにフランス人だちが事実上の勝利者だった。彼らのチームは立派な成績を収めていた。フランス人が二位と

ース」をめぐるつぎの訳注がついている(結城訳になし)―― 定冠詞がふされているように、現実におこなわれた特定のレースを「下敷きにして」いた。高松訳には、「レ「レース」は、ジョイスが生みだした架空のレースではなく、'After the Race'「あのレースの後で」と

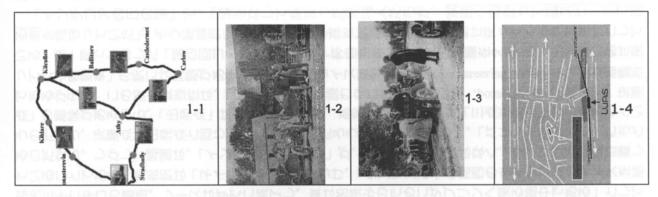
その記事を『アイリッシュ・タイムズ』(一九OIII年四月七日) に載せた(G)。上の勝者はフランスと考えられた。パリにいた若いジョイスは、レース参加者予定のフランス人にインタヴューレ、二位、三位フランス(青)、四位イギリス(緑)である。ドイツの車を運転したのはベルギー人であったから、事実するのが目的であった。国別に色分けされた十二台が出場し、完走したのは四台、物語にあるように一位ドイツ(白)、いる。キルカレン、カーロー、ストラドボーリの三点を結ぶ三七Oマイルのレースで、自動車の性能を証し、宣伝物語は一九OIII年七月二日にアイルランドで開催された第四回ゴードン・ベネット杯目動車レースを下敷にして

リら可用の略後の「(の)」 ゼ、エン・サトヤーエ (Don Gifford) ら Joyce Annotated (University of California Press, 1962, 1982) を参考にしたことを示唆しているが、高松訳注は、いくつかの点でギフォードの記述と はことなっている。ギフォードは、「「このレース」は、三七〇マイルのロード・コースで、スピード記録 の跳戦としておこなわれ、ダブリンの西と南西に位置しているカーロー、キルデア、クィーンズの州を舞 40とと、といって、これでは、「たい」と、「たい」と、「なり」がぬけ、「からなら」のといっている。 いる。高松訳注が、「自動車の性能を証し、宣伝するのが目的であった」としているところを、ギフォード は「このレースの基本的目的は、自動車のデザインと装備をテストし、証明し、宣伝する(さらに、この ようにして改良をうながす)ことであった」としているのである。高松訳注が「ドイツの車を運転したの はベルギー人であった」としているところを、ギフォードは「勝者カミル・ジェナツィ、ドイツのメルセ デス軍を運転したベルギー人は、コースを六時間三六分九秒で完走した」と詳細な説明をくわえている。 さらに、高松訳注は、ジョイスがインタヴュー記事を『アイリッシュ・タイムズ』に書いたとしているが、 この情報はギフォードにはない。したがって、高松訳注はギフォード以外の資料も使用したらしい。結城 訳は巻末の「解説」で、「自動車レースの開催された一日(一九〇三年七月二日)」と言及しているだけで あるから、もし、高松訳注がなければ、レースから一〇〇年たった今日の日本語版読者には、それが「第 四回ゴードン・ベネット杯自動車レース」であったとはわからない。ジョイス版には、「一九〇三年」や「ゴ ードン・ベネット」に対応する記号はでてこないのである。

ない。そして、今日でも。が注意付い。そして、今日でも。が注を付したのは、すくなくとも一九六二年頃の読者に容易にわかることではなったのは、すくなくとも一九六二年頃の読者に容易にわかることではらくなったのだろうか。現在、資料不足でわからないが、ギフォード &されていると容易にわかったにちがいない。だが、一九一四年、この作品を収録した『ダブリン市民』がきにとって、前年開催の「第四回ゴードン・ベネット杯自動車レース」は記憶にあたらしく、それが表象(一九〇三年四月七日)に載せた」という知識があったからであろう。もっとも、一九〇四年、最初の読いジョイスは、レース参加者予定のフランス人にインタヴューし、その記事を『アイリッシュ・タイムズ』イリッシュ・ホームステッド』(The Irish Homestead)に掲載されたこと、そしてその前年、「パリにいた若いない)と、どのようにして知ったのであろうか。この作品が、一九〇四年一二月一七日出版の週刊紙『アナフォードは、「第四回ゴードン・ベネット杯自動車レース」が示唆されている(「下敷き」とはいいます。

よでもなされず、したがって、この「下敷き」となったレースがどのようなものであったかは、詳細にたとされたわけではなく、「示唆」されていることになる。これまで、こうした表象的な読みは、欧米でも日当然、レースがどのようなものであったかを追究しなくてはならない。その場合、このレースは、「下敷き」会の縮図」であると読もうとするのなら、この知識はいらない。だが、一種の表象として読もうとすれば、GUとを卑下」していたが、「少しずつそうした》ミーの虚飾が暴かれてゆく。同時に、この物語は国際社ミー・ドイル」が、「父の財力を支えに太陸の人たちと交際する機会を得た結果、大陸文化を憧憬し、自国ドン・ベネット杯自動車レース」の知識がない。結城訳の「解説」にあるように、この作品を「主人公うドン・ベネット杯自動車レース」の知識がない。結城訳の「解説」にあるように、この生前の「第四回ゴー

-ロー、ストラドボーリの三点を結ぶ三七Oマイルのレース」であったとしているが、コースは、概略、ス」(図 1-2,3/2-6,7,10-16) とは、一体、どのようなものであったのだろうか。高松訳は、「キルカレン、カでは、この「一九O三年七月二日にアイルランドで開催された第四回ゴードン・ベネット杯自動車レー



のせた。(注1) 六月二七日、「自動車レース。最新の詳細情報。最終的な調整」という見出しのもと、つぎのような記事をらえられた。(図 2-10, 12) 地元新聞の『レンスター・リーダー』紙(the Teinster Feader)は、一九〇三年スを代表する一二台の自動車が参加し、出発地点バリシャノンには、約干人収容できる正面観客席がしつそして、コースは、単に「三点を結ぶ」だけのものではなかった。フランス・ドイツ・合衆国・イギリ

マーダー』紙、一丸OIII年一月二四日) ネイスを頂点とし、メアリバラとカーローを底辺の二点とする三角形が柔としてあったらしい――『レンスター・カーラー、キルデア、ストラドボーリ経由のオールド・キルカレンとアサイ区間は四回となる。(地訳)(コースは、イとオールド・キルカレンの区間は七回走行され、カーロー経由のオールド・キルカレンとアサイの区間は三度、マナルを完まする。これを二回おこない、総計三一ニマイルとなる。それから、キルデア経由の西競争路、距離ラドボーリ、バリーリナン、アサイを巡って、バリシャノンに戻ってくる。こうして、、ハの四のよっと、ストトラ、ハリーリナン、アサイを巡って、バリシャノンに戻ってくる。こうして、、ハの田の路・10回のよりで、ムーン、カースルダーモット、カーロー、マジェニー・ブリッジ、アサイという東の競争路(サーキット)ものがあったらする。簡単にいえば、コースは以下のため。出発は、バリットン近くからなされ、車は、バリスクルディ氏は、つぎのように書いている。情報は直接、自動車クラブから得ていると述べている。大力に示えば、ファル・ドラ・バネットの二十、大力に見してに関して、おおいに混乱が生じている、大力ルディ氏は、つぎのように書いている。来週の木曜日、七月二日に関催予定。/本当のコース

|| コースと勝者

「インチコアの丘の頂」で、「塊をなして集まった見物人たちが、家路へ向かって猛スピードで走 いる。第一節でしめした「第四回ゴードン・ベネット杯自動車レース」の知識をえると、「出発点に馳せ戻 ってくる自動車」の訳には問題があるとわかる。ジョイス版では、'the cars careering homeward'が対応箇所 であるからだ。この訳の妥当性は、「出発点」をどう読むかにかかっている。'home'には「(競技で)決勝 **点一の意味があるから、「出発点」はおかしい。だが、高松訳は、レースが「三点を結ぶ」ものであるとい** うのだから、決勝点は出発点と同じ所だと考えたのだろう。この点は正しい。「バリシャノン近く」にもど るのだから。しかし、問題は、「インチコアの丘の頂」が、そのコース内にはなく、ダブリン近くに位置し ていることである。高松訳は「ネイス道路」に注をつけ、「ダブリンとその南西のキルデア州のネイスを結 ぶ約三十二キロの道路。レースはすでに終了し、車は船積みのためにダブリンへ戻る途中である」として いる。とすれば、高松訳の「出発点」とは、レースの「出発点/決勝点」ではなく、レース以前に、車が 集結し、レース場にむけて「出発した地点」のことになろう。「ダブリンへ戻る途中」というのだから。も し注がなければ、高松訳をこのように読むことはできない。結局、この読みからは、「本国(自国)へ向か って」とするのが妥当なのであろう。しかし、この注には不備がある。「ネイス道路」を「家路へ向かって 猛スピードで走る車」 (結城訳) が、すべてレース参加車であるかのように読めてしまう。しかし、後述の ように、「四人の青年の一行が乗っていた」車もあった。むしろ、こちらの方が多かったのである。

こなっていると読むことはなかったのである。の知識のあったことのと読むことはなかった。この知識のあった一九〇四年当時の最初の読者は、出だしのところを読んでも、「何台もの車」がレースをおのレース」で、最初のサーキット形式のものだったので、決して「帰りかかる」ことはない。だから、こなる。このレースは、先述のように「キンカレン、カーロー、ストラドボーリの三点を結ぶ三七〇マイルードン・ベネット杯自動車レース」を表象しているとすると、「レース」の知識不足の訳であったことに すと、この自動車レースが、二点間を往復するようにみえる。もし、このジョイスのテキストが、「第四回ゴブリンに向かって疾走してきた」「いくつもの自動車」が、「帰りかかる自動車」であると読める。となるがいはないが、「ダブリン」にもどるとするなら、「帰途」とするのが無難ではないか。安藤訳からは、「ダブリスにある自動車がそれぞれの国へ帰るところであると読めてくる。結局、そうであることに対対ないい方である。普通、「家路につく」「家路を定ぐ」であるらい、「家路へ向かって」とは対抗にいるとはおいます。

いだけあいまいでない。 日のうちにダブリンへもどったことになろう。この解釈から、安藤訳や高松訳の方が、報道が意識されなれる三年七月二日)、大陸の人々と一緒にいるところを知人たちに見られて有頂天になる」のだから、そのところが、実際は、結城訳の「解説」にあるように、「「ジミーが、」「自動車レースの開催された一日(一新間などの報道となろう。この場合、自動車がダブリンへもどるのは、一日あとのことになってしまう。報じたともとれる。もし、報道によるとしたら、それはレースの当日ではなく、翌日、つまり七月三日のつたえられ、口頭で見物人に伝えられたのだろうと読むことになり、「報じられた」となると、報道がそうさらかの訳によって、テキストの読みに変化がおこる。「だという」なら、電話や電報で結果がネイスにからは、何らかの報道がそう「報じた」とも読める。ショイス版では、'reborted'がつかわれている。この方、安藤訳は「ベルギー人だということである。

動車レース」の見出しで、つぎのような記事をのせている。といえば、先述の『レンスター・リーダー』紙は、一九〇三年七月四日(土曜)、「ゴードン・ベネット自優勝した「ベルギー人」とは、力ミール・ジェナツィ(Camille Jenatzy)であった。「報じられていた」

ジ、キルデアなどの地域から車と自転車にのって、バリシャノン十字路にやってきた。道路は自動車で活気づき、た風の強い冬のような悪天候のあと、よい天候にめぐまれ、かなりのひとびとが、ネイス、アサイ、ニューブリッ地元民の関心からいえば、「自動車の二週間」は、先週の土曜日からはじまったが、幸いなことに、数日間つづいドイツ勝利。出来事と事故。英国とアメリカは不運。車が大破し動かなくなった。

自転車運転者も車の運転手もともに注意を払い、注意を促さざるをえなかった。とりわけ特別観客席あたりともな ると、狭い道路は、観客席の支えが邪魔をし、牽引車が通ると表面がけずられて溝ができていたので、馬車や自動 車ゆその他のものが雑踏をなすなか、うまく通り抜けなくてはならなかった。・・・・

アイルランドの多くのひとびとにとって、このイヴェントは、車をみる最初の機会となり、その一方で、裕福な ひとびとにとって、このイヴェントのために車がやってくることは、ヨーロッパの他の社会で、自動車がどのよう な位置にあるかを確認することになり、アイルランド社会に模範をしめすことになった。

しかし、車の登録がはじまったその年のおわりには、アイルランドの車は二五〇台になり、数年のうちに、この 数字は一〇〇倍にふえた。アイルランド・ゴードン・ベネット自動車レースは、われわれを「車を強く意識する」

ようにしたイヴェントであったとみることができる。(拙訳)

た。一、五〇〇台におよぶ車とその所有者がこのイヴェントのためにアイルランドにゆってきて、全国を巡ったの である。

ット自動車レースである。しかし、このレースはまた、アイルランド社会にもっと広範にわたる意味をもった。開 催当時、アイルランドには自動車が、約一五〇台しかなかった。 ゴードン・ベネット自動車レースは、アイルランドで開催された「二週間の自動車祭」(Automobile Fortnight)の 一環であり、レースをふくめダブリン、カッスルウェラン、コーク、ケリーで二週間にわたりイヴェントが催され

今日、フォーミュラー・ワン自動車レースは、アイルランドで開催されたレースの直系の末裔であり、自動車し - スは、真に地球規模のスポーツとなった。その発祥は、 IOO年前、アイルランドで開催されたゴードン・ベネ

ところが、一〇〇年後、このレースに高い評価があたえられることになる。レース開催一〇〇周年にあ たる二〇〇三年、『アイリッシュ・タイムズ』紙(the Irish Times)は、自動車史研究者ボブ・モンゴメリー に、二〇〇三年一月一五日から二〇〇四年四月二一日まで、毎週水曜に記事「不完全な過去」(Past Imperfect) を書かせた。そして五月二八日(水)、モンゴメリーはつぎのように書いている。(注2)

フランスとドイツは、高速モーター生産の点で世界を打ち負かした。これが、すべてなのである。ドイツ人の優越 イングランド、アメリカ、フランスち、人的性質、つまり度胸とむこうみずの点では、勝るとはいえないにしても 劣ることはないのだ。優劣を決定する要素は、ガブリエル(・フェルマン)でも、(アレクサンダー・) ウィントン でも、エッジでも、さらにジェナツィでもなく、エンジン、ヴァルブ、そして作動するパーツという無生物の優越 性なのだ。ドイツ車になされた巨大な宣伝は、とどのつまり、起こったリスク、労力、解体、そして巨額の費用を 助案すれば、戻りは乏しいものである。このレースは、ふたつの失望を生んだ。ひとつは、きわめて満足すべきも のであり、もうひとつは、それほどのものではない。不運と血とが予想されたが、混乱がそれを圧倒した。このア イルランドのレースは、事故がなかったことで記録を打ち立てた。つまり、公衆の安全と情報伝達を任された公共 部門の側が、素晴らしい組織作りがなされたということである。また、他所からやってきた人々が、暖かく迎えら れたことである。結果的に生じた失望は、しこたま負けた観客と、程度は落ちるものの、誇張された予想を受ける 入れていた公衆の一部に影響を及ぼしている。観光客の数は、予想されたほどなかった。つまり、期待された物質 的収穫は、まったく刈り取られることがなかったのである。 … それにもかかわらず、アイルランド住民は、十分 に喜ぶことができる。広く世界に、比類なき規律と礼儀と歓待を見事に示すことができたからである。(拙訳)

ているものの、イヴェント自体にはおおむね批判的である。 自動車レースは終わった。まちがいなく「大きな出来事」ではあったが、結果は、結局、たいしたことはない。 は、もちろん、わずかの秒の問題にすぎないし、機械の調節の問題にすぎない。まったく人間的要素の問題はない。

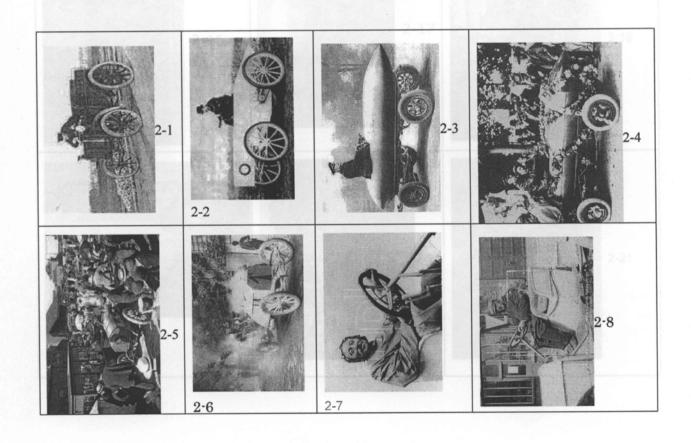
同紙は、また、第四面でレース開催に総括的コメントをのべ、アイルランドの果たした役割を評価はし

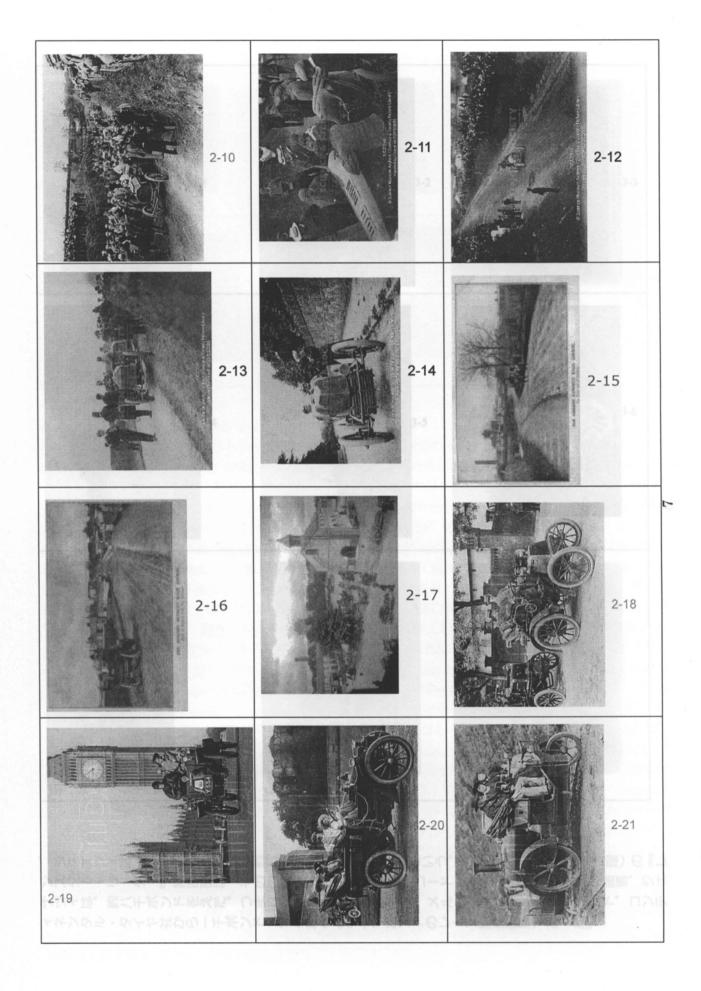
その他の点では、ゆってきた見物人たちの注目をひくものは多くなかった。スタンドなどの絵にならず目に不快 だった一連のものは、妙なテント、行き来する自動車の石油くさい空気、一瞬目に入ったヴェールを被った頭、「ざ よろつかせた」眼、塵にまみれた自動車の持ち主であった。こうしたことが、バリシャノンの日曜日にみられたす べての絵であった。国際的な大イヴェントのはじまりを示唆するものはほとんどなく、ときどき一瞬だけ外国の車 がみえ、期待された全世界的な色彩が世界的大集会の場面に付与されただけのことであった。(拙訳)

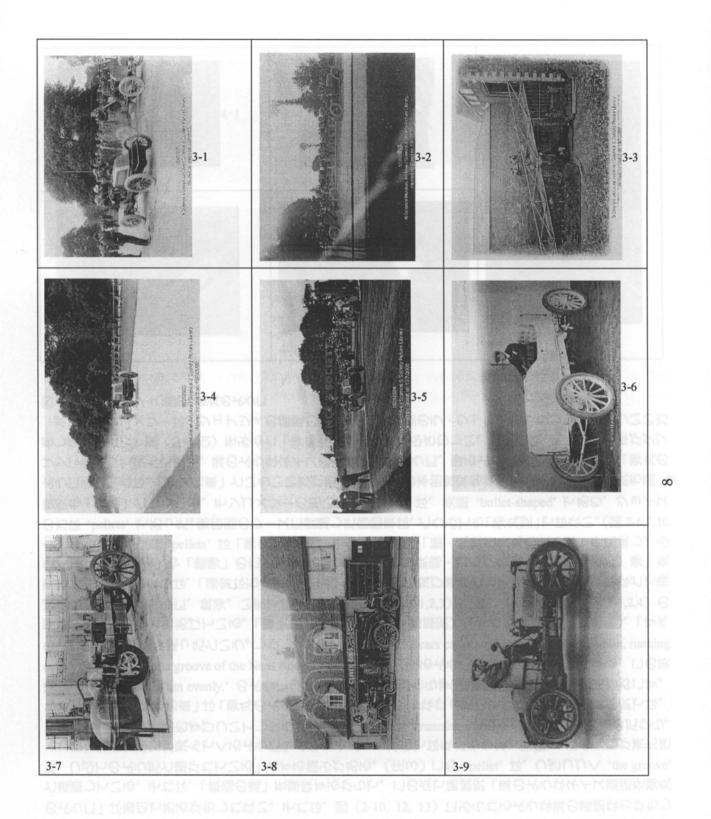
てレースが可能になった。(「不完全な過去」『アイリッシュ・タイムズ』 IOO三年六月一八日)イルランドでは、当日だけスピードの例外措置をする「軽機関車法」(the Light Locomotive Bill)を可決しと、モンゴメリーはのべている。(「不完全な過去」『アイリッシュ・タイムズ』 IIOO四年三月三一日)アイギリスで開催されるはすであった。しかし、「イギリスには反自動車の強力な圧力団体」があったからだ本来なら、前回優勝がイギリス・ネイピア社の車にのったら・F・エッジ(Edge)(図 3-9)であったので、そもそも、なぜ、第四回ゴードン・ベネット自動車レースがアイルランドで開催されたのであろうか。

|| 勝者ジェナツィ

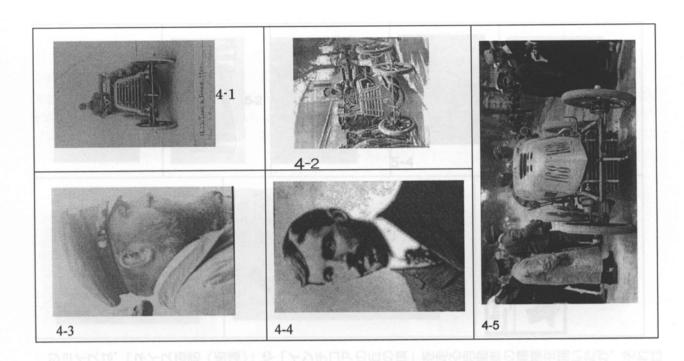
モンゴメリーはさらに、六月四日、「初期の偉大なレーシング・ドライヴァーのなかで、たぶん一番魅力 的な人物は、ベルギー人のカミル・ジェナツィであろう」とし、ジェナツィの経歴を紹介している。(図 2-1,2,4~9) ベルギー最初のゴム工場を設立した人物を父にもつ彼は、一八六八年、ブリュッセルに生まれ、 苦い頃、自転車レースが大好きであったという。「土木工学の学位を取得後、ひとしきり家業に従事してい たが、パリにでかけ、そこを基地としていた新しく刺激的な自動車産業の一部となろうとした」。電気自動 車が未来の車となると信じ、その製造にあたっていた彼は、ガストン・ド・シャスルー=ロバ伯(Count Gaston de Chasseloup=Laubat)と特別仕様の電気自動車で記録をきそった。(図 2-1,2)その結果、彼は、時速一〇 Oキロメーターを超える走行をおこなった最初のドライヴァーとなった。そのときの車は、「弾丸型のラ· ジャミ・コンタント (La Jamis Contente)」(図 2-3,4)で、それは一八九九年四月一日(--)のことであった。 これがきっかけとなって、ジェナツィは一般のひとびとの注目をひくことになる。その後、都市間の自動 車レースに参加し、「はなばなしい恐れを知らぬドライヴァー」という評判をえた。一九〇〇年のゴードン・ べネット自動車レースに初参加したが、見事に破れた。一九〇二年、メルセデス車で参加したが、最悪の クラッシュをおこし、生涯つきまとうニックネーム「赤い悪魔」がついた。一九〇三年のパリ~マドリッ ド間のレースでは、途中まで優勝の可能性があったが、キャブレターにハエがはいり、エンジンがミスフ ァイアーをおこし敗退した。そして、歴史的な第四回ゴードン・ベネット自動車レースでの優勝である。 6 ジェナツィは、結局、三二七マイルを六時間三九分で完走した。





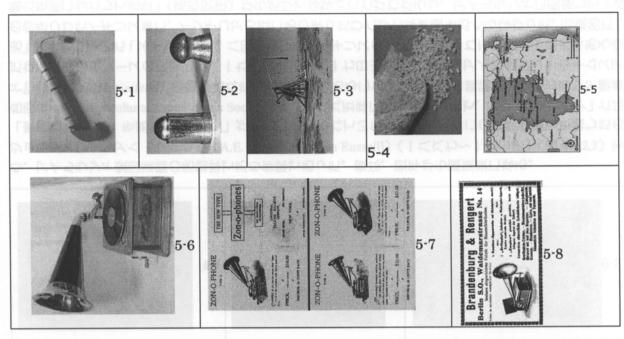


ィネンタル・タイヤ社から一千ポンド、すくなくとも一千ポンドのレース用自動車であった」。ナツィは、約八千ポンドをえた。つまり、彼がうけとったのは、メルセデス社から約六千ポンド、コンテンスター・リーダー。紙四面は、その内訳を報じている――「ゴードン・ベネット杯レースの勝者、ジェジェナツィは、この勝利で賞金約約八、〇〇〇ポンドをえたという。一九〇三年七月四日(土曜)の『レ



四、溝のようなネイス道路を弾丸のように

ボブ・モンゴメリーは、ジェナツィの経歴の説明で、「弾丸型のラ・ジャミ・コンタント」といういい方 をした。まさに、図(2-4,5)をみると「弾丸」という形容がふさわしい。結城訳は、「何台もの車がダブ リンに向かって飛んで来て、溝のようなネイス道路を弾丸のように、滑るように走った」とした。「弾丸の ように走る」とは、「弾丸列車」といういい方があるように、日本的常套句なのであろうか。安藤訳も高 9 松訳も「弾丸」としている。モンゴメリーの用いた「弾丸型」は、英語 'bullet-shaped' であり、ジョイス の方は 'pellets' であった。第四回のレースに登場した自動車は、どうみても「弾丸型」ではない。(図 2-6,7,10 ~17) そちそち、英語'pellets'は「弾丸」ではなく、一般的には「紙・蝋などを丸めた小球」を意味し、ふ るくは、「石つぶて」や「砲弾」のことであり、さらに「(紙豆鉄砲・コルク鉄砲・空気銃などの)弾」を 意味している。〇日口は、「通常は石の球で、一四・一五世紀に飛び道具として使用され、投石機などで飛 ばされた。砲弾。のちに、銃弾。いまでは、小さな銃弾」(図 5-1,2,3) とし、 'cork pettet' (図 5-1,2,4) の 用例(一八五六年)もあげている。「車」は、「滑るように」(結城訳)(「すべりながら」(安藤訳)、「すべ るように」(高松訳))走ったという。 しかし、ジョイス版は、'The cars came scudding in towards Dublin, running evenly like pellets in the groove of the Naas Road.' としており、「常るように」は 'evenly'に対応する。この英 語は、'The two horses ran evenly.'のようにつかうと、「まけずおとらず、互角に」という意味作用をおこす。 したがって、「回台もの車」は「弾丸のように、滑るように走」らなかったのではなかろうか。 結城訳では、 「弾丸」は「疾走」とむすびついてしまうが、'like pellets' は 'running evenly' にかかっているのだから、 「つぎつぎとつぶてが飛んでくるように」というイメージなのではなかろうか。実際、「車の外観が茶化さ れ、つぶてのようだと描かれている」とする読みがある。(注3)この'pellet'は、つぎつづく'the groove' と連鎖している。それは、「鉄砲の溝」を意味するからで、この点で結城訳「溝のようなネイス道路を弾丸 のように」は適切であるかもしれない。それは、図(2-10, 12, 13)にみられるような溝の道路なのかもし れない。(安藤訳は「ネイス道路の細長い道路」、高松訳は「ネイス道路という溝の中」としている。)だが、 'groove'は、中英語に発し、「鉱山の縦坑」を意味していたし、「轍(わだち)」をも意味しているから、時 代状況から推測して、馬車などによってできた「ネイス道路の轍」も連想されよう。また、「何台もの車」 によってつくられた「轍」(図 2-15,16) を連想させるかもしれない。さらに、この語は、「レコードの溝」 を意味するようになっている。 (図 5-5, 6, 7) そちそもこの語は、'grave' を連想させるから、「貧困と無為 の道筋」や「虐げられている者」につながって、もいるのだ。



所」を意味する 'Nas ua Riobh' からきたものであった。
てのことであった。この「ネイス」という土地はながい歴史をもつ町であり、その名は、「王たちの集合場のことであったわけではない。とりわけ「インチコア」が選択されたのは、後述のように十分理由のあっあったことはまちがいない(先述のように、ネイスを出発・最終点とする案もあった)。しかし、それだけネイスでは、参加車の重量測定がなされており、ネイスは、このレースにからむひとつの主要な地点でいる通過するのが、そちそもまっとうが心ししたの外にあった。そして、帰途についた自動車がダブリンにむかうとき、それはこの「ネイス道路」でにのべたように、この場所は、自動車レースの「キンカレン、カーロー、ストラドボーリの三点を結ぶ」何故なのであろうか。「帰途」の模様を描くのであれば、よその場所でもよかったのではないだろうか。すりますよう、「ネイス道路(街道)」や「インチュアの丘の頂」を走る自動車の模様を描いたが、それは

年までは、町委員がおり、それ以後は、地方地区協議会の行政下にあった。(注4)って自治都市は解体された。一八四〇年から一八五三年まで、大陪審によって支配され、一八五四年から一九〇〇年時権だ許可された。こうした特権によって、この町は統治されてきたが、ついに、一八四〇年、国会の法律によって一六〇九年に、チャールズー世によって一六二八年に、チャールズニ世によって一六ローナー大フらな正と、ストススニ世は、新しい特許状を与え、この自治都市に主権を加えた。さらなる特権が、ジェイムズー世によっ日年後、一四一三年、ヘンリー五世は町に入る際、通行料を徴収する権限をこの自治都市に与えた。一五六八年、1011年、ヘンリー五世は町に入る際、通行料を徴収する権限をこの自治都市に与えた。一五六八年、その団体後、一四一三年、ヘンリー五世は町に入る際、通行料を徴収する権限をこの自治都市に与えた。一五六八年、そのはき、1021三年、ヘンリー五世は町に入る際、通行料を徴収する権限をこの自治都市に与えた。 1 日六八年、シッモーリスに譲渡が許された。アングロ・ノルマン人の支配下にあって、多くの変化がなされた。もともとは、当によりの選問人は合うと、もとの意味は、ストロングバウによって、そし、聖パトリックは、紀元四四八年にネイスを訪れて高後の主は、ストロングバウによって、その認は人の最近によると、「下をyortallation」にを、1241年にあった。「江本田であった。(注144)の正式は、近には、1241年にあった。(注144)の正式は、1241年にあって、1241年にあって、1241年にあって、1241年に、1241年にあって、1241年にあって、1241年により、1241年には、1241年にあって、1241年により、1241年により、1241年により、1241年には、1241年により、1241年により、1241年により、1241年により、1241年により、1241年によりは、1241年にあるには、1241年により、1241年には、1241年により、1241年によりますにより、1241年によりにより、1241年によりには、1241年によりによりには、1241年には、1241年によりには、1241年によりには、1241年によりには、1241年によりには、1241年によりには、1241年によりには、1241年によりには、1241年によりには、1241年によりには、1241年によりには、1241年によりによりには、1241年によりには、1241年によりには、1241年には、1241年には、1241年によりには、1241年によりには、1241年には、1241年によりには、1241年によりには、1241年によりには、1241年によりには、1241年によりには、1241年には、1241年によりには、1241年によりには、1241年によりには、1241年によりには、1241年によりには、1241年には、1241年によりには、1241年によりには、1241年によりには、1241年によりには、1241年によりのでは、1241年によりには、1241年には、1241年によりには、1241年によりには、1241年によりには、1241年には、1241年には、1241年によりには、1241年

であるフランス人たちの車に向けられていた」のは、単に、「同じカトリック教徒」(安藤訳注)だからとし、「時おり、人垣から喜んで虐げられている者たちの歓声が上が」り、「彼らの共感は青い車に――友人こうした歴史を知ると、「この貧困と無為の道筋の間をぬって、ヨーロッパ大陸がその富と勤勉とを疾走」

り、アイルランド愛国運動の活動家であり作家であった。彼は、翌年から編集長になる。
ショージ・ウィリアム・ラッセル(A.E. [Geotge William Russell])(一八六七~一九三五) (図 8-1,2,3) であ「家屋敷」「宅地」を意味し、「独立」がそこに込められていたろう。事実、この雑誌掲載を依頼したのは合協会(Itish Ablicultural Organization Society)が、一八九五年に発刊したもので、「ホームステッド」とは、ド』(The Itish Homestead)に掲載されたことは意味のあることである。この雑誌は、アイルランド農業組だから、この「レースの後で」が、一九〇四年一二月一七日出版の週刊統『アイリッシュ・ホームステッ治」権を有していた「ネイス」が、一八四〇年以降、イギリスの支配下に置かれていたからなのであろう。の色をつけたイギリス車に、インチコアの丘にあつまったひとびとは声景をおくらなかった。伝統的に「自勢力を削ごうとしてきた。「高松訳注)からだけではないことがわかろう。アイルランドを支援して「縁」か、「アイルランド人と同じカトリックであり、十七世紀以降陰に同じてイルランドを支援して、するには、翌年長には、翌年長月である。



慰めの心が、「青い車」にむけられたというのではないだろうか。.

とあるから、「同情、思いやり、慰め」と解釈できる。勝者になれなかったが、よくやったという敗者への「好意は、青いろの自動車」としている。この「好意」もややニュアンスの点で妥当ではない。'sympathy...for'、では、'Their sympathy, however, was for the blue cars...' である。高松訳は「好意は青い自動車に」、安藤訳はそれにしても、結城訳で「共感」が「車」に向けられたとあるが、おかしないい方である。ジョイス版

五自動車が馬車が

る周申に二人のきれいな婦人を乗せてい」(結城訳) たところにいきあわせた。フトン通り(図 14-1) にさしかかったところ、「角のところでは、太った小男がもう一人の太った男の御す路後後、五人は「芳しい煙草のかすかな雲を漂わせながら、スティーヴンズ・グリーンを散策した」。グラ替える」ためであった。うつスというイギリス人青年も加わったその「晩餐はすばらしく、最高であった」。シのホテルで一緒に晩餐を取ることになっており、その前にジミーと彼の家に宿泊している友人は家で着ルランド銀行(図 9-8) のそばに車を止め、「ジミー(・ドリル)とその友人が降りた」。それは、「セグアなりのドイルという青年」が同乗していた。一行は「ディム通り」を走り、運転していたセグアンがアイ師であるアンドレ・リヴィエール、ヴィローナという名の大男のハンガリー人、それに小ざっぱりした身参加したものではなく、所有者はシャルル・セグアンであった。彼のほかに、「カナダ生まれの声気技

に、約一、五〇〇台の車がダブリンにやってきたというのだから。える。ボブ・モンゴメリーが指摘したように、一九〇三年七月二日の自動車レースのために、参加車以外車の運転手たち警笛や電車の苛立った運転手の鐘の音で騒々しかった」(結城訳)。それも当然であると思いの街の様子は通常ではなかった。「彼らはディム通りを走った。通りはいつにない交通量で混雑し、自動配し(図 9-3, 4, 5, 6)、自動車はまばらであった。しかし、ジョイスの表象する「レースの後で」のダブリしている。一体、どちらが妥当なのか。まさに、この頃、「馬車」と「路面電車」がダブリの街の風景を支口の最後の引用箇所で、結城訳が「馬車」としているところは、安藤訳は「自動車」、高松訳は「車」と

ても大切な問題である。ジョイスがどの時点のダブリンの様子をイメージとしてもっていたか不明であるきわだち、テーマとしての意味もでてくるが、そうなのであろうか。テキストを表象として読む場合、と当る方式 「婦人二人」が「馬車」にのったとなると、若者たちがのっていた「自動車」との対照がジョイス版ではこうなっている―― 'a short fat man was putting two handsome ladies on a car in charge of

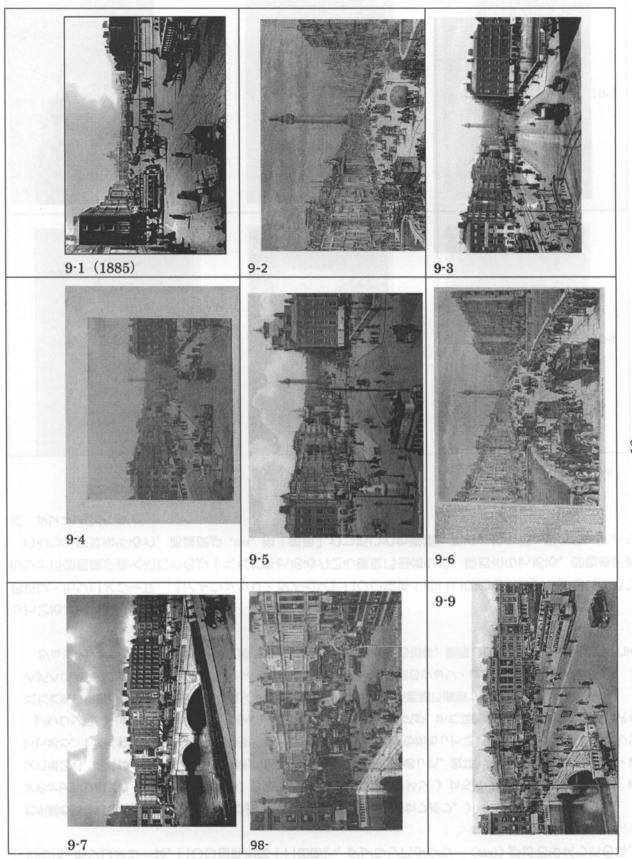
九〇〇年のつぎの例は興味ぶかい―― '1900 W.W. Beaumont Motor Vehicles I. 615 Hill-climbing trials している」とあるが、'car'、が 'motor car'、を意味する例は、一八九六年が初出になっている。そして、一インガム)では、'car'、が四輪の「貸し馬車」('hackney carriage')を意味し、'cab'、が「ハンサム」を意味しによると、'なって、「地方の町(たとえばバーひによると、'なってくるからだ。'car'、を「馬車」と解釈するには、よほどの確信がなくてはできない。たしかに、OUが、すくなくとも一九〇三年七月二日、あるいは一九〇四年一二月頃のダブリンの交通事情の読みがことが、すくなくとも「九〇二年七月二日、あるいは一九〇四年一二月頃のダブリンの交通事情の読みがこと

とも、「二人のうつくしい婦人」が「太った小男」と何らかの関係にあったと想像されよう。故、「二人のきれいな婦人」が、ひとりの男によって「辻馬車」に乗せられなくてはならないのか。少なくしてウェストランド・ロウ駅にむかうが、これは、「辻馬車」以外にはかかんがえられない。そうなら、何ー」と合流した五人の若者たちは、「馬車に乗り込み、ぎゅうぎゅう詰めになりながら大笑い」(結城訳)の「御者」であろう。そうなれば、「馬車」は「辻馬車」となる。事実、このあと、アメリカ人「ファーリ「馬車」を「御する」「もう一人の太った男」とは何者なのであろうか。容易に想像されるのは、「馬車」と「太った小男がちう一人の太った男の御する<u>電車に二人のきれいな婦人を乗せてい」たのだとして、</u>

-」か、さらに「タクシー」か「個人所有」かの問題がある。 人所有のものとなろう。このどちらの読みにせよ、「馬車」か「自動車」か、さらに「辻馬車」か「タクシる男は、もうひとりの男の友人で、「自動車」は、フランス人セグアンが自動車を所有していたように、個しい婦人」は「二人」である。この対比から、前者が自然な読みとなろうし、その際、「託された」運転すすねた。…べつべつに駆者に指示をした」〔高松訳〕。)しかし、「男」は「二人」とも「肥っ」ており、「美のんでいたとも読める。(「死者たち」にはこうある――「駆者が膝を毛布でくるみ、身を屈めて行先をたあったとも、あるいは、「もう一人の肥った男」は、タクシー「自動車」の運転手で、婦人たちのことをた事に乗せていた」としている誘訳は「一人の背の低い、肥った男が二人の美しい婦人を含う「一人の肥った男に近く」

業許可書を返還したという。(注ら)る。ちなみに、イギリスでは、一九四六年、最後の辻馬車がその仕事から撤退し、一九四七年に御者が営頃のものである。図(10-6)は、一九五三年頃のオコネル街の様子であり、完全に街を自動車が占めていのは、図(9-7)以降であり、むしろ馬車がすくなくなるのは図(10-1)あたりからで、これは一九一六年〇年(9-4)とほぼ年代順にならんでいる。この一連の図で、自動車の姿がまちがいなくみえるようになる図(9-1)は、一八八五年のものであるらしく、以下、一八八七年(9-2)、一八九七年(9-3)、一八九





一九〇五年頃であるといっている。

さらに、モンゴメリーは、二〇〇四年五月一二日号で、ダブリンにタクシー (taxi) がおめみえしたのは、

れを誇りにしていた。(図11-7, 8 はセレポレの蒸気自動車、図11-9 はセレポレ。)

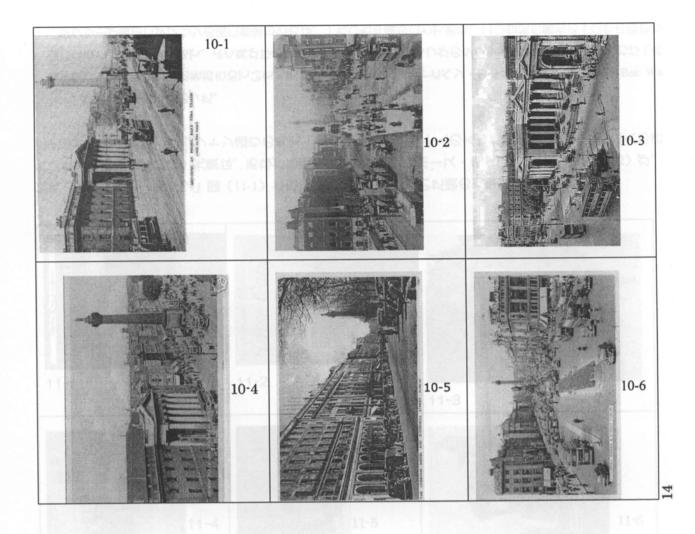
ブラウンは、すでにアイルランドの科学界では著名な人物となっていたが、それは電気理論と電気化学研究によっ てであり、一八九四以来、何らかの機械的交通手段を獲得することに関心をもっていた。この関心から、彼はフラン スに赴いた。それは、フランスでは自動車が急速に進歩していたからであった。彼は、著名な自動車運転者サン・オ メのドアザン氏(M Doazan of St Omer)の家にまでいった。彼は(レオン・)セルポレの蒸気自動車を所有し、そ

くだくことはないだろう。が、ベルファスト近くのロングハースト在住のジョン・ブラウン (John Brown) は、一 八九六年に最初の車をアイルランドに輸入する際、まったくことなった問題に直面した。

ジョン・ブラウンを回想する。今日の自動車の運転者は、制限規制の法律、際限のない道路工事と混雑にこころ

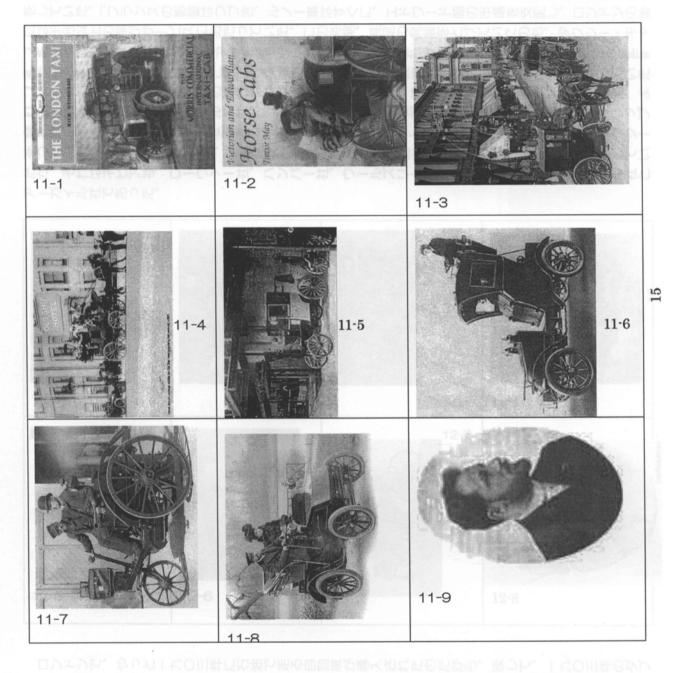
0M210°

六 ダブリンのタクシー こうした資料をみると、結城訳が 'car'を「馬車」としたことも理解できる。さらに、最初に、アイル ランドに自動車が導入されたのが一八九六年であるという資料に出会うと、なおさらである。自動車史家 のボブ・モンゴメリーは、『アイリッシュ・タイムズ』二〇〇四年一月二二日号の記事でつぎのようにい



vtes.) が設立した会社であった。 &日タクシー会社」が成功をおさめていて、それはアルバート・ワイトとペン・ワイトの兄弟(Albert and Ben Wa頃になると、ダブリンの町で、よく見かける既定の光景となった。いくつかのタクシー会社が繁盛し、とりわけ「Aタクシーが最初にダブリンの街に登場したのは、一九〇五年頃のことであり、二〇世紀の最初の一〇年の総わり

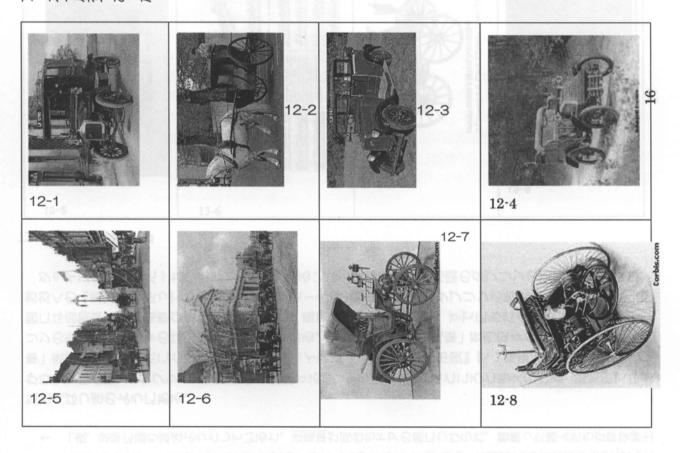
新興の「タクシー・キャブ」図(11-1)と攻防戦をくりひろげていた頃の光景だからだ。れいな婦人を乗せている」光景は、あながち間違いではない。「ホース・キャブ」(辻馬車(図11-2)が、この説が正しければ、グラフトン通りの角で「太った小男がもう一人の太った男の御する馬車に二人のき



場したのは、一八九七年であったらしい。図(11-3)は、一八九〇年代のロンドンのものであるという。そして、ロンドンに自動車のタクシーが登図(11-3)は、一八九〇年代のロンドンのものであるという。そして、ロンドンに自動車のタクシーが登

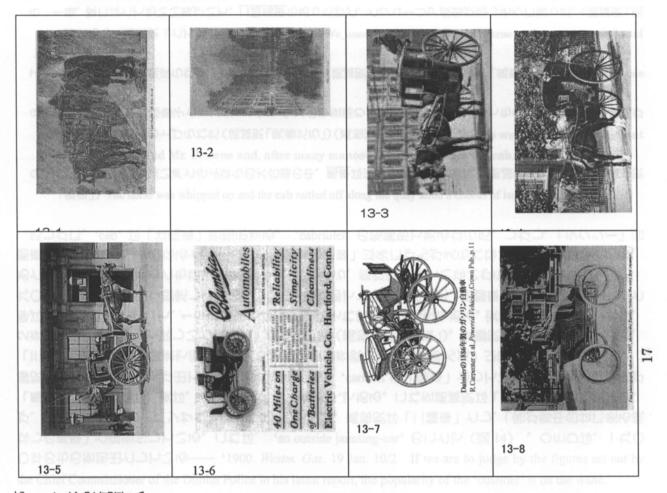
九八年頃には、さらに五〇台が仕事にでていた。これらは、「バーゼイ・キャブ」(図 11-5)と呼ばれていたが、最初のモター付タクシー・キャブは、驚くことに、動力は電気であった。一八九七年、二五台が導入され、一八

姿をみることができなくなった。(注る) かわらず、馬の引くキャブに忠義を尽くしていた。一九〇〇年頃には、わずか二年の短命に終わり、まったくその不運にも、デザインが悪く、バッテリーが信用できるものでなかったために、この商売は振るわず、お客はあいもそれはその発明者の名にちなんだものであったが、それが発する音から「ハミングバード」と仇名を頂戴していた。



と思い込まされてきている。ここで、「馬車」に読みかえよというのであろうか。同一の語が、「自動車」ストには 'car' としかなっていない。読者は、テキストの最初から、 'car' という語が「自動車」であるの客と同様、「ホース・キャブ」が、ふたりの「きれいな婦人」の乗った乗り物であったと。しかし、テキリンに自動車がタクシーとなっていることは考えられない。そう、結城訳は考えたのであろう。ロンドンロンドンで、やっと一九〇三年に石油で走る自動車が導入されたのだから、まして、一九〇三年のダブ

志文出版社、IIOOO年)。(注了)になる。そのため中国語訳は、「馬車」ではなく「自動車」としているとできる。(『都柏林人』(杜若洲訳)をさすが、「馬車」と読む可能性もある。ただ、動詞が「駕駛」とあるので、車を「運転」するという意味a car in charg of another fat man 、を「由一個肥兄所駕駛的車子」としている。「車子」は、通常、「自動車」に読めば、「自動車」としか読めない。高松訳は、すなおに「車」と読んだ。ちなみに、中国語訳では、'onと「馬車」を同一テキストで指し示しているというのだろうか。この読みは、とても困難である。すなお



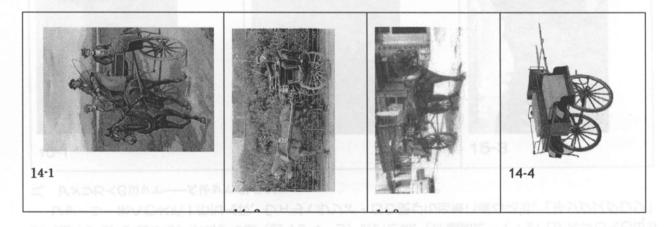
七 cab は「辻馬車」か

たとえばつぎのようにある。 かりやすいのは、「タクシー/辻馬車」を意味する語 'cab' を使用したところと考えられる。結城訳では、車」を表象しなかったことになる。実際、ジョイスは、『ダブリンの市民』で「馬車」を描いている。わりンの街から姿をけすのは、一九三〇年頃である。もし、結城訳の「馬車」を否定すれば、ジョイスは「馬囲には自動車と路面電車が走っているだけで、馬車は不在なのである。すでにみたように、「馬車」がダブおおくの「馬車」が走っていた。しかし、ジミーら四人が、自動車でダブリンの街を走っているとき、別まには、当りてスが表象した一九〇三年七月二日、あるいは一九〇四年一二月頃のダブリンの街には、現実には、ジョイスが表象した一九〇三年七月二日、あるいは一九〇四年一二月頃のダブリンの街には、現実には、

- 用車」)Walking swiftly by at night he had seen cabs drawn up before the door and richly dressed ladies, escorted by cavaliers, alight and enter quickly.
- 2 「男は、馬車を呼んれくれないか、と言った」(結城訳「恩寵」)The man said they were to get a cab for him.
- 叔母が言った。(結城訳「死者たち」)(高松訳、なし) "Gretta tells me you're not going to take a **cab** back to ーグレタの話だと、あなたたち、今夜は<u>馬車</u>でモンクスタウンには帰らないそうね、ゲイブリエル、とケイト

Monkstown tonight, Gabriel," said Aunt Kate.

- 4 開車の窓がすっと力タカタと鳴りっぱなしで、メリオンを過ぎてからは東風が吹き込みました。(結城訳「死者Merrion.
- ら ―テディはダブリンじゅうの関東を捕まえる気らしい、と彼が言った。(結城訳「死者たち」)(高松訳「馬車」)
- 者たち」)(高松訳「とてもいい馬と二輪馬車」) "We used to have a very good horse and trap at home," said の 一首、家にはとてもいい馬がいて、二輪馬車もあったけど、とジューリア叔母が悲しそうに言った。(結城訳「死
- cab," he said. 「周車は一台しか捕まらなかった、と彼は言った。(結城訳「死者たち」)(高松訳「馬車」) "I could only get one
- 00 ミセス・マリンズは息子とミスター・ブラウンの手を借りて戸口の階段を降ろしてもらい、さんざん手を焼かいますなす。 ミセス・マリンズは息子とミスター・ブラウンの手を借りて戸口の階段を降ろしてもらい、 さんざん手を焼か
- 「馬車」)The horse was whipped up and the cab rattled off along the quay amid a chorus of laughter and adieus.



いる。いくつか例をあげる。 結城訳は、「レースの後で」だけでなく、ジョイス版が'car'としている箇所をほとんど「馬車」として

-O あいつは今では商売女になっている。いつかの晩、 馬車で二人の男とアール通りを東に向かっていたよ。(「II ≺ら色機駅」) "She's on the turf now. I saw her driving down Earl Street one night with two fellows with

- her on a car."

 --- IMKター・スートンは配画に示ったの上げられ、IMKター・パワーが行き先を調査しませている間に持います。 UIM機能の言葉を述べ・・・。 (「医師」) Mr. Kernan was hoisted on to the car and, while Mr. Power was giving directions to the carman, he expressed his gratitude to the young man and regretted that they could not have a little drink together.
- ー2 開車はウェストモアランド通りに向かって走った。(「恩寵」)The car drove off towards Westmoreland
- 麗」)The car halted before a small house on the Glasnevin road and Mr. Kernan was helped into the house.

している。 -・リーダー』紙(は、一九〇三年七月四日(土曜)に掲載した記事で、'car'をとてもさりげなく使用安藤訳は、11を「車」と「駆者」に、あとの箇所は「馬車」にしている。第一節であげた『レンスタ

抜けなくてはならなかった。ると表面がけずられて溝ができていたので、乗り物、つまり自動車やその他のものが雑踏をなすなか、うまく通りさざるをえなかった。とりわけ特別観客席あたりともなると、狭い道路は、観客席の支えが邪魔をし、牽引車が通ャノン十字路にやってきた。道路は自動車で活気づき、自転車運転者も車の運転手もともに注意を払い、注意を促い、かなりのひとびとが、ネイス、アサイ、ニューブリッジ、キルデアなどの地域から車と自転車にのって、バリシ

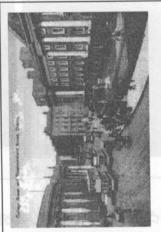
このうち「自動車」は 'motors'と 'automobile'、「自転車運転者」は 'wheel-men'、「車の運転手」は 'car-drivers'である。



15-1



15-2



15-3

八 アメリカ人のヨット――ベネットとアスター

ストは、わざわざファーリーが「アメリカ人」だと規定している。したがって、そのヨットの持ち主はフとなっているだけであるが、定冠詞が示唆しているように、その特定の人物とは誰なのであろうか。テキ人」"the American's'のものとされていることである。三つの日本語訳では、単に、「アメリカ人のヨット」けをする。この一連の出来事を描くテキストに、興味深い記号がでてくる。まず、「ヨット」が「アメリカト」「ニューポートの美女」号にのりこむ。そこでひとしきりダンスをして騒いだあと、カードゲームで賭駅(図 16-8)でおりる。それから港(図 16-1~7)までいき、「手漕ぎポート」で「アメリカ人のヨッファーリーをくわえた」行五人は、ウェルトランド・ロウ駅から列車に乗り込み、「キングズタウン」

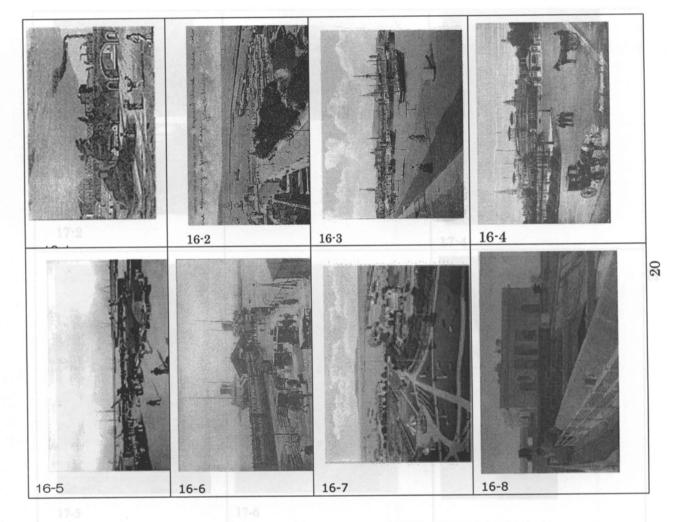
った小男」とされているのだろうか。偶然、そうだったというのか。アーリーであると読むのが自然であろう。だが、はたしてそうなのか。そして、何故、ファーリーは「太

彼らは船着場で手漕ぎポートに乗り、アメリカ人のヨットのほうへ向かった。夜食と音楽とカードが待っているの

だ。ヴィローナが確信をもって言った。

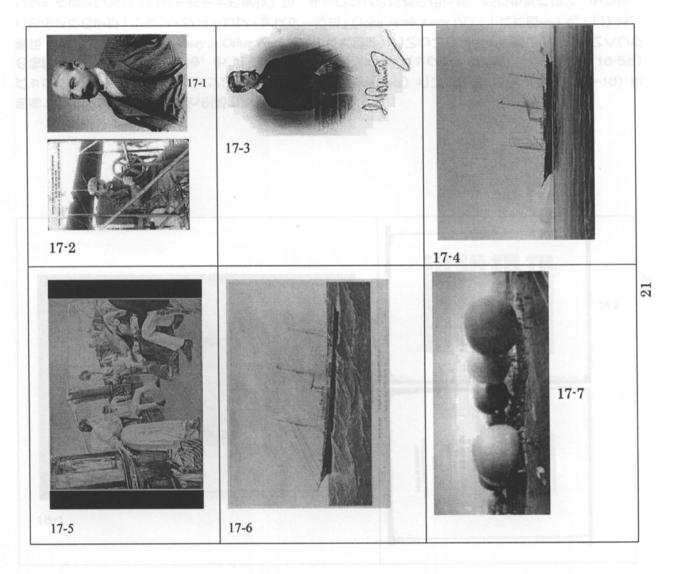
創案した。・・・・誰かがこの《ニューポートの美女》号という名のヨットに乾杯し、それから誰かが最後に大きな賭ーが紳士役でリヴィエールが淑女役だ。それから即興のスクエア・ダンンスが行われ、みんなが独自フィギュアを能室にはヨット用のピアノがあった。ヴィローナがファーリーとリヴィエールのためにワルツを弾いた。ファーリーそいつはすばらしい!

けしようと提案した。(結城訳)



は、「国際ヨット・レース」の「ゴードン・ベネット杯」を設立していたのである。 釈を可能にするのは、「第四回ゴードン・ベネット杯目動車レース」の「ゴードン・ベネット」である。 彼を目的としていたのではないだろうか。 その途中でファーリーと合流したとういうのではないか。 この解験のあと、単に、「散策」 にでただけだったのだろうか。 この「あのアメリカ人」所有のヨットにくることかしそうか。「苦しい煙草のかすかな雲を漂わせながら、スティーヴン・グリーンを散策した」 五人は、晩でしまらかである。 この路線でいえば、ファーリーが四人を自分のヨットに招待したことにある。 してようからである。 それにしても、そういったのは誰なのか。 一見、そのヨットの所有とことにあっていまった。 「見、そのヨットの所有をと言える」が、カーナが確信をもって「そいつはすばらしい!」 いうのだから、誰かがそういったとするのが自然でいる」、そして安藤訳では「そうて安藤訳では「できましているのだ」は、高城訳の「夜食と音楽と力・ドが待っているのだ」は、高松訳では「夜食と音楽と力・ド遊びが待って

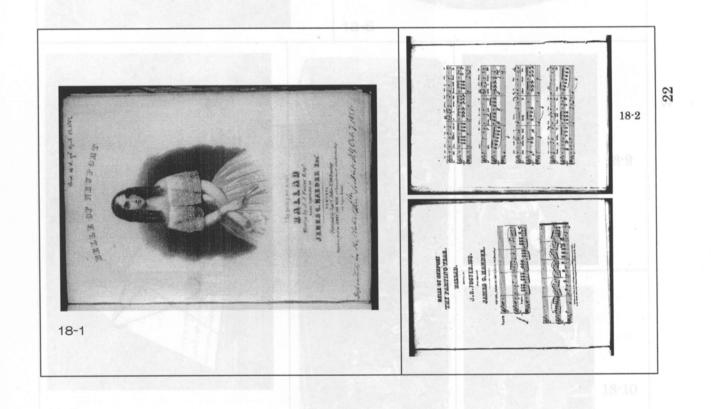
6) (図 17-5 は、ナモウナ号の甲板風景であるという。) 指示しているとも読める。一八八二年に製造された彼のヨットは、「ナモウナ」号と呼ばれていた。(図 17-4, 1スの覇者となった。こうしたことから、「あのアメリカ人」とは、「ゴードン・ベネット・ジュニア」を1ヨーク・ヨット・クラブ」の最年少の会長になっている。一八六六年には、最初の大洋横断ボート・しをおこなっていた。この地は、大金持ちが集い、豪華なヨットをみせあっていた。彼は、その地で、「ニュューヨーク・ヘラルド』紙を受け継いだ大金持ちで、「ロード・アイランドのニューポート」で夏には避暑出身であった。教育は主としてフランスでうけ、人生のほとんどをその地で過ごした。彼は、父から『ニゴードン・ベネット・ジュニアは、ニューヨークに生まれ、母ヘンリエッタ・クリーンはアイルランド

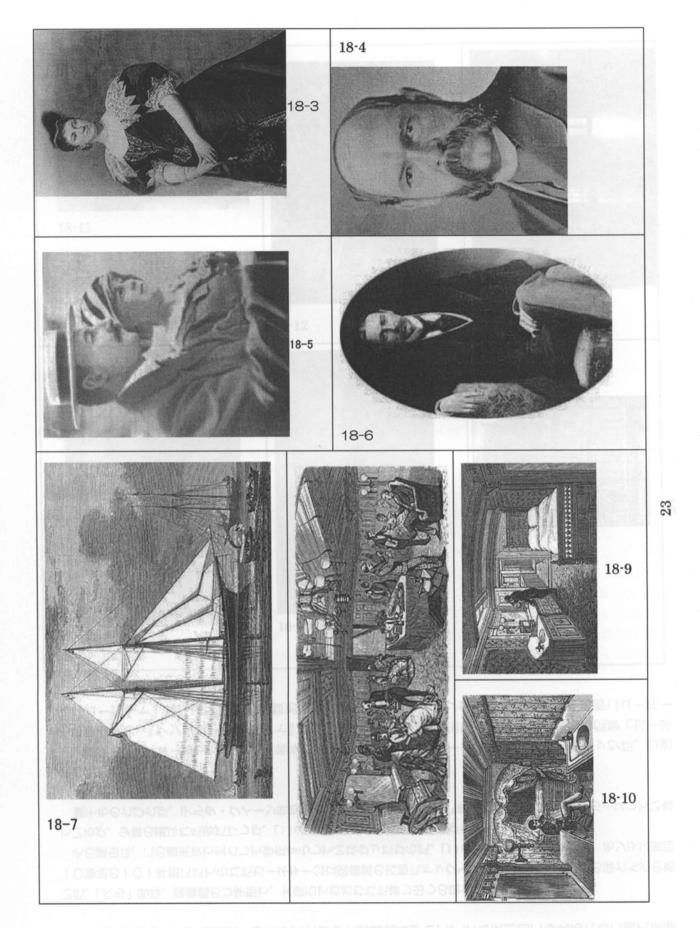


着目してはいない ヨットの集合地でもある」としている。しかし、どれも、何故、「ニューポートの美女」となっているかにしている」という。また、高松訳は、「ニューポートはアメリカのロードアイランド州の港湾都市。避暑地。力の金持ちの休暇の中心地、(一九世紀後半の) 新興成金たちの夏のショーケースであるという評判も示唆のニューポートをほのめかしている。ここは、ヨット活動の中心地である。また、ニューポートがアメリ美女」(The Belle of Nembort)と名づけられているからである。ドン・ギフォードは、「ロード・アイランドレかし、もうひとつの読みの可能性がある。それは、「あのアメリカ人」のヨットが、「ニューポートの

ツを弾いた」。実は、一九世紀後半には、この「ワルツ」の曲として、「ニューポートの美女」があった。ヨットの「船室にはヨット用のピアノ」があり、「ヴィローナがファーリーとリヴィエールのためにワル

Maeder)作曲のバラード (ballad: song with piano) 「ニューポートの美女」('Belle of Newport, thy parting tear, 作者は、キンケル (Ch. Kinkel) (一八七二年出版) である。さらに、ジェイムズ・G・ミーダー (James G. 作者は、キンケル (Ch. Kinkel) (一八七二年出版) である。さらに、ジェイムズ・G・ミーダー (James G.





が全体にきないないできた。(数 17-3) このように、英語ではヨットを「彼女」と女性的に残らので、したのである。東京、「九二九年に建造された、三五人乗りのモーター・ヨット「ベル」は「中上は「中国のまり」が「開い出します」が「川田大郎では高麗神殿を行いて、それを非常にある。「はし出しれ」が「周日出します」が「印刷」のようには「日間」のようには、「四日には、「日間」のようには、「日間」のようには、「日間」のようには、「日間では、「日間では、「日間」のようには、「日間」のようには、「日間では、「日は、「日は、日は、「日間では、「日は、「日は、日間では、「日は、日は、「日は、日間では、「日は、日は、「日には、日は、日は、日は、日は、「日は、日は、日は、日は、日は、日は、日は、日

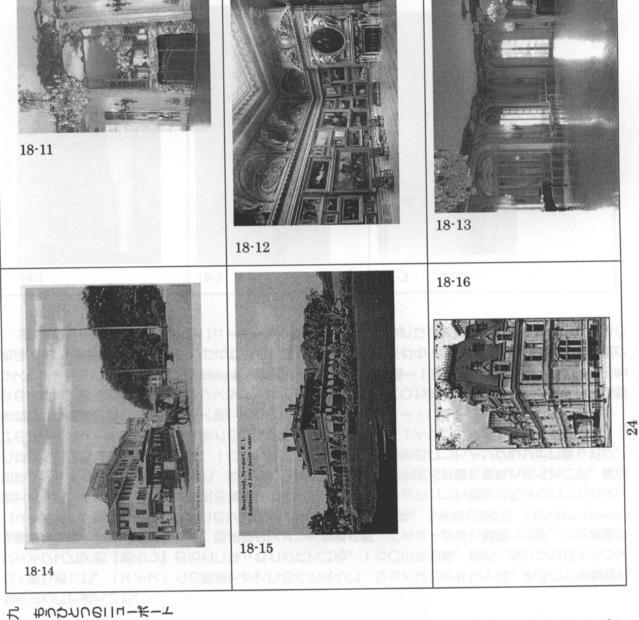
つまり、「貸し出し机」が「川船」のようだと思った図書館員がいて、それを川船にみえるように細工を施 したのである。事実、一九二九年に建造された、三五人乗りのモーター・ヨット「ベル」号(もとは「マ ッジ三世」号)が復元されている。(図 17-3)このように、英語ではヨットを「彼女」と女性的に扱うので、

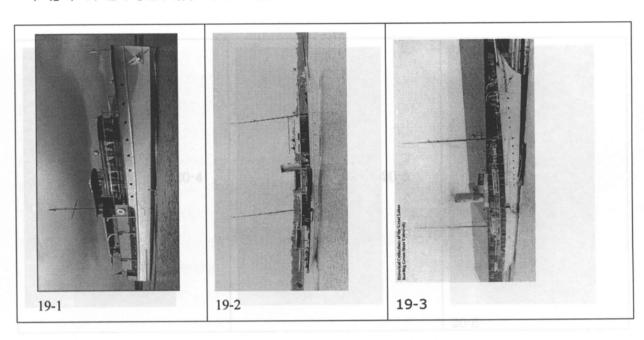
ているが、少数の選ばれた者だけしか、「ニューポートの美女」におめにかかっていない。 その理由は、この週末まで主として存在すらしていなかったからだ。「ニューポートの美女」号は、モンマス街四 一〇番地の一〇一年前にたてられたカーネギー公立図書館の内部にドック入りされている。この間のほとんどのあ いだ、「ベル」号は、図書館のリ字形で、大理石でおおわれた貸し出しの机としてみとめられていた。

数千ものとびとが、デルタ・クイーン号やミシシッピー・クイーン号に乗船して、オハオ河をクルーズしていき

のようにしるしている。

「ニューポート」は、アメリカに多数あるが、そのなかでも「ケンタッキー州キャンベル郡ニューポー ト」は興味深い。『ケンタッキー・ポスト』紙オンライン版の二〇〇三年一〇月一四日掲載の記事「カーネ ギー図書館は、〈ニューポートの美女〉号を接待している」で、レポーターのマイク・ラトレッジは、つぎ



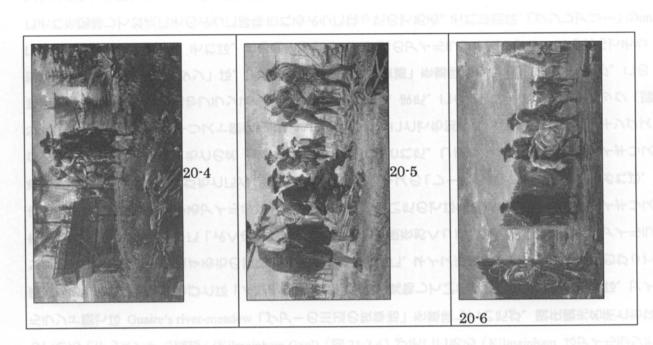




した」。そして、六人の若者たちが、「アメリカ人のヨット」でパーティをするためにおりたったのが「キたが若いうちに考えを変えてしま」い、「キングズタウンで肉屋を開いて金儲けをし、・・・財産を何倍にもを示す典型は「キングズタウン」である。ダブリン市民ジミーの「父親は急進的な国民党員として世に出半リスの支配をのがれたが、一九〇三年の、または一九〇四年の「ダブリン」はそうではなかった。それふたつの「ニューボート」は、いずれちイギリスの植民地化によってできた町であったが、独立戦争後イ



20-7



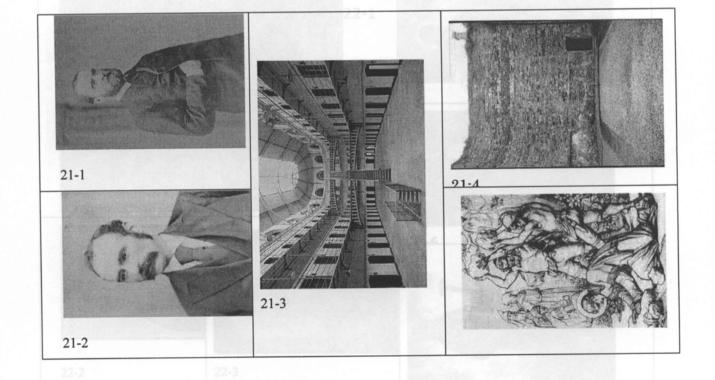
ングズタウン」駅である。この名は、国王ジョージ四世がこの地をおとずれたとき、つまり、一八二一年 にそれを記念して公式にそのように呼称されるようになったのである。それ以前は、「ダンレアリー」(Dun Laoghaire)と呼ばれていた。それは、この地を創設した五世紀のアイルランド王レアリーにちなんでそう 呼ばれていたのである。「ダン」は、アイルランド語では「要塞」を意味している。レアリー王が、この 地をえらんで、ブリテン島やフランスへの急襲の拠点とした。また、このレアリーは、聖パトリック(図 22-5)が国内を旅行してキリスト教を布教することを許したことでも知られている。そして、「キングズ タウン」は、一九二二年、もとの名「ダンレアリー」にもどされた。つまり、一九二二年六月のイギリス 連邦からの分離直前に、名がちとにどったことになる。ジョイスの「レースの後で」は、今日からみれば、 まさにそこへ向かおうとするアイルランドの状況を表象していたのではないだろうか。民衆が、イギリス 車ではなく、フランスの車に「よくやったという慰め」の声援をおくったというのは、そうしたアイルラ ンドの独立への動きを示唆するものであった。と思える。さらに、ネイス街道を通過しダブリンにむかって 帰途にある自動車を、ひとびとは「インチコアの丘の頂」で見物していた。この「インチコア」は、アイ ルランド語では Guaire's river-meadow「ゲアーの川辺の牧草地」を意味していたが、現在観光名所ともな っている「キルメイナム監獄」(Kilmainham Gaol) (図 21-3,4) がそこにある (Kilmainham はアイルランド 語では Cill Mhaighneann)。この監獄は、一七九二年に建てられ、アイランド人連盟 (the Society of United Irishmen)の著名な愛国主義者や共和主義者がとらえられていたし、一八四〇年代のチャールズ・ステュ アート・パーネル (図 21-1) やマイケル・デヴィット (図 21-2) もそうである。さらにここでは、一九一 六年のイースター蜂起の指導

著たちが処刑された。

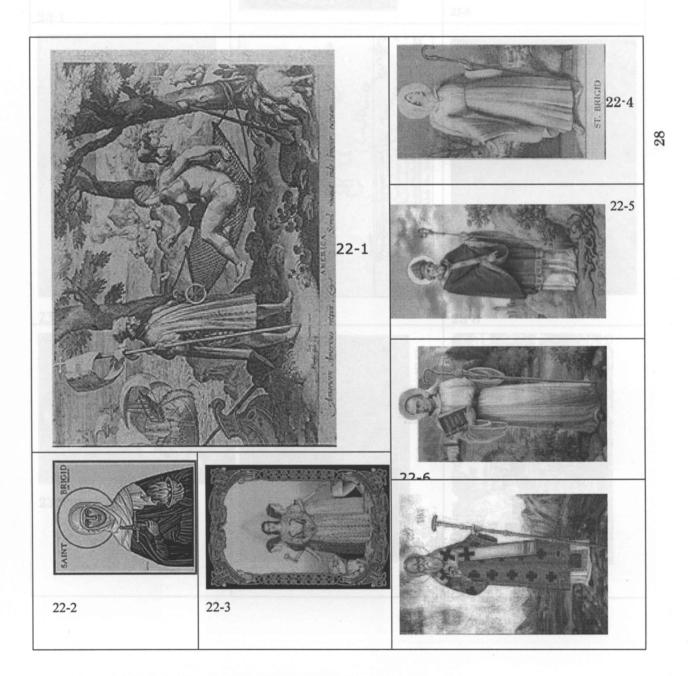
処刑といえば、「五人の若い男たち」が、

煙草を吸い

な ながら散策した「スティーヴンズ・グリーン」とは、一八世紀には公開統首刑場があったといい、その名 は「聖ステパノ教会」にちなみ、「スティーヴン」とは、石で殺され最初の殉教者となった「聖ステパノ」



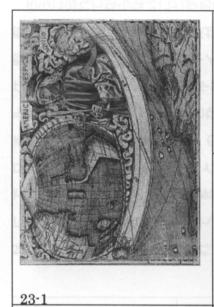
(図21-5) のことである。



23-4

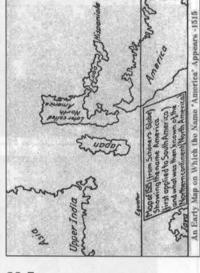


23-5



23-

ANGELOW STATE OF THE STATE OF T





29

23-6

23-7

23-8





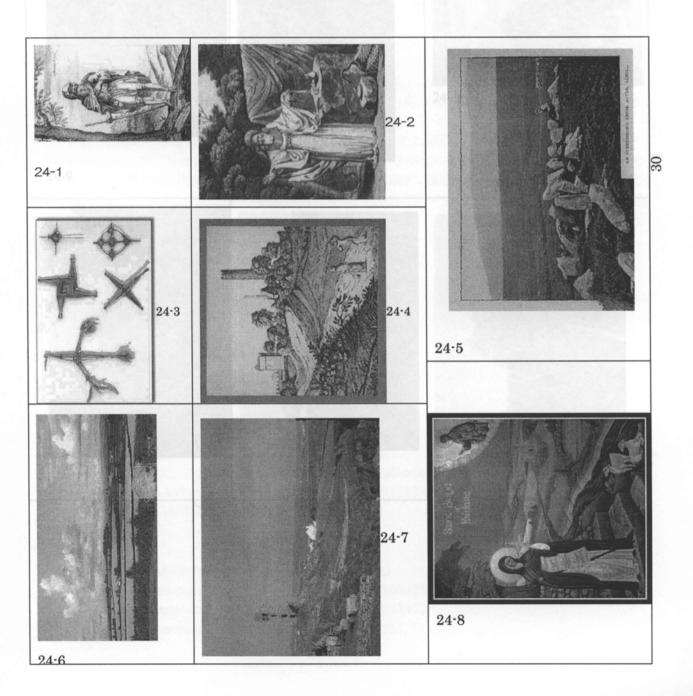


23-9

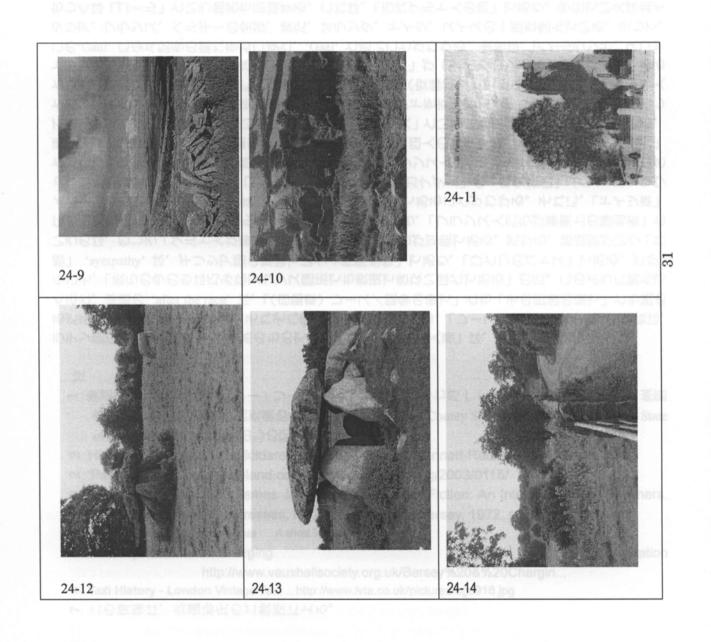
23-10

23-11

22-11,15,13,14,15)でおこなわれ、コースは8の字を描き、聖ブリジッドの十字架(図 24-3)ににていた。にも使用されていたろう。そして、第四回ゴードン・ベネット杯自動車レースは、このドルイドの地(図で、「オーク(樫)」の「賢者」を意味していた。「オーク」材は、ヴェスプッチをアメリカにはこんだ能で、「オークの来の教会」という意味であった。「オーク」といえば、「ドルイド」の語源は Darn-vidさどり、「キルデアの聖なる炎」の女神であった。ちなみに、「キルデア」は、アイルランド語では Cill ルジッド (図 52-2,4) の拠点となった。ちとものでが、「キルデア」は、アイルランド語では Cill サルトの女神ブリジッド (図 52-3) の神殿があった場所であるが、キリスト教が侵入してくると、聖ブルトヴィット (図 52-6)であったが、アングロ・ノルマン人の支配下で、ウェールズの守護聖人であったはことがあらたは、オールにの守護聖人であった。さらに応れてならないにはれている。また、ネイスを含むすいには、マイスのは、ログル・プル・プランドは、ドルイドの 25-5)もしくは、ログに応れてならないに、カイスを含む、オースを含む、サースを含むに、カールズの守護聖人であった。



「黒い水溜り」(Dubh Linn)と呼んだことから由来する、英語名なのである。ゲール語では、Baile Átha Cliath である。ケール語では、Baile Átha Cliath である。「ストルランド女王メアリー一世によってつくられた例で、「キングランド女王メアリー一世によってつくられた例で、「キングランド女子、「カーローのの一部が通過し、ギフォードがいう「クィーンズ州」(Queen's County)は、一五五六年にまた、「一人の一部が通過し、ギフォードがいう「クィーンズ州」(Queen's County)は、一五五六年に



1-1 http://kildare.ie/heritage/gordon-bennett/images/map-r...
1-2 http://www.scienceandsociety.co.uk/Pix/TRN/29/10327529
1-3 http://www.scienceandsociety.co.uk/Pix/NAT/38/10324738.

こうした地名の戯れの結果をもって、ジョイス版の最初の部分をみなおしてみると、そこには「ケル ト語系一の名と「ゲルマン語系」の名が分布していることがわかる。 もちろん、ジョイスのテキストは 英語、つまりゲルマン語系の言語で書かれているので、ゲルマン語系が名目上優位であることにまちが いはない。しかし、実質的には、ケルト語系の名が支配的であることがわかる。結城訳テキストには、 「彼ら(喜んで虐げられている者たち=アイルランド人)の共感は、青い車に――友人であるフランス 人たちの車に向けられていた。/それにフランス人たちが事実上の勝利者だった」とある。この「事実 上の勝利者」は、ジョイス版では 'virtual victors' である。この 'virtual'は、「名目/事実」の関係性の ことを示唆している。この関係が、「ゲルマン語系/ケルト語系」の関係にもなっているのである。「ネ **イス」(Naas)や「インチコア」(Inchicore)だけではない。結城訳版が、「彼らの今の心は巧みなフラ** ンス語法でも表現できないほどである」としているうちの「フランス語法」とは、'Gallicism'、となって いるが、これは英語では'Gaul'に対応する。この語は、「フランス人」という意味もあるが、「ガリア」 もしくは「ゴール」という地名も示唆する。これは、「古代ケルト人の地」であり、今日でいえば北イ タリア、フランス、ベルギーの全部、また、オランダ、ドイツ、スイスの一部を含んでいる。そして、 この'Gaul' に少々記号の戯れをおこすと、'Gael' と近いことがわかる。後者は、アイルランド、スコッ トランド、マン島のケルト人をさす。だから、「フランス人」が「アイルランド人」の「友人」である というのは、すでにのべたように、「同じカトリック教徒」(安藤訳注)だからとか、「アイルランド人 と同じカトリックであり、十七世紀以降陰に陽にアイルランドを支援してイギリスの勢力を削ごうとし てきた」(高松訳注)からではないのだ。そちそも「ケルト人」という共通項が存在していたのである。 また、「これらの小ぎれいな自動車の一台」に乗っていた「四人の青年」は、三人までが「ケルト人」 とかかわりがありそうである。自動車の所有者である「フランス人」の「シャルル・セグアン」、「小ざ っぱりした身なりのドイル」は「アイルランド人」だし、「カナダ人」の「電気技師」「アンドレ・リヴ ィエール」でも、その名が示唆するように「フランス系」であることがわかる。それに、「ドイツ車」 にのって優勝した運転手は「ベルギー人」であった。だから、「フランス人たちが事実上の勝利者」と いうのは、むしろ「ケルト人が事実上の勝利者」と読むことが可能である。だから、結城訳がいう「共 感」'sympathy'は、ギリシア語の意味でいう「仲間感情」であり、「ひとつのパトス」である。だか st らこそ、「彼らの今の心は巧みなフランス語法でも表現できないほどである」のだ。このように読んで くると、標題の'after the race'は、「(自動車)レース/競争の後で」とも「その民族の後で」とも読め るだろう。ふたつの 'race'は、それぞれ語源がことなっている。「レース/競争」を意味する前者は、 ラテン語に由来するゲルマン語系のものであり、後者「民族/人種」は、アラブ語語源であった。

进

- 督者、キルデアの道路状況を褒められる」(After the Race. County Surveyor complimented on the State of Kildare Roads.' との見出しの記事をのせている。 は、「とうない、との見出しの記事をのせている。 は、「とうない、との見出しの記事をのは、いいない。例は、「とうての後で。例と
- ➡ History & Heritage: http://kildare.ie/Heritage/Gordon-Bennett-Race/June-1903.asp
- 'Past Imperfect': www.ireland.com/newspaper/motoring/2003/0115/
- ☼ Epifanio San Juan, Jr., James Joyce and the Craft of Fiction: An Interpretation of Dubliners. Associated University Presses, Inc., Cranbury, New Jersey, 1972. pp. 80-1.
- ↑ http://kildare.ie/local-history/naas A short History of Naas)
- ഗ Bersey cab and Charging

Station

http://www.vauxhallsociety.org.uk/Bersey%20&%20Chargin...

- Taxi History London Vintage Taxi .. http://www.lvta.co.uk/pictures/sgo916.jpg
- て この情報は、呉佩珍氏のご教授による。

図版

- 1-1 http://kildare.ie/heritage/gordon-bennett/images/map-r...
- 1-2 http://www.scienceandsociety.co.uk/Pix/TRN/29/10327529...
- 1-3 http://www.scienceandsociety.co.uk/Pix/NAT/38/10324738...
- 2-1 http://www.scienceandsociety.co.uk/Pix/NAT/38/10324738...

- 2-2, 3 http://www.mairie-acheres.fr/Mairie/images/jenatzy.jpg
- 2-4 http://evchallenge.murdoch.edu.au/images/jamaiscontent...
- 2-5 http://www.localhistory.scit.wlv.ac.uk/genealogy/Parke...
- 2-6 http://www.hbvl.be/dossiers/-e/eeuw/img/1900/FN1902.jpg
- 2-7 http://www.germancarfans.com/classics/5040528.001/5040...
- 2-9 http://www.ddavid.com/formula1/images/helck8.jpg
- 2-10 www.motoringpicturelibrary.com/ browse images....
- 2-11, 12, 13, 14 http://www.scienceandsociety.co.uk/Pix/NAT/38/10324738...
- 2-15,16,17http://kildare.ie/local-history/kildare/Gordon%20Benne...
- 2-18,19,20,21 ttp://www.motoringpicturelibrary.com/browse images.asp?lcID=23&newpage=10
- 3-1, 2,3,4,5, 6, http://www.scienceandsociety.co.uk/Pix/TRN/03/10318503...
- 3-7.8 http://www.motoringpicturelibrary.com/browse_images.asp?lcID=23&newpage=10
- 3-9 http://www.users.globalnet.co.uk/~adamw/1902_Napier__S...
- 4-1 http://rbmn02.waika9.com/Album_Course_12.jpg
- 4-2 http://www.mairie-acheres.fr/Mairie/images/pe_knyff_gd...
- 4-3 http://www.teamdan.com/people/rene%20de%20knyff.jpg
- 4-4 http://en.wikipedia.org/wiki/Henry_Farman
- 4-5 www.nationmaster.com/encyclopedia/Race-car
- 5-1http://rbmn02.waika9.com/Album_Course_12.jpg
- 5-2http://www.mairie-acheres.fr/Mairie/images/pe_knyff_gd...
- 5-3http://www.teamdan.com/people/rene%20de%20knyff.jpg
- 5-4 http://www.dadant.com/catalog/images/M008085l.jpg
- 5-5 http://www.countykildare.com/pics/kildare_map.gif
- 5-6 http://www.amradios.com/pictures/crosley_home_phonograph.htm
- 5-7 http://www.mainspringpress.com/Zono1900.GIF
- 5-8 http://www.agnard.com/collection2/brandenburg1.GIF
- 8-1 http://www.wisdomportal.com/Peace/AE(180x242).jpg
- 8-2 http://www.poetryconnection.net/images/George William ...
- 8-3 http://www.colin-smythe.com/images/conhom1.jpg
- 9-1http://images.barnesandnoble.com/images/550000/556272
- 9-2 http://www.printsoldandrare.com/ireland
- 9-3 http://www.askaboutireland.ie/image medium?asset id=697
- 9-4 http://www.printsoldandrare.com/ireland/015ire.jpg
- 9-5 http://www.timecamera.com/images/dublin2.jpg
- 9-6 http://www.askaboutireland.ie/image thumbnail?asset id...
- 9-7 http://www.teachnet.ie/dhorgan/1920-30.html
- 9-8 http://www.askaboutireland.ie/image_medium?asset_id=697
- 9-9 http://www.irelandposters.com/oldphotos/dublin 1930 co...
- 10-1 http://ierland.plein.nl/files/images/easterpo.jpg
- 10-2 http://www.teachnet.ie/dhorgan/2004/resources/before.j
- 10-3 http://www.irelandposters.com/dublin/images/oconnell_b...
- 10-4 http://i7.ebayimg.com/02/i/05/0f/b8/f7_1.JPG?set_id=7
- 10-5,6 http://www.askaboutireland.ie/image_medium?asset_id=697
- 11-1,2 London Taxi & Dictorian Horse Cabs http://taxi-world.home.att.net/shire horse.jpg
- 11-3 London Life Cabs of the 1890s
 - http://www.netxposure.net/DesktopModules/PortalStore/F...
- 11-4 http://www.mybrightonandhove.org.uk/images/ANIMAL51_t....
- 11-5, 6 Prototype Vauxhall Hansom Cab 1905 ...
 - http://www.vauxhallsociety.org.uk/Vauxhall%20Hansom%20...

```
11-7,8 http://gazoline.net/IMG/jpg/doc-720.jpg
11-9 http://audibert.lavirotte.free.fr/photodautos/a106med....
12-1.2.3 http://www.lvta.co.uk/pictures/unic.jpg
12-4 www.deautogids.nl
12-5
12-6
12-7,8 http://www.kidcyber.com.au/IMAGES/roaddaimler.jpg
12-1
13-1,2 http://www.victorianlondon.org/publications6/horse-9.g...
13-3 http://smartpei.typepad.com/robert_patersons_weblog/im...
13-4 http://cityofshadows.stegenga.net/hansomcab_small.JPG
13-5 www.vauxhallsocietv.org.uk/ Taxis.html
13-5 Prototype Vauxhall Hansom Cab 1905 ...
    http://www.vauxhallsociety.org.uk/Vauxhall%20Hansom%20...
13-6,7,8 Stanley-steam-car-1897-small.gif ...
    http://www.isc.meiji.ac.jp/~sano/htst/Theory-of-Techno...
14-1
        http://www.rainfall.com/posters/thumbs/landscape/09947...
14-2
14-3
14-4
        http://www.omeath.net/images/ajt/jauntingcar.JPG
15-1 http://www.chapters.eiretek.org/books/mcredy/graftonst...
15-2 http://www.chapters.eiretek.org/books/mcredy/graftonst...
15-3 http://www.chapters.eiretek.org/books/mcredy/graftonst...
16-1http://www.cdvec.ie/pmbrk_gifs/pmbrk_train2.gif
16-2 http://www.coffeedrome.com/images/jack9.jpg
16-3 http://www.anglesey.info/Kingstown%20Harbour%20Very%20...
16-4 http://www.chapters.eiretek.org/books/mcredy/kingstown...
16-5 http://www.ushistoricalarchive.com/photochroms/ppmsc/0...
16-6 http://www.askaboutireland.ie/image_thumbnail?asset_id...
16-7 http://www.ushistoricalarchive.com/photochroms/ppmsc/0...
16-8 http://www.molesworthgallery.com/Roche%2C%20April%202004.html
17-1 http://en.wikipedia.org/wiki/James Gordon Bennett%2C Jr.
17-2 http://www.ngb.army.mil/onguard/32/05/images/Aviation....
17-3 http://www.history.navy.mil/photos/images/h92000/h9210...
17-4 http://www.history.navy.mil/photos/images/h91000/h9134...
17-5 http://columbus.gl.iit.edu/dreamcity/4/00022092.JPG
17-6 http://www.oldprintshop.com/images/thumbnails/t29616.j...
17-7 http://www.ngb.army.mil/onguard/32/05/images/Aviation....
18-1, 2 http://memory.loc.gov/ammem/mussmhtml/mussmauthindex1.html
18-3 http://xroads.virginia.edu/~MA01/Davis/newport/photo%2...
18-4 http://xroads.virginia.edu/~MA01/Davis/newport/photo%2...
18-5 http://perso.wanadoo.fr/titanic/images/astor.jpg
18-6 http://www.cibernautica.com.ar/titanic/astor.jpg
18-7, 8,9,10 http://www.klaus-kramer.de/Schiff/yachtint/ya1870/SG00...
18-11 http://www.eastsidecatering.net/Venues/Newport/AstorsB...
18-12 http://www.thecityreview.com/fifbook3.gif
18-13 http://pictures.galenfrysinger.com/new_england/astor07...
18-14 http://www.drawrm.com/apc5.jpg
18-15 http://www.drawrm.com/apc39.jpg
```

18-16 http://www.pbs.org/wgbh/amex/carnegie/gallery/images/r... 19-1 http://www.jclass.com/images/cybelle.jpg 19-2 19-3 20-1 http://www.resnet.wm.edu/~lkbutt/newport.jpe 20-2 20-3 http://www.mariner.org/chesapeakebay/captions/col003-01.html 20-4,5,6 http://courses.lib.odu.edu/eci/kgillasp/eciss/messup/jamestownhistory.html 20-7 http://www.dailypress.com/extras/solutions/images/SOL0... 21-1 http://www.nndb.com/people/901/000092625/charles-stewa... 21-2 http://www.nndb.com/people/901/000092625/charles-stewa... 21-3 http://barrymasonphoto.com/images/heritage/kilmainham_... 21-4 http://www.rootsweb.com/~fianna/history/images/e9.jpg 21-5 http://www.realtraveladventures.com/July2005/1326dc400... 22-1 employees.oneonta.edu/.../ art_politics.html 22-2 http://www.schooloftheseasons.com/images/brigid.jpg 22-3 http://www.fiftythings.com/Images/brighid.jpg 22-4 http://www.brigidine.org.nz/Artwork/Brigid6.jpg 22-5 http://www.stgeorgesnews.org/2001/06f11.htm 22-6 http://www.allsaintsbrookline.org/celtic/celt_images/s... 22-7 http://www.nndb.com/people/083/000096792/st-david-1.jpg 22-8 http://www.lugodoc.demon.co.uk/Druids/druid%20Stukeley... 22-9http://www.lugodoc.demon.co.uk/Druids/druid%201815.jpg 22-10 http://freepages.books.rootsweb.com/~davidsbeach/druid... 22-11 http://db.museumsofmayo.com 22-12 http://www.comeandseeicons.com/cap11.jpg 22-13 http://www.tourclare.com/images/kildare.jpg 22-14 http://freepages.books.rootsweb.com/~davidsbeach/druid... 22-15 http://www.comeandseeicons.com/cap11.jpg 22-16 http://www.stayinireland.com/galleries/images/l_image0 22-17 http://www.jpmahoney.com/Pictures/Ireland2001/104-0455... 22-18 http://www.paulturner.ca/Phillips/Roberts/Pictures/St-... 22-19 http://www.jpmahoney.com/Pictures/Ireland2001/104-0455... 22-20 http://www.jpmahoney.com/Pictures/Ireland2001/104-0455... 22-21 http://www.jpmahoney.com/Pictures/Ireland2001/104-0455... 23-1 www.oppisworld.de/philo/vespucci.html 23-2 www.pd.astro.it/laluna/luna/luna12.htm 23-3 portrait.kaar.at/ Naturgeschichte/image18.html 23-4 http://www.garwood-voigt.com/catalogues/H18663AmerigoV...

23-5 http://www.cybercruises.com/images/amerigovespucci.jpg

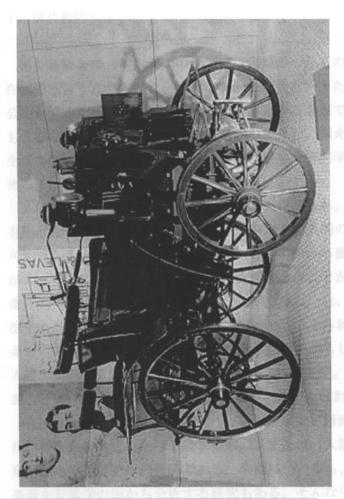
23-10 www.nmm.ac.uk/searchbin/ searchs.pl?exhibit=it...

23-11 employees.oneonta.edu/.../ art_politics.html

23-7 earlyamerica.com/.../ bookmarks/americas_name/ 23-8 academic.reed.edu/.../ spanish_353/16s.html 23-9 http://pl.wikipedia.org/wiki/Amerigo_Vespucci

23-6 www.palinsesto.it/bandini/lista1.html

を設立した。からであった。ちなみに、ロールズは、一九〇六年、フレデリック・ヘンリー・ロイス卿と「ロールズ=ロイス社」った。それは、ノッティンガムシア州ウェルベックのポートランド公の敷地で開催された予選会で二位におわった一九一〇)が編集した写真集に収められたもの。ロールズは、第四回ゴードン・ベネット杯レースに参加できなかジェナツィ。この写真は、イギリスの自動車製造者で飛行家のチャールズ・ステュアート・ロールズ(一八七七)



Panhard & Damp; Levassor 1895

http://automotor.xl.pt/galeria/inovadores/imagem/panha...

1. はじめに

時や場所を問わず、人間の生活には音楽がつきものだ。芸術や産業の専門/職業的な存在価値は言うまでもなく、娯楽、遊興、慰安といった日常の断片から、祭祀や儀式などの公的な催事に至るまで、音楽は生活のあらゆる場面で相応の役割を果たす。各分野の研究も多様な方向から音楽の在り方を考察してきた。例えば、民俗学のフィールド・ワークは生活の現場に音楽の意味を探り、ハイブラウな音楽学はクラシック音楽の響きに意味を求める。

人間が音楽を作り出す際に楽器は不可欠に見える。だが実際には、楽器という道具の力を借りなくとも、肉声、手拍子、足踏みなど、人間の身体だけでも音楽を作り出すことは可能である。楽器に依存するよりも、生身の体から直接作り出される音楽の方が訴える力が大きい場合もあるだろう。本来は人間の身体こそが音楽を作る主要素で、楽器は人間の身体能力を補完する副次的な道具なのか。あるいは、楽器を介して独特の音や律動を作り出すのが音楽の基本で、その一つの様式として身体器官が楽器を代行する場合があると考えるのか。この問題には然るべき答えがあるのかもしれない。しかし本論では、こうした人間と楽器(道具)の二分法をあえて棚上げしたい。むしろ、「楽器を演奏する人間身体」あるいは「人間が楽器を演奏するという行為」を検討の対象とすることになる。

今日まで無数の音楽論が語られている。楽曲を譜面上の理論で分析したもの、記録された曲や特定の演奏の成否を論じたもの、または、人類学の文脈で音楽の文化的な意味を考察したものなどがその代表である。楽器についても、各楽器を系譜学的に捉えたものや、楽器を音響学の面から分析する研究もある。そんな中で、楽器を演奏するという「行為」や楽器を演奏する「身体」を主たる対象とするものは意外と少ないようだ。楽器は単に音を作り出す道具にすぎないのか。楽器を演奏するという行為遂行性に何らかの意味を読みとることはできないのか。

2. 楽器の身体化

楽器それ自体はただの物体にすぎない。人間が何らかの動力を加える――叩く、弾く、吹く、擦る――ことで、その物体は音を発する。一方、人間も演奏することで楽器へと変容することがある。例えば管楽器の場合、演奏者は自分の横隔膜の動きで空気を送り込むが、これはアコーディオンやバンドネオンの蛇腹の働きにあたる。金管楽器となると、音の震動源が演奏者の唇であり、人間の身体が物理的にも楽器の一部となっている。肺から

押し出された空気は口唇を振動させる。その振動と空気はマウスピースを経て管に伝達し、 加工された音となって外に発せられる。人間の体内から金属管に至る一連の行程が、一つ の楽器として機能していることを表す構図である。

以上は目に見える形で文字どおり人間が楽器の構成要素になっている例だが、人間が自己の身体認識において楽器と一体化するという考え方もある。M. メルロー=ポンティは『知覚の現象学』の中で、道具使用の習慣化と人間身体の存在様態について、自動車の運転や盲人の杖による歩行など、いくつかの例をあげながら議論を展開させる。特に、タイピストとキーボード、オルガン奏者と鍵盤の関係についての論考は、楽器演奏の身体行為を考える上で示唆するところが大きい。道具は当初の段階では人間にとって異物であり他者である。道具を使い始めるとき、それが自己の身体の部位であるかのように意のままに操ることは難しい。思うようにならない苛立ちは道具との間の疎外感をかき立てるだろう。ところが日々の使用を通して道具との距離は徐々に縮小し、それが習慣となったとき、人間は道具との間に新しい関係を築くことになる。

習慣化によって道具をその目的に応じて機能させているとき、もはや人間と道具の境目は消失し、両者は一体化した別次元の存在に変容する。自動車の運転中、人間はそれ自体として存在することはなく、あくまでも車と運転者が一つになった存在として路上に在る。盲人が杖を使用して歩行するとき、その当人の身体の境界は、自身の指先ではなく、杖の先端部に違いない。「習慣とは、あたらしい道具を自分に附加することによってわれわれの世界内存在を膨張させること、ないしは実存の在り方を変えることの能力の表現」(メルロー=ポンティ『知覚の現象学1』、二四一)なのである。

楽器の演奏にもまさにこうした「われわれの世界内存在を膨張させ」「実存の在り方を変える」要素がある。人間は楽器の習熟によってその楽器と一体化する。それぞれが個として存在している限りでは、それらは「ヒト」と「モノ」でしかない。ところが、楽器を身体に習慣化させると、演奏中の人間は楽器を介してしか存在することはない。それはまた次のようにも説明される。

一台のピアノが私の目の前にある。ピアノをほとんど弾けない私にはピアノは部屋の一角を占拠している家具の一つであり、せいぜい誰かが弾くものでしかない。しかし私がピアノをよく弾けるとすれば、私の前のピアノは私の指や手を切迫的に指示し、親しみ深いものであり、さらに既に弾き始めるや否やピアノの親しみ深さは更らに増し、私の指や手と一体となった如くに変化する。(中略)身体が目標を達成して自由によく動き、馴染み深さを充分に獲得するとき指示性は消える。こうして演奏中、熟練したピアニストの指や手とピアノの鍵盤は互に指示し合うことはなく、彼は演奏という行為そのものや、聴衆や、会場のことを志向する。(湯浅慎一、一〇五一〇六)

彼[オルガン奏者]は、(中略)楽器を自分の身体に合うようにし、楽器の方位や大きさ

を自分の身体に合体させ、あたかも家のなかに収まるように楽器のなかに収まる。(中略) 演奏中でも反復練習中でも、音管やペダルや鍵盤は、彼にとってはそれぞれの情動的または音楽的な価値の諸力としてのみあたえられ、またそれらのものの位置も、その価値が世界内にあらわれて来る場所としてのみあたえられる。楽譜面で指示されているような楽曲の本質と、実際にオルガンのまわりで鳴りわたる音楽のあいだには、きわめて直接的な関係が確立されていて、その結果、オルガン奏者の身体と楽器とは、もはやこの関係の通過点でしかなくなっている。そうなるともう、音楽はそれ自体で存在し、音楽によってこそその他の一切のものも存在する、ということになる。(中略) 本当は、反復練習中の彼の所作は聖別の所作なのであって、つまり、それらの所作は感情的なヴェクトルを張りわたし、情動的な源泉をあらわにし、(中略) 一つの表出空間を創造するのである。(『知覚の現象学1』、二四四)

人間と楽器(道具)は、はじめは互いに他者として向かい合う関係だった。だが触れ合うことが習慣となって楽器が馴染み深いものとなると、両者は一つになって独自の世界を生成させる。その際、一体化した存在は楽譜と音楽を結ぶ一つの「通過点」でしかなくなり、一つの存在として当然になった以上は、その意識も、内なる相互の在り方を志向(模索)することはなく、「演奏という行為そのものや、聴衆や、会場のことを志向する」ようになるのである。

道具を操ることや楽器に習熟することは、もう一つの世界を生成させることである。新たに道具や楽器を身体に習慣化させること――新たな道具や楽器で身体を再構造化すること――は、別の身体へと生まれ変わるエロスを導き出すことにちがいない。

3. 音楽という言語

道具を扱うことや楽器を演奏することは、別の存在に生まれ変わることだ。だがこと楽器演奏においては、単純に別の存在に変わるというだけでは終わらない。というのは、一般に流通する大半の楽器は伝統的な西洋音楽の音階を基準に成立しており、楽器を演奏することは、オクターヴを構成する一二の音の枠組みに絡め取られることになるからだ。西洋の音楽理論は「楽器」と「演奏」のメタ言語となっており、楽器を演奏する身体は特定の言語世界に支配される。

音楽が音楽として認識されるためには、送信者と受信者の間に共通のメタ言語が必要である。共通のメタ言語が不在の場合、与えられた音楽メッセージは解釈されず、そこにはノイズの残響があるだけだ。現実には、西洋音楽が世界に広く根付いていることは疑いなく、それは啓蒙や教養の名で、帝国主義的に各地域文化を塗り替えてきたと言えるだろう。現に日本の音楽教育でも、雅楽や邦楽の世界に触れる機会はきわめて希少であるのに対し

て、五線譜とドレミファソラシドは無条件に意識と身体に刷り込まれる。この状況で完全に自由な音楽的発想はあり得るだろうか。あるいは、完全にオリジナルな音楽は存在するだろうか。ここにも確かにある種の間テクスト性が見られ、どんな音楽も他の音楽体験との関係性の中にあるように思われる。そしてその関係性を成立させる母体となっているのが、メタ言語としてのドレミの世界だと言えるだろう。ドレミを奏でる楽器や五線譜とともに音楽が発想されるとき、それは既に特定の音楽言語の枠組みの中にいることになる。

シニフィアンとしての譜面上の記号はシニフィエとしての音と結びついている。本来は 恣意的なものでしかない紙の上の点と線が、ある特定の高さと長さの音を指示するという 決まりごとがある。だがここで指示されるのはそれだけではない。演奏家は、同時に、その恣意的な記号の結びつきを、弦を弾く、鍵盤を叩く、ピストンを押さえて息を吹き込む といった身体の運動とも連結させている。譜面を見て、その記号を頭で解釈して、手、足、口の動きに変えるのではない。熟練した演奏家においては、譜面上の視覚情報がそのまま 身体の動きとつながる。意識を五線譜上の記号言語で構造化させつつ、身体にも五線譜記号に基づいて楽器を習慣化させる。譜面上の記号というシニフィアンは、音だけでなく身体の運動も指示する意味作用をもっている。

これら一連の行為は、楽器演奏を介して西洋音楽理論の象徴秩序とともに自己を生成するということだ。演奏する身体は、楽器と一体化する際に、メタ言語である西洋音楽理論の言語で構造化される。楽器を身体に習慣化させることは、特定の音楽言語の象徴秩序を構成し、自らその中に入ることである。人間の精神、(無) 意識が言語で構造化されるとするならば、楽器との間で新たな存在を生成する際の、西洋音楽言語による身体の構造化の様相は、人間の精神構造を視覚的に相対化させた疑似モデルに見える。

西洋音楽を一つの言語体系と見ると、五線譜はまさに書き言葉(エクリチュール)であり、意味としての音を、高/低、長/短の基準で書き記したものである。どんな書き言葉もそうであるように、楽譜も完全に意味を伝達できるメディアではない。むしろ、楽譜で正確に伝えられるものはごくわずかだと言って良い。理論上、客観的に規定できるのは、おそらく音の高低だけであろう。五線譜に記載される各音は一応は周波数が決まっており、譜面上の位置で、音の高さはとりあえず客観的に判断できる。だがそれ以外については実に曖昧な世界である。フォルテやピアノの「強く」「弱く」に始まり、長さや強さの指示はほとんど絶対的な基準を持たず、その判断は読み手の主観性に任されるしかない。まして抑揚や音色などは記譜のしようがない。たしかに一分間の音符数で速度を表示するのは通例で、メトロノームを使えば正確にそのテンポで演奏できるだろう。しかし、実際の演奏会でのメトロノームに拘束されての演奏は、まず見られるものではなく、見たくもないものだろう。譜面は不完全であり、楽譜で音というメッセージを正確に伝えることは不可能だ。

このように考えると、音楽言語の世界では二つの次元で「語られないもの」が生じるように思われる。まずは五線譜で「語られないもの」がある。これは、音に関する客観的規

定の不在と、エクリチュールとしての楽譜の限界/不完全性によるものだ。ある音についての各人の概念はけっして他者にそのまま了解されることはない。ある主観に生じた音(の連なり)を客観的に確定するコードはなく、その音の流れを正確に記録(記譜)することはできない。もちろん、別の人間(主観)が、譜面に記載された情報から、譜面を生じさせた「先行する主観」に浮かんだ音を正確に再現することもできない。楽譜を介しての音の意思伝達に絶対性はなく、間主観的な了解や妥当性で特定の音を成立させている。

だが楽譜での「語られないもの」は、単に、明確に規定/表記するコードの不在で記されないだけであり、それは確実に西洋音楽言語の枠組みの中にある。卓越した演奏家が音符どおりの単純な演奏以上を求められるとするならば――そもそも「音符どおりの演奏」というものがあり得ないが――、そこで求められる明文化されない特質もここでの「語られないもの」に当たるだろう。したがってこの「語られないもの」はけっして否定的な類ではなく、むしろ積極的な創造性に向かうものであり、ある演奏家を他の演奏家から差異化させる決定的な要因となる。楽譜はシェイクスピアの戯曲さながら、作品を成立させる必要最少の情報しか記載しない。書かれている台詞/音符以外の「語られない」構成要素は、作品を現前させるときに舞台上で創造的に提示される。その解釈と創造の作業を代表して担うのが、演劇では演出家であり、楽団では指揮者ということになるだろう。「語られないもの」があるからこそ、シェイクスピアの作品は演出の無限の創造性を喚起するのであり、それは一つの楽曲が無数の演奏のヴァリエーションを生み出すことと同じである。

4.「外国音楽」のアメリカ

楽譜上で「語られないもの」よりも問題であり、また興味深いのは、ある音楽言語の世界そのものからこぼれ落ちた「語られないもの」である。本稿の文脈で言えば、これは支配的な西洋音楽の外側に排除された要素ということになる。

理論的に正しいと規定された音階やリズムは絶対ではなく、たまたま西洋伝統の音楽文化の枠組みの中で正当とされているにすぎない。だが、それは確実に世界の「公用語」としての支配力を発揮し、世界の広範囲にわたって、音楽教育を通して人間の精神を編み上げてきた。こうなると逆に、主流の西洋クラシック音楽に対抗する、多様な民衆音楽の意義もあらためて確認できる。各種の民衆音楽の特性は、必ずしも五線譜の枠組みでとらえることはできず、西洋中心主義の音楽言語の象徴界からこぼれ落ちてしまう部分も多いはずだ。それらの「語られないもの」は、既存の構造の隙間をついて――既存の構造に外側から亀裂を入れて――(無)意識に訴えかける。現実界から不気味に侵入して音楽の象徴秩序を攪乱するのである。いかに「正当な」支配文化の音楽で身体/精神が言語化されていようとも、オルタナティヴな音楽はどこからか入り込んで秩序を揺るがす。ニーチェは言語的なものに対する根元的な音楽の力を「デュオニュソス的なもの」と呼んだが、もし

民族音楽に本質主義の要素を見るとするならば、ここでは西洋音楽「言語」に対する民族 の本質主義的な音が「デュオニュソス的な」力を持つのかもしれない。

社会の価値観が一元的な西洋中心主義から多文化主義へと移るとき、民衆音楽や「ワールド・ミュージック」が浮上するのは必然だろう。民衆音楽、民族音楽の旋律や和音は五線譜にとりあえず収まるかもしれない。しかし独特のリズムや節回し、即興演奏などはクラシックの言語で絡め取ることができるものではない。日本古来の邦楽やアフリカの打楽器の音楽が五線譜に代表される枠にどう収められようか。

実際のところは、多文化主義が語られるのに先行して、音楽の世界ではクラシック以外の「別の音楽」が既に言語圏を拡大化させていたことはまちがいない。この点で多民族からなるアメリカは類まれな民族音楽の百貨店である。ただし陳列されるサンプルはそれぞれ仕切られた棚に別個に並んでいるのではなく、互いに干渉し衝突しながら化学変化をおこし、弁証法的に進化して「アメリカ音楽」を作る。特にアフリカ系移民から発生した音楽は、ヨーロッパの音楽と融合して「アメリカ音楽」の新たな主流となり、今や、学校教育とは別の場で、もう一つの支配的音楽言語となっている。演奏者は、クラシック音楽に登場しない楽器や教室で教わらない不規則なリズムや和音を身体に習慣化させ、音楽の「外国語」で自己を構造化する。すべての主流文化に見られるように、当初は対抗分子としての存在だったものも、社会に認知されて受け入れられた段階で、新たにもう一つの主流となっていく。黒人音楽もその例外ではない。だが主流となることで様態が確定するわけではない。音楽も演奏者も絶えず新しい要素との融合反発によって自己を再生成させる。

これ以外にも、アメリカ大衆音楽は、西洋主流文化の象徴界からこぼれ落ちた音楽と楽器で溢れている。アメリカの民族音楽や地方音楽を象徴する楽器――鉄弦ギター、バンジョー、スライドギター、アコーディオンなど――は、クラシック音楽では用いられないものばかりだ。

楽器はメディアなのであり、音楽家にとっても自らの内面世界と外の環境を結ぶ媒体となる。作曲家は決して純粋に内面的に作曲行為を行うわけではないのであり、常に楽器という自らの外にある対象の限界に制約されつつ、他方でその制約を逆手にとって、それを利用しながら新しい表現世界を切り開いてゆくのである。(渡辺裕『音楽機械劇場』、二〇)

音楽は内なる創造力のみで生まれるものではなく、楽器というメディアとの関係で現れる。 楽器と一体化した身体が音楽を生み出す以上、それぞれの音楽と楽器は切り離して考えられるものではない。アパラチア音楽とマウンテン・ダルシマー、ブルーグラス音楽のバンジョーやフラット・マンドリン、ルイジアナのフランス語文化圏の音楽(ケイジャン/ザディコ)とダイアトニック・アコーディオン、やはりアコーディオンを中心にしたテキサスのスペイン語音楽テックス・メックスなど、アメリカの地方音楽は今もなお独自の「言 語世界」を維持しており、その世界を作っているのが、まさにその(音楽)言語特有の楽器ということになる。世界の民族音楽で使用頻度が特に高い楽器の一つがフィドルであることは、おそらくまちがいないだろう。先にあげたアメリカ地方民衆音楽の多くでも、やはり先にあげた楽器たちと並んで――実際には、それらの楽器を脇に従える形で――中心的な役割を果たすのがフィドルである。これは楽器そのものとしてはいわゆるヴァイオリンと変わらないが、「ヴァイオリン」という呼称でクラシック音楽に登場するときと、「フィドル」と名乗ってオルタナティヴ音楽に現れるときでは、演奏法から扱い方まで大きな違いがあり、何よりもその存在感がまったく異質であるのは周知のとおりである。

これらの地方音楽は必ずしも純粋培養されているものではない。たとえそれぞれの言語文化圏内で温存されていても、当然のことながら、絶えず――市場価値が作用するときは特に――オリエンタリズムさながらの異文化趣味の搾取の対象とならざるを得ない。その一方では、こうしたエスニック音楽の方も「純粋性」を看板に掲げて、体制側の異文化趣味幻想に合わせた自己演出をすることもある。だからといって、アメリカの民衆音楽の、西洋クラシック(主流)に対するオルタナティヴとしての地位/意味は変わらないだろう。これほどまでのオプションが用意されている中で、「アメリカ音楽」を受け入れ、楽器を通してそれに馴染むことは、その度に新しい存在へと再生、変容することであり、常に音楽言語の象徴秩序を再構造化する運動の中に身を置くことだ。

5.「鐘楼の悪魔」

エドガー・アラン・ポーの短編小説に「鐘楼の悪魔」("The Devil in the Belfry")という作品がある。この物語の舞台である"Vondervotteimittiss"("wonder what time it is"のもじり)と呼ばれる小さな集落は、丘に包囲された円形の土地で、外周に沿って六〇の家が等間隔で並んでいる。町の中心に位置する議事堂の塔には鐘楼があり、そこにはこの土地のシンボルである大時計が君臨している。鳥瞰するとこの集落は議事堂の塔を中心とする大きな時計の文字盤のようだ。それが示すとおり、町に存在する人間、動物、建物に至るすべてがそれぞれの時計を持ち、さらにそれらすべてが町の中心の大時計に従っている。町(の大時計)は一分一秒の狂いも生じさせず、また周囲の丘の向こう側(時計の町の外側)には何の存在も認めない。町は、はるか太古の誕生の時から何一つ変化することなく、時計に忠誠を尽してきたらしい。

ところが"Vondervotteimittiss"の「時計の世界」の絶対秩序は、突然の闖入者により攪乱されることになる。ある日の正午直前、正体不明の黒装束の小男が丘の上に姿を見せ、あれよという間に「時計の町」に入り込む。賊はそのまま鐘楼に舞い上がると、鐘楼守りを軽くあしらい、大時計が「一二」の鐘でちょうど正午を告げたのに続いて、そのまま「一三」の時刻をうち鳴らしてしまう。住民たちは大時計の突如の乱れに対応できずに大騒ぎ

となり、町は大混乱に陥る。

「時計が刻む時間」は人為的かつ恣意的な時間の尺度にすぎない。世界創世の瞬間から、人間の営みを超越して、自然に流れているはずの「時間」がある。それに対して人間は、六〇秒、六〇分、二四時間という枠組みを勝手にはめ込み、時計を単位に「時間世界」を分節化した。それは既に絶対化され、はじめから「時計の時間」があったかのように信じられている。本来は便宜的に後から設定されたはずの「時計の時間」が、いつの間にか絶対的権威となり、天の摂理であるかのように信じ込まれている。今や人間は時計の枠組みで心身を構造化され、時計の概念が存在しない状況を想像することさえもない。"Vondervotteimittiss"はこのような「時計の象徴秩序」の寓話的イメージである。その秩序に一瞬にして大きな裂け目を入れる「一三時」の時報は、時計に振り回される人間たちへの、警鐘とは言わないまでも、冷笑になっている。

問題のエイリアンは、黒の燕尾服、黒のストッキング、黒のずんぐりした舞踏靴といった、いかにもトリックスターを連想させるお決まりの装いである。そんな彼の特異性は、 見た目や服装もさることながら、何よりも楽器とダンスで説明される。

片方の腕の下に巨大な三角帽をはさみ、もう一方の腕の下には、自身の体の五倍もあろうかというフィドルを抱えている。(中略) ありとあらゆる奇妙なステップで、丘の斜面をはね回りながらかけ下りてくる(一三四)

他の何にもまして当然なる憤怒を招いたのは、この悪党まがいの洒落者が、こちらではファンダンゴ ("fandango") のステップを刻み、あちらではくるくると旋回運動 ("whirligig")をしているのだが、そのステップには正確に拍子(テンポ)を守る("keeping time") という概念がほんの少しも含まれていないように見えたことだった。(一三四)

彼の膝の上には、かの巨大なフィドルがのっており、拍子も節回しもすっかり外したまま、そいつを両手でかき鳴らし、ここぞとばかりに(中略)「お調子女のオフラナガン」と「アイルランドのオラファティ」の大演奏会だ。(一三八)

その男は不規則なリズムで多彩な民族ダンスを踊る。フィドルの大きさや演奏法に至っては常識外れもはなはだしい。規則正しいリズムに慣れ親しんだ身体には到底受け入れられない、複雑で奇想天外なステップ。オフビートやシンコペーションで独特の抑揚を生み出す、ケイクウォークやラグタイムのダンスが想起され、明らかに「黒」のイメージを感知することができる。闖入者は「大きなフィドルを掲げると、鐘楼守りをあまりにも長いことしたたかに叩きつけたので、」(一三五)その結果、「塔の鐘楼の中で、コントラバス弾き("double-bass drummers")の一連隊が一同に指太鼓をドンドンと打っている」(一三五)ような大騒ぎになる。本来は弓を用いてメロディを奏でるはずが、ここではフィドルがあ

たかもパーカッションのリズム楽器のごとく用いられ、ジャズやロカビリーのウッドベースも顔負けの前衛的な演奏行為が展開されている。共訳不可能なまったく異質の音楽言語の世界があるとしか言いようがない。

「存在するはずのない地平」から「語られないもの」が現れて「存在するはずのない時間」が告げられた。町を構造化するシニフィアンとしての時計はけっして絶対ではない。 "Vondervotteimittiss"という一つの身体はもはや今までのままではいられない。このカオスの中で生命維持を図るのか(それはそれで見てみたい気もするが)、あるいは、「語られない」時間/音楽/楽器/ダンス/リズムを取り入れて、未知の言語とともに自己を再生成するのか。

音楽用語としてのシンコペーションは、強弱を転換させるリズム上の技巧であるが、それは次のような実践のすぐれた喩えとなりえないだろうか。単線的で進歩主義的な時間の流れの中に、過去の暴虐や未来のユートピアへと、あるいは語りきれないような異質なものへと通じていく裂け目を、ところどころに、不意に開けていくこと。もちろんここには、音楽を演奏することや聴くことがまさにそのような実践のひとつである/になりうる、という含みがある。(杉浦勉、他、六一七)

身体、音楽(楽器)、言語による身体の再生成、再構造のモデルケースとして考えてみると、この町のカオスも自己変容の愉悦と考えられなくもない。未知の存在体系と出会うことは固定化した身体を思わぬ混沌へと誘う。新しいモノを身体図式に組み込んでもう一つの存在のオプションを手にすること。未知の楽器やダンスとともに、自分を生成する音楽的言語構造を書き換えること。

"Vondervotteimittiss"の混乱は、変容する動態の活力を視覚的にデフォルメして提示する。 前代未聞のドタバタ騒ぎに陥った住民たちは、語り手がどれほど悲惨な状況であることを 訴えようと、この音とリズムとダンスのカーニヴァルの中で、妙に生気に溢れているでは ないか。

引用・参考文献

Baines, Anthony. The Oxford Companion to Musical Instruments. New York: Oxford UP, 1992.

Crawford, Richard. America's Musical Life: A History. New York: W.W.Norton, 2001.

Felman, Shoshana. Jacques Lacan and the Adventure of Insight: Psychoanalysis in Contemporary Culture. Cambridge: Harvard UP, 1987.

Levenson, Thomas. Measure for Measure: A Musical History of Science. New York: Simon & Schuster, 1994.

Melnick, Jeffrey. A Right to Sing the Blues: African Americans, Jews, and American Popular Song. Cambridge: Harvard UP, 1999.

Poe, Edgar Allan. "The Devil in the Belfry" in *Edgar Allan Poe: Extravaganza and Caprice*. Vol. IV. Edmund Clarence Stedman and George Edward Woodberry ed. New York: Charles Scribner's Sons, 1914.

岡田暁生他『ピアノを弾く身体』東京、春秋社、二〇〇三年。

奥田恵二『「アメリカ音楽」の誕生――社会・文化の変容の中で』東京、河出書房新社、二〇〇五年。

クリステヴァ、ジュリア『外国人――我らの内なるもの』池田和子訳、東京、法政大学出版局、一九九〇年。

杉浦勉、鈴木慎一郎、東琢磨編著『シンコペーション――ラティーノ/カリビアンの文化 実践』東京、新宿書房、二〇〇三年。

杉本秀太郎編『音楽と生活――兼常清佐随筆集』東京、岩波書店、一九九二年。

ナティエ、ジャン=ジャック『音楽記号学』足立美比古訳、東京、春秋社、一九九六年。

ニーチェ、フリードリッヒ『悲劇の誕生』塩屋竹男訳、東京、筑摩書房、一九九三年。

前川陽郁『音楽と美的体験』東京、勁草書房、一九九五年。

メルロー=ポンティ、モーリス『知覚の現象学1』竹内芳郎・小木貞孝訳、東京、みすず 書房、一九六七年。

メルロー=ポンティ、モーリス『知覚の現象学2』竹内芳郎・木田元、宮本忠雄訳、東京、 みすず書房、一九七四年。

湯浅慎一『身体の現象学』東京、世界書院、一九八六年。

渡辺裕『音楽機械劇場』東京、新書館、一九九七年。

渡辺裕『聴衆の誕生――ポスト・モダン時代の音楽文化』東京、春秋社、一九八九年。

Epistemology and Poetry: The Changing Face(s) of David Mura

By Elizabeth Brownell Balestrieri

"To be fond of learning is to be near knowledge. To practice with vigor is to be near to magnanimity. To possess the feeling of shame is to be near to courage." Confucius

Epistemology is the study of knowledge, or how we come to know what we know. How then is epistemology related to poetry? Does poetry operate as a form of thought and, therefore, of knowledge for the poet and for readers of poems? And what kinds of knowledge do poems reveal? Plato's objection to the poetry of Homer suggests that Plato rejected the didactic or instructive intent of Homer's works, but another interpretation is that he objected to poetry on the grounds of its non-cognitive contents or the poet's reliance on sense impressions, both authocentric and allocentric ones, that could not be verified as Truth. In The Republic, Plato links poetry with false prophecies, licentiousness, lawlessness, and corruption of beauty (Book II, 383c; Book III, 404e; Book IV, 424c, Book VI, 493 d). One of the earliest definitions of knowledge was given by Plato in his work, The Theatetus, in which he defined knowledge as equivalent to "true belief with an account." The epistemological problem is the question of the validity of a belief. Can we, reflecting on the data of sense perception, have reasoned or philosophical certitude for the judgments and beliefs that these data reveal? According to Aristotle's definition, poetry (poesis) is a thing made of speech and rhythm (16), thus he restored the aesthetic importance of poems, as well as identifying poems with "structures of feeling." It appears that Aristotle was not as troubled as Plato was with truth and validity factors in poems.

In my view, Giambattista Vico's major treatise, <u>The New Science</u>, proffers the best way to link poetry and epistemology, especially when he says,

poetry is the result of an originary anxiety about the absence of form. It could be said, then, that poets desire to bring formlessness into form, the unknown into knowledge. (75-76)

Vico calls this act of bringing formlessness into form, "corporeal imagination," which I designate as an "epistemology of the body," because the senses are the primary means for the acquisition of knowledge, regarding the construction of poems. Poet and literary critic Susan Stewart elaborates Vico's theory this way:

Poetry expresses the passage from not-knowing to knowing through which we represent the world, including the perspectives of others, to ourselves and those around us. (Poetry 14)

Stewart continues to explain that through our senses "we engage in an epistemology of process that is specific to parts of the body and yet evidently endlessly synesthetic and generalizable, leading to knowledge of exterior forms" (Poetry 18). In other words, we can differentiate knowledge acquisition by means of internal-sense propositions—assertions made from our own inner experiences, thoughts, and beliefs—or we can make external sense propositions—empirical propositions—about external reality. In the case of David Mura, he engages the world through his sensual life and transmutes the experiential and reflective knowledge gained from the encounter of self and world into his poetical works. Conjoining Aristotle's theory of poetry with Mura's way of building a poem we can find some resemblance, as Mura tells us:

... I think when I'm writing what's cueing me is intuition, and the intuition is mainly guided by my sense of rhythm and sound. My

word choices are oftentimes started as much by a sense of rhythm and sound association and repetition as they are by a conscious thought process or, god forbid, logic. . . you don't have to be logical or univocal; you get to entertain many different levels of emotion and meaning. (Song for Uncle Tom 134-35)

A theory of an epistemology of the body also coheres with the "destructive poetics" theory of Paul Bové, who following Nietzsche, Husserl, Gadamer, Derrida and De Man, but most particularly Heidegger, insists that unexamined language is in need of destruction and the person most qualified to do this is the poet who draws upon the accumulated past which is constantly present. Bove theorizes, "...the Heideggerean metaphor for truth as aletheia provides a temporal poetics and historical sense of tradition" and "allows for an 'optimistic' conception of history free of the defensive anxiety against impending death." (29-30). Two facts are to be draw from Bove's interpretation of Heidegger, that support my epistemological understanding of Mura: "first, that all authentic uses of language are interpretations, specifically destructions; second, that interpretation as the completion of the moment of understanding (Verständnis) which discloses and un-covers (aletheia) is a process which leads necessarily to a more vital, and temporal, sense of literary history. . ." (Bove 54). Heidegger's concept of "uncoveredness," destroys truth theories such as correspondence, judgment, and assertion, should be understood as Being-uncovering (Being and Time 257, 261). Destructive poetics is precisely what Mura practices, as I will show in this chapter.

More recently, Antonio R. Damasio's study insists that the construction of knowledge involves two entities, that is, the organism and the object and each affect

the other (133). He describes "core consciousness" as that which relies on sense formations and "knowledge consciousness" as that which one knows that one has constructed sense images. The higher form of the latter is "autobiographical consciousness" because of the storage and recall aspects of memory (134; cited in Stewart, Poetry 20). The autobiographical impulse in any one particular poet tends to produce either narrative or lyric poetry or a combination of the two genres, weighted, however, toward the lyric side. And this is the poetic form that David Mura excels in, a form dependent on an epistemology of the body or a corporeal imagination, as Susan Stewart brilliantly explains:

Lyric poetry in particular as the expression and record of the image of the first-person speaker across and through historical and cultural contexts provides us with a form on the boundary among sense impressions, somatic memory, individuation of agency, and social context. . . . it is also possible to argue the case for a transcultural study of lyric and for lyric to be considered specifically as a genre of cultural transformation. (Stewart, Poetry 41)

Adding Michael Serres' theory to those expressed above, we can say that epistemology is not only limited to cognition but also includes structures of feeling, as Aristotle had articulated, felt by the sentient body or embodied consciousness:

Prepositions, literally, prepose the body. They position it before, both temporally and spatially. They implicate the body in ways of knowing the world that are more complicated, more nuanced, than the subject —object binary implicit in nouns, in the act of naming. (Angels 195; Troubadour 143-44; cited in Smith 11)

- -

Serres privileges the body as a multifaceted receptor and producer of knowledge, taking a postmodern or poststructural stance against binary constructions.

According to philosopher Sandra Harding, the position postmodernist philosophers such as Richard Rorty, Jean-Francois Lyotard, Michel Foucault, and others take is ""that epistemology invariably legitimates exploitative and ignorance-producing links between knowledge and power," yet from "sociological and historical perspectives epistemologies are justificatory strategies" (87). It is in the second sense of a "justificatory strategy" that I want to locate Mura's modus operandi—as a dialectical encounter between imagination and memory on the one side and real existence on the other, as well as a discursive argument between the multi-selves (faces) of David Mura and between the poet and the world. As he says, "Poetry is also giving voice to all different sides of an issue. For me, political poetry is no so much about espousing a viewpoint. It's really about trying to write about the human experience of going through a political/social event, which is a different phenomena than proclaiming an opinion" (Kane, "Poets Chat" n. p.)

David Allan Mura, on whom this chapter focuses, is a poet, essayist, playwright, fiction writer, performance artist, and literary critic. Thus, he has many "literary" faces. He is also a Japanese American, who in the past did not acknowledge his "Asianness" nor his "Japaneseness," and stressed the importance of individual identity over group affiliation, a standpoint to which I partially attribute my theory of his "changing faces"—a theoretical positioning to be understood to mean that for the artist it is a plus factor, an enabling act of destabilization inherent in the creative process itself. While growing up Mura claims he did not want to be thought

of as "perpetual foreigner" and he apparently made a conscious decision "to push of as "perpetual foreigner" and he apparently made a conscious decision "to push everything Asian away," in Kant's terminology for "moral-practical" purposes or "the unconditional use of the will." He further says:

So I assumed the other identity offered to Asian Americans, which is as an honorary white person, sort of assimilated, but it was assimilation into a culture where I was not included and where I knew I was not included. (Song for Uncle Tom 129)

The above refers to his growing up in a predominately white Jewish suburb of Chicago and to his parents' suppression of their own "Japaneseness," a not-atypical action for Nisei (second generation Japanese Americans) who had experienced the indignity and suffering of the American internment camps during World War II and the difficulty of relocation and gainful employment in the postwar period. For Nisei to survive as professionals and businessmen, to gain higher employment and social status, they generally followed the principles articulated by the Japanese American Citizens League (JACL), as summed up by James Sakamoto, one of the League's presidents: "Home, institutions and the inalienable right to live the life of an American, is the cry of the second generation and will be the cry of posterity" (Quoted in Takahashi 34). Yet, for a Sansei (third generation Japanese American) the terms of identity could be more complex than the above-stated aspirations.

In an interview with William Walsh, Mura admits to the acceptance of the term "Japanese American" applied to himself as a "term of identity" but qualifies his statement by saying it was "not the sole term or sum" of his identity. Walsh counters Mura's statement by saying, "I never have thought of you as 'Japanese American'. I

simply see you as a writer." Mura then readdresses the identity conundrum with words especially vital for American artists of color by suggesting that

that reflects an American tendency to look at a person solely as an individual. For many Americans that is the only or proper way to look at people, and they equate that with having a proper knowledge of that person. To my mind we are both individuals and members of a group. We are members of many groups, and all of those different groups have an effect on who we are. (Song for Uncle Tom 127)

As Mura insists on maintaining an individual-within-a-group identity for himself, I, who would like to analyze his works solely in terms of epistemological structures and influences, steering clear of identity politics, find myself up against a wall of resistance to my own sense of the poet as a pre-eminent loner, an artistic individualist, a solitary iconoclast. This is the image of the poet inherited from European romanticism and the one we associate with Homer, Donne, Browning, Blake, Yeats, Whitman, Dickinson, Pasolini, Neruda, Stevens, and so on. But gender, race, culture, and class can never be completely factored out of an interpretation of an author's works, though certainly the New Critics attempted to do so. Before proceeding then, a background check must be presented so that readers will not take the poet too far out of his contextual field.

As a Sansei, Mura was raised in a monolingual household, speaking no

Japanese, unlike Nisei writers Toshio Mori and Lawson Inada. Yet both his parents
had been interned, which cast a silent shadow of repressed memories over his family
life that later on required Mura's need for therapeutic healing, unlike fellow poet

Garrett Hongo who grew up in Hawaii and whose family was not interned.

As one living in a Chicago suburb in a non-Japanese community, Mura's sense of himself as an outsider, or in his words "a perpetual foreigner," would be radically different from those living in the Little Tokyos or Japantowns of California such as poets Amy Idemitsu and Janice Mirikitani. And a final difference would be his "outmarriage" to a Caucasian woman doctor, "three-quarters WASP and one quarter Austro-Hungarian Jew" (Song for Uncle Tom 131)

On the one hand, as a Sansei, Mura had the advantage of growing up in the generation that benefited, somewhat, by the construction of the Japanese American as a "model minority" (Wong 1-2). On the other hand, he writes of his "deep suspicion of worthlessness" as a result of racial discrimination and this worthlessness "may begin to corrode the very center of the self" ("Mirrors" 261). Further, he links this idea of worthless identity to the internment of the Japanese during World War II: "My identity, the most intimate of feelings about my own body, were directly tied to what had happened nearly fifty years ago—the signing of Executive Order No. 9066 and the internment of the Japanese American community" ("The Internment of Desire" 289).

To sum up, young Mura grew up in an American culture that stressed individuality and individuation over group harmony, yet he lived in a highly conflicted family structure that withheld knowledge and Japanese cultural identity, and that resulted in Mura developing a secretive, private self, although an "empathic, intuitive sensing" mechanism (Roland 19-20). Further, as a young adult carrying the burden of extreme body consciousness as he develops as a poet, it seems he wanted to abolish the aesthetic distance between himself and his readers, in the postmodern sense, and no longer be the Joycean artist, above the world, as he confesses in Where the Body

Meets Memory to a "waning interest in high European culture" (44). The knowledge that he communicates through his poems is a knowledge in and of the world as he knows it first-hand, employing a "structure of feeling" emanating from embodied consciousness. In this way, he gives us, as Frederic Jameson states, an "American 'oral history,' for the resurrection of the dead of anonymous and silenced generations, the retrospective dimension indispensable to any vital reorientation of our collective future" (574). Mura himself reaffirms Jameson's concept with these words from Where the Body Meets Memory:

The secrets of my family, the secrets of this country [US], the secrets of race in our history, are all intertwined, and there are powerful forces arrayed against remembering and telling, unravelling the truths that have shaped our lives. In my writing, I am trying to make central what is marginal, to re-create and reveal what others say should not be spoken of.

Imagination is intervention, an act of defiance. It alters belief. (20) We find a similar idea expressed by Asian American critic Lisa Lowe:

Culture is the terrain through which the individual speaks itself as a member of the contemporary national collectivity, but culture is also a mediation of history, the site through which the past returns and is remembered, however fragmented, imperfect, or disavowed. Through that remembering—that recomposition—new forms of subjectivity and community are thought and signified." (19).

It could be said then that the immediacy and directness of everyday experience and language that make up the contents of Mura's poems, is also transcended by his interweavings of past trauma into the poems. And there is always the active construction

of a scenario posited against the predictive—the day-dreaming, or adaptive function of memory, that which critic Charles Altieri calls "revisionary content through the work of memory" (79). Thus knowledge gained from reading Mura is never an abstract knowledge but knowledge put forth by the corporeal imagination of a concrete subject, and not, as Lacan reminds us, by the structural void called "le sujet suppose savior" (the subject supposed to know). It is rather like what Heidegger designates as "historiological knowledge" (Being and Time 195). And because the poet, the poet's persona and the poet's readers are interrelated and fluid, and to paraphrase De Man, because interpretation is a function of the temporal structure of understanding, the poem possesses no "epistemological certainty." (Blindness and Insight 109). The literary text cannot be reified.

Although I focus on Mura's poetry in this chapter, if one were to read and analyze his memoir, Turning Japanese: Memoirs of a Sansei, one could easily uncover the very fluid subject-persona that the narrative reveals by showing its subject from different pronominal views, interspersed with ruminations and reflections about his past and present life, along with his fantasies and desires. Turning Japanese is more than an account of a reinvention of the self, as the title implies. It is also an experiential journey in multiple subjectivities, whereby Mura's interior cognitions and emotions, stimulated by displacement to Japan, are threaded into language as an experiment in performance. The narrating "I" is a performative self, always conscious of the drama of existence, employing multiple views as a Japanese American, an American in Japan, and a Japanese of American descent, all of which are subsumed by the male poet-memorist. We can say then that the epistemes gained

from the writing and reading of poetry are not fixed in cement but relative to the time and place of their creation and (continuous) reception.

David Mura's first book of poetry, After We Lost Our Way, won the National Poetry Series in 1989 and established him as a reputable US poet of Japanese American "ethnicity," even though the epigraphs to the four sections of the book indicate he has a broad range of intellectual knowledge gleaned from far beyond any one racial, national, or cultural group. The epigraphs are from the following sources: Minima Moralia, by Theodor Adorno (1978); The Human Province, by Elias Canetti (1978); and Illuminations, by Walter Benjamin (1969). Mura's sources relate to a body of thought designated as "postmodern," and indicate the fashionable theoretical underpinnings of graduate school studies in the humanities beginning in the 1960s and coming to fruition in the 1970s. In his own words:

I came of age as a poet at a time when feminist criticism, structuralism, and post-structuralism were beginning to make their mark on English departments in America I was influenced by the working class poetry of Levine [Philip] and James Wright, the regional poetry of Richard Hugo. I struggled with the poems and poetics of Adrienne Rich, her visionary stances and excavations. Such work spoke in a new way of the diversity of American verse and its ever evolving possibilities. (Song for Uncle Tom 1-2)

Familiarity with the above epistemologies of "difference" opened the way for Mura to hybridize a variety of forms with the typical contents of poetry written by previous generations of Japanese American poets—the depictions of Issei, Nisei and Sansei lives; the loneliness, poverty, prejudice and discrimination factors of the Japanese immigration experience in the US; the internment of the Japanese in America during World War II; and the difficulties of relocation after the war ended—thus creating an atypical and vibrant collection of poems. Poem-maker and poet speaker(s) of and in these poems share a reflexive frustration with the inability to have complete knowledge of an event or a person, or to be unable to fill in the missing pieces of a puzzle the way modernist poems written by Wallace Stevens, T.S. Eliot and Marianne Moore do and the way modernist poets such as Ezra Pound and William Carlos Williams, to a lesser extent, do not.

Of the above-mentioned poets only Pound suffered alienation from the dominant mainstream of American poetry because of his mental instability and unacceptable politics and it is Pound that Mura often evokes for me, in his diversity of forms and multiplicity of speakers as well as presentations of material culture in powerful rhythmic sequences. Like Pound's, Mura's poems are rich in unusual alliterative metaphors that almost sing off the page, as given in the examples below:

Now I will ask you for one true word beyond betrayal, that creaks and buoys like the bedsprings used by the bodies that begot the bodies that begot me.

("Grandfather and Grandmother in Love")

I am the dance the drum the sneaky inscrutable body

And in each heel that stamps the dust a hundred bed lice. . .

("Song for Uncle Tom, Tonto and Mr. Moto")

Sometimes these rhythmical poetic constructions fly so high, as it were, in a double-take the poet needs to bring them down to earth, down to the simpler beauty of ordinary and mundane occurrences:

And now on this island of wild mustard, mist, and heather, herring gulls careening in the salty, rackety Madaket wind, we walk the beach, party to the triumph of the palpable and small—

("Nantucket Honeymoon")

In this regard I find those constructions of Mura that balance soaring sights with settling down to reality reminiscent of the great French poet, René Char:

Te voici nue etentre toutes la meilleure seulement

aujourd 'hu òu tu franchis la sortie d'un hymne raboteux . . .

Here you are naked and among all the best only

Today when you traverse the exit of a rough-hewn hymn

(from, *Le Marteau sans maître* / The Hammer with No Master)

Additionally, both Char and Mura attempt to keep alive the debate between desire and the world, or in Char's lexicon, "Le poème est l'amour realize du désir demeuré désir" ("The poem is love realized as the desire of living desire"; trans. mine) and "A chaque effrondrement des preuves, le poète répond par une salve d'avenir" ("With each

overthrow of proof, the poet responds with praise of the future"; trans mine). French literary critic Frank Villain, in his book <u>Sortir</u>: René Char et la rencontre du dehors, places Char both within and outside politics in terms of his poetical endeavors:

Char's poetry is not written out of an evasion of the real and his times but out of a constant confrontation The political reflections, the ambiguous rapport between poetry and society, the inevitable distance between action and writing nourished the entire work . . . (trans. mine)

Both poets rage against societal and personal injustices, in Char's case against particularly French forms of fascism, in Mura's case against particularly American forms of racism against people of color. In an essay titled "The Internment of Desire," he speaks of "a rage I was unable to articulate but could only enact, expressing elsewhere some unconscious knowledge, what I could not speak" (274). Both Char and Mura are able to come to terms with their rage through the writing of poems because "[T]elling is a form of healing," Mura says ("Internment of Desire" 279). And his ekphrastic or descriptive detailing of what it feels like to inhabit a nonwhite body in America is central to his reaching out to an audience beyond ethnicities, in order to convey the deep connective tissue between memory and body:

... if you repress one memory, other things get repressed too. Because memories reside not simply in the mind or spirit but also in the body. And prejudice and racism reside not simply in racial slurs or job discrimination but also in the ways all Americans feel about our bodies, the skin which surrounds us. ("Internment of Desire" 280)

Mura inhabits his body both on a personal and on a social level, as we all do: "The private and the public, the individual and the group—it was all connected, captured in my body" ("Internment of Desire" 289), thus, more often than not, his poems constitute an ongoing series of epistemological autobiography in which story and discourse blur, time is unstable, not suspended in timeless moments, as in the works of T.S. Eliot, but always in duration in a bumpy sort of way.

Returning to an interpretation of the poems in Mura's first collection, "Nantucket Honeymoon," written in the traditional tercet form (commonly used by Italian poets), opens with an ancient metaphor for erotic love—the honeycomb—then segues after a dash into a past-tense rumination on the importance of being "white" in America, the difficulty for persons of color to be content with their "bodies," and finally, the rejection of "whiteness" in the phrase "No más (by employing the Spanish "No more," Mura indirectly joins Asian and Hispanic angst over skin color in a moment of lyrical bonding). When Mura's persona says, "I learned—how else can I say it?—to love my own sweet skin," the didactic conclusion is offered to all who have suffered from various somatic colorations.

"The Natives" is a highly original narrative lyric reminiscent of the themes and scenes put forth by Joseph Conrad in <u>Heart of Darkness</u> such as jungle, fungus, deprivation, death. Midway the poem transforms into an antiwar poem, through depictions of useless weapons—"the rusted grenades, the ammoless rifles, barrels clotted with flies," and concludes by conjoining human beings with nature.

The longest poem in After We Lost Our Way is a tribute to Pier Paolo Pasolini, the great Italian poet, novelist and filmmaker. In a tour de force work on homosexual desire, fulfillment and loss, iterated by various speakers-Mura's persona, invocations of Dante, Pasolini's persona, an objective reporter relating facts and quotations—we experience the rich ambiance of modernity as lived and expressed by Pasolini and his Italian friends, novelists Elsa Morante and Alberto Moravia, actors such as Ninetto Davoli, Pasolini's one-time lover, and filmmakers Bertolluci and Fellini. In contrast to the past, the poet-speaker views postmodern Italy in the manner that Pasolini might have, were he to have lived. The "Pasolini" poem resembles William Carlos Williams' masterwork, <u>Patterson</u>. Mura intersperses historical facts, quotations, courtroom rancor during the trials of Pasolini for obscenity and immoral acts with lyrical passages intending, it seems to me, to gain a larger audience than the precious literary-inclined one, as well as to rewrite the sufferings of the poet-filmmaker to keep his memory alive and to elicit more compassion and empathy for him. Artists, writers and poets are ever more aware of audience than in the past and the need for multiformed approaches to solicit attention. As David Orr puts it: "Indeed poets are haunted by the concept of speaker and audience the way novelists are haunted by the idea of time" (14).

Section 6 of "Pasolini" is in the form of an epistolary poem, subgenre of the lyric, a "fictional" letter from Pasolini to Elsa Morante, about the Pesaro Film Festival and Roland Barthes. It includes a subjunctive speculation about the possibility of a poem authenticating an action and an action justifying the poet's life, all meant to cast doubt on the "soulless" Barthean text, "The Death of the Author." Section 7 is also an epistle, this

time from Pasolini in Nepal to Alberto Moravia, one-time husband of Morante. It is a much more prosaic effort and, in my opinion, less successful poetry. Section 8 chronicles the increasing of crime in Italy, especially by delinquents, and increasing political corruption: "deals with CIA, Mafiosi, bankers, oil firms" and Pasolini's condemnation of the political economy. By conjecture, we understand these points to be also David Mura's complaints about the results of late consumer capitalism in the US. Section 9, "A Violent Life," presents the death of Pasolini by alternating italicized factual material with poetic meditations on life and art in the mind of Pasolini. In Section 10, "A Fascist Death, A Purgatorial Dream," the poet-speaker presents three imagined end-of-life moments or ways of dying for Pasolini. The first two focus on physical pain and helplessness the poet-victim but the third emphasizes the mind/spirit: "I will this knowledge, this/bleeding, byzantine farewell." And lastly, Section 11, "An Epitaph for Pier Pasolini (1922-1975): Open & Shut," is a powerful and beautiful testament to Pasolini from Mura. I give it in full below:

Here is the rose of history. Pull the petals apart.

A faint murmuring starts, then shouting, shrieking, an interminable roar. So you close the rose, call it simple, a rose without history, innocent, eternal.

Almost all of the poems in <u>After We Lost Our Way</u> can be understood as a disruptive and deconstructive force that undermines all fixed identities because ruptures in syntactical unity do not allow for any unified signified. Therefore, one result of Mura's body of poetry is the overturning of previous racist stereotypes of Japanese Americans.

Turning to his second collection of poetry, The Colors of Desire (1995), at first reading it seems to be less lyrical and more intent on evoking political action. But let us not be deceived. The book begins with "Issei Strawberry," a poem which eulogizes the first generation of Japanese immigrants who worked in the agricultural industry, specifically the strawberry fields of California. A series of verbal instructions are given by the poet-speaker to an interlocutor: "Taste," "spin," "whirl," "look," "spit," and "wipe," thus bringing the somatic knowledge of the hot, backbreaking work of picking strawberries home to the reader. He situates the time before World War II and the internment camps by mentioning swing music and Frank Capra and these historical markers are followed by retrieval and re-appropriation of the "American dream, as some are deferred and some/preferred . . ." Some are "written/out of history" and some are prosperous, though none can hold deed to their own land, "knowing you own nothing/here [in America]" as opposed to "there" in Japan. The poem underscores the desire of immigrants to gain "a harvest, a country, a future," and concludes with statements of the embodied consciousness of the interlocutor: "the red juice flows between your teeth/ with the memory of strawberries/ and loam and sweat, of summers in the valley/ when you made it before the war had come."

The second poem in the collection is the title poem, "The Colors of Desire," a meditation on various forms of male desire. Section 1 *Photograph of a Lynching (circa 1930* questions white male power, asking what kind of man would lynch a man because he is black, then the poet-speaker recalls his Nisei father had "passed through the rifle towers and gates/of the Jerome, Arkansas, camp [internment camp], and, in 1942,/stepped

on a bus to find white riders/motioning, 'sit here, son'," and the blacks sitting in the back of the bus did the same. The in-betweenness of the Asian in the racial hierarchy of America is posited as an ambivalence in the mind of the poet, who fast forwards to 1965 and himself—as first person narrator—viewing a pornographic film in which a black man and a white woman—a "blond, practically pure white smile—" engage in a sexual act that is "the ultimate crime/against nature," or miscegenation, though we know the film is but a representation of the commercialization of sex for viewers who pay to be titillated. The poet-speaker goes on to say he "bolted from a dream into a dream," from an unreal sex film into a sexual fantasy, and he continues to be puzzled over the placement of the Asian body in the scheme of life—"(and where am I,/the missing third?)." This poem illustrates Mura's usual poetic stance, one of non-reification, difference, and process, a dialectical encounter with the other or others, as an attached observer, in keeping with the phenomenology of Maurice Merleu-Ponty: "The phenomenological world is not the bringing to explicit expression of a pre-existing being, but the layering down of being. Philosophy is not the reflection of a pre-existing truth, but, like art, the act of bringing truth into being" (xx) and "[T]here is no inner man, man is the world, and only in the world does he know himself' (xi).

The establishment of "pornography," as not only a subject for "self-confession" on the part of the poet but also a shared activity of poet and reader through the activity of literary voyeurism, as the reader progresses through the text by way of delayed desire—the meaning is promised but withheld—takes Mura beyond the category of "confessional" poet only. Similar to the confessional American poets of the 1960s,

Robert Lowell, W. D. Snodgrass, Anne Sexton, and Sylvia Plath, Mura relates his hidden and forbidden desires, but different from them, he undermines the tradition of a separation between a subject and an object of knowledge. More than just making static representations of objects in his writings, Mura seems to want to elucidate the relationships between subject and subject, subject and object, object and object, or the condition of "betweenness."

Section 2 1957 of "The Colors of Desire" depicts the poet as a boy of six dressed in American cowboy garb, with "skin dark from the sun"—picturing himself as the television cowboy hero Paladin. In this way, dark skin color can be attributed to a hero tanned by the sun rather than to race. The western hero image replicates assimilation to American cultural values. But after repeatedly shooting his toy "six-guns" his father 'wails" him. The punishment of the child by a father who supports assimilation and suppresses Japanese identity sets up an ambivalent confusion, an identity crisis, which is compounded by racism expressed by a character in the poem, "a man in a serge suit" who yells, "Hey, you a Jap?/You from Tokyo? You a Jap? A Chink?" Mura's father's flight rather than fight reaction to prejudicial insult is displaced later that evening into anger causing him to beat his son. The third section, Miss June 1964, takes place at the beginning of the Vietnam military buildup. Mura as poet-speaker is twelve and he searches in his father's closet for pornographic magazines, then masturbates while looking at the breasts of a white woman that "millions of men, white, black, yellow, have seen/though the body before me is white, eighteen. . ." Though he feels "delight," he does not cry out with pleasure, exhibiting a sexual repression connected to the fear of his

mother discovering his sinful act. In other words a Calvinistic response due to "an agonized conscience." According to George Santayana, "Calvinism . . . is an expression of the agonized conscience." And further:

It is a view of the world which an agonized conscience readily embraces, if it takes itself seriously, as, being agonized, of course it must.

Calvinism, essentially, asserts three things: that sin exists, that sin is Punished, and that it is beautiful that sin should exist to be punished.

The heart of a Calvinist is therefore divided between tragic concern At his own miserable condition, and tragic exultation about the universe at large. He oscillates between a profound abasement and a paradoxical elation of the spirit. (202)

Less we misunderstand Santayana, he insists that Calvinism as a philosophical principle is not limited to only Protestant Christianity (though I should say here that Mura was raised as an Episcopalian), but can be found in "the Koran, in Spinoza, and in Cardinal Newman; and persons with no very distinctive Christian belief" (202).

To refer again to the William Walsh interview, which takes place after the publication of <u>The Colors of Desire</u>, Mura speaks of the self-reflection and interior examination of his desires that prompted the writing of the book:

For me, the collection is an examination of a conjunction of forces, of reading sexuality through the lens of the Japanese American and Asian American experience, particularly, through Japanese American history. . .

It is particularly concerned with interracial relationships. My wife is Caucasian, three-quarters WASP and one quarter Austro-Hungarian Jew.

(Song for Uncle Tom 131)

The untitled Section 4 relates details of his marriage, his mixed-race daughter, ending with the final line, a quiery, "oh why must it matter?" This rhetorical question stretches beyond rhetoric, though, to become the most poignant line in the poem.

Xiaojing Zhou analyzes the collection, The Colors of Desire, this way:

Mura has developed several strategies to illustrate how sexuality and the body can become sites for the articulation of and resistance to racial ideologies. One of his strategies is to use the form of sequence poem to constantly incorporate historical and social elements into the process of his persona's identity formation and the development of his sexuality. (251)

As good as Zhou's interpretations of Mura's poems are, in my opinion they are limited by always focusing on issues of racial identity, gender and sexuality. These quasi-psychosociological readings limit rather than expand the power of the lyric poet that David Mura is, and that is the transcending factor freeing him from the label of "confessional poet" and/or "ethnographic poet." Following Theodor Adorno's theory, lyric poetry is a mediation between "particularity" and "totality" in representation:

... the greatest lyric works in our language owe their quality to the force with which the "I" creates the illusion of nature emerging from alienation.

Their pure subjectivity, the aspect of them that appears seamless and harmonious, bears witness to its opposite, to suffering in an existence alien to the subject and to love for it as well—indeed their harmoniousness is actually nothing but the mutual accord of this suffering and this love.

(41)

Poetic knowledge, or the epistemological meaning of the poem, is given to us temporally, in the time it takes to read, to re-read, and to reflect upon the poem and the poet's insight into his or her own suffering and love(s), and in the time it takes for us to imaginatively link our experience of suffering and love with that which is communicated by the poet. As Susan Stewart puts it: "Whatever catharsis lyric effects resists abstraction and calls for a recognition of the other and the temporal reformulation of judgment" (Poetry and the Fate of the Senses 252).

One of the most effective lyrics, to my way of thinking, in The Colors of Desire is the long poem "The Blueness of the Day" (first published in New England Review [Summer 1992]). This poem progresses phenomenologically through wartime France by means of instant recall of war, "shells gutted up dirt and smoke,/a hundred mouths gaping at once," told by the persona of a Nisei soldier, then it "retrieves" an internment camp memory of a cleaver crunching a chicken, in which alliteration is used to shock rather than pacify, and next it "regresses" farther back in time to uncover the non-sentimentalized actuality of prewar life for Japanese in America, recalling the "smudge pots" in the orange groves of California, and finally it fast forwards to postwar Paris, from which the Nisei poet-speaker writes home, "even in my worst rages/I could not

slash the Mona Lisa or the sinners of Caravaggio." The jumble of images, sounds, sensations, experiences and memories cannot be contained in one time period or in timelessness, nor even stylistically in complete sentences and end-stopped lines. Even words are inadequate to convey the meaning—"The words vanish./I begin again"

This is poetic practice in the spirit of Heidegger, the refusal of coherence and clarity that leads to objectivity and the embracing of the immediate sensual perception of objects, which Heidegger calls *noein*, as the way to knowledge.

Clearly, the poet of "The Blueness of the Day" does not view Paris as the poets of the past did, as a city of beauty and enlightenment, of pleasure and escape, rather he asks, "Is it better to say, 'I am suffering,'/than 'This landscape is ugly?" The struggle to uncover, dis-close, communicate experiential truth is once again broken off, this time by digression in the form of "2 Intermission (1991)," beginning with the words, "This is a draft in progress. As in a film without stars:" The colon, a punctuation mark of continuance, however, is followed by an italicized account of a film of interracial secual union, interrupted by the counterfactual, "I'd prefer black and white, the colors/ of Regnais, Hiroshima Mon Amour" then cuts back to the film, makes a penultimate cut to the writer writing the filmscript, presumably Marquerite Duras, and a final cut to the poet writing, "It's too romantic. Tear it up. Start again." Further sections in the poem shift the scene to David Mura's home where "an interviewer accuses him of "brutality in your work" and his "happa daughter shouts down the hall." Later on in the poem, the poet includes an aphorism, "In the unity of the book, something always, explodes," thereby denying the structure of unity itself. In a very curious way, the burden or anxiety of the

past is shattered by the fractured lines of verse, the cuts and intercuts, the teeming mixture of multi-subjectivies relating multi-layered lives.

In this poem "The Blueness of the Day," Mura seems to share not only Charles Olson's Projective Verse as a writing technique but also Olson's view of history. Olson defines Projective Verse this way:

ONE PERCEPTION MUST IMMEDIATELY AND DIRECTLY LEAD TO A FURTHER PERCEPTION. It means exactly what it says, is a matter of, at *all* points . . . get on with it, keep moving, keep in, speed, the nerves, their speed, the perceptions, theirs, the acts, the split second acts, the whole business, keep it moving as fast as you can, citizen. (Selected Works 17)

Taking Herodotus as his mode, Olson says, "By history I mean to know, to really know" (The Special View of History 21), and not to make a "universe" out of discourse as Socrates would have it. By scrapping away the veneer of words as we have known them and by breaking syntactic coherence, as Olson and Mura do, we as readers are forced to see anew, gaining new knowledge through words to things. Paul Bové calls this "kinetic" art (borrowing the term from Olson), that which "gets through the veil of words and images to the things themselves and thus breaks through to the beginning of the circuit of creativity" (240-41).

In Heidegger's spirit of destruction, "a phenomenological destruction of the history of ontology" (Being and Time 63), and under the influence of Edmund Husserl—the father of modern phenomenology—Mura dis-assembles former epistemes

relating to Asian American life and history, to uncover what they contain or conceal. When he re-assembles those epistemological parts and adds new content in the creation of his poems, the effect is "to let that which shows itself be seen from itself in the very way in which it shows itself from itself" (Being and Time 58)

As Deborah Forbes informs us, "Poetry's purpose is no longer to be learned, to present arguments and convey knowledge *about* history, science, politics and theology, but to act as a form of knowledge itself" (9: emphasis mine). Superb literary art, in particular, poetry, is already always a hermeneutic art and always interpretable in a number of different ways. In his deconstructive poetic practice, David Mura sifts through the sands of temporality and retains the *logos* that has been covered and buried over or presented itself as only semblance, in order to dis-close error and raise up historiological/primordial knowledge, not as the "validity of a belief" (the politics of a republic) but as "authenticity" (the poetics of Being-there).

Works Cited and Consulted

- Adorno, Theodor W. "On Lyric Poetry and Society." Notes to Literature I

 2 vols. Ed. Rolf Tiedemann. Trans. Shierry Weber Nicholsen. New
 York: Columbia University Press, 1991-92; I: 37-54.
- Altieri, Charles. "Images of Form vs. Images of Content in Contemporary Asian-American Poetry." *Qui Parle* 9.1 (Fall/Winter 1995): 71-91.
- Aristotle. <u>Poetics</u>. Trans. Gerald F. Else. Ann Arbor: University of Michigan Press, 1967.
- Bové, Paul A. <u>Destructive Poetics: Heidegger and Modern American Poetry.</u>

 New York: Columbia University Press, 1980.
- Char, René. Le marteau sans maître. René Char Œuvres complètes. Paris : Bibliothèque de la pléiade, 1983.
- ---. "Partage Formel XXX." <u>René Char Oeuvres complètes</u>. Paris :

 Bibliothèque de la pléiade, 1983.
- Chu, Patricia. <u>Assimilating Asians: Gendered Strategies of Authorship in Asian</u>

 <u>America</u>. Durham, NC: Duke University Press, 2000.
- Confucius. The Four Books: The Chinese Classics. Vol. 1, 2nd and rev. ed. James Legge, trans. and compl. China: 1892; reprint, Taiwan: Wengquiao Press, 1983: 407.
- Damasio, Antonio R. <u>The Feeling of What Happens: Body and Emotion in the Making of Consciousness</u>. New York: Harcourt, Brace, 1999.
- Forbes, Deborah. <u>Sincerity's Shadow: Self-Consciousness in British Romantic and Mid-Twentieth Century American Poety</u>. Cambridge, MA: Harvard University Press, 2004.

- Foucault, Michel. <u>The Archeology of Knowledge</u>. Trans. A. M. Sheridan Smith. New York: Harper, 1972.
- Gunderson, Elizabeth. Review of <u>The Colors of Desire</u> by David Mura. <u>Booklist</u> 91 (December 15, 1994): 732.
- Harding, Sandra. "Feminism, Science, and the Anti-Enlightenment Critiques."

 Feminism/Postmodernism. Ed. Linda J. Nicholson. New York:

 Routledge, 1990.
- Heidegger, Martin. <u>Being and Time</u>. Trans. John Macquarrie and Edward Robinson. New York: Harper and Row, 1962.
- Hongo, Garrett, ed. <u>Under Western Eyes: Personal Essays from Asian America.</u>
 New York: Anchor/Doubleday, 1995.
- Jameson, Frederic. "The Cultural Logic of Late Capitalism." Postmodernism; or, The

 Cultural Logic of Late Capitalism. Durham, NC.: Duke University Press,

 1991. Rpt. In Gordon Hutner, American Literature, American Culture (New

 York: Oxford University Press, 1999), Part II, pp. 573-84.
- Kane, Daniel. "Poets Chat: Interview with David Mura" (November 1999).

 August 1, 2002

 http://www.twc.org/forums/poetschat/poetschat/ dmura.html>
- Lacan, Jacques. "The Freudian Thing." <u>Écrits: A Selection</u>. Trans. Alan Sheridan. New York: W. W. Norton, 1977.
- Lyotard, Jean-Francois. <u>The Postmodern Condition: A Report on Knowledge.</u>

 Trans. Geoff Benington and Brian Massouri. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1984.

- Lowe, Lisa. "The Power of Culture." <u>Journal of Asian American Studies</u> 1.1 (February 1998): 5-29.
- Mura, David. "The Internment of Desire." <u>Under Western Eyes: Personal Essays</u>

 <u>from Asian America</u>. Ed. Garrett Hongo. New York: Anchor/Doubleday,
 1995: 259-293.
- ---. <u>A Male Grief: Notes on Pornography and Addiction</u>. Minneapolis: Milkweed Editions, 1987.
- "Mirrors of the Self: Autobiography and the Japanese American
 Writer." <u>Asian Americans: Comparative and Global Perspectives.</u>
 Ed.Shirley Hune et al. Pullman: Washington State University Press, 1991.
- ---. "A Shift in Power, A Sea Change in the Arts: Asian American Constructions."

 The State of Asian America: Activism and Resistance in the 1990s. Ed.

 Karen Aguilar-San Juan. Boston: South End Press, 1994.
- ---. "A Short Intellectual Biography of a Japanese American Sansei Writer, or How I Learned Not to Write Like James Michener or John O'Hara." <u>Kyoto Review</u> (Spring 1987).
- --- Song for Uncle Tom, Tonto, and Mr. Moto: Poetry and Identity. Ann Arbor: University of Michigan Press, 2002.
- ---. <u>Turning Japanese: Memoirs of a Sansei</u>. New York: Anchor/Random House, 1992.
- ---. Where the Body Meets Memory: An Odyssey of Race, Sexuality & Identity.

 New York: Anchor/Doubleday, 1995.
- Olson, Charles. <u>Selected Writings</u>. Ed. Robert Creeley. New York: New Directions, 1966.

- ---. The Special View of History. Ed. Ann Charters. Berkeley: Oyex, 1970.
- Orr, David. "I and You—On Poetry." NYTBR (August 28, 2005): 14.
- Perloff, Marjorie. <u>Poetic License: Essays on Modernist and Postmodernist Lyric.</u>

 Evanston: Northwestern University Press, 1990.
- Plato. <u>Plato's Republic</u>. Trans. and ed. G. M. A. Grube. Indianapolis: Hackett, 1974.
- ---. Theatetus. Ed. Robin A. Waterfield. New York: Penguin, 1987.
- Roland, Alain. <u>Cultural Pluralism and Psychoanalysis</u>: <u>The Asian and North</u>

 <u>American Experience</u>. New York: Routledge, 1996.
- Santayana, George. "The Genteel Tradition in American Philosophy." Gordon

 Hutner, ed. <u>American Literature, American Culture</u>. New York: Oxford

 University Press, 1999.
- Serres, Michel. <u>Angels: A Modern Myth</u>. Trans. Francis Cowper. Paris: Flammarion, 1995.
- ---. <u>The Troubadour of Knowledge</u>. Trans. Sheila Faria Glaser and William Paulson. Ann Arbor: University of Michigan Press, 1997.
- Smith, Bruce. "Introduction: Some Presuppositions." PMLA 120.1 (January 2005): 9-15.
- Stewart, Susan. <u>Poetry and the Fate of the Senses</u>. Chicago: University of Chicago Press, 2001.
- ---. "What Praise Poems Are For." PMLA 120.1 (January 2005): 235-245.
- Takahashi, Jere. "Japanese American Responses to Race Relations: The Formation of Nisei Perspectives." <u>Amerasia</u> 9.1 (1982): 29-57.

Balestrieri 31

- Vico, Giambattista. <u>The New Science</u>. Trans. Thomas Goddard and Max Harold Fisch. Ithaca: Cornell University Press, 1970.
- Villain, Franck. <u>Sortir: René Char et la rencontre du dehors</u>. Tsukuba: Satô Insatsu, 2002.
- Wong, Sau-ling Cynthia. "Subverting Desire: Reading the Body in The 1991Asian
 Pacific Islander Men's Calendar. Hitting Critical Mass: A Journal of Asian
 American Cultural Criticism 1.1 (Fall 1993). August 1, 2002
 http://ist-socrates.berkeley.edu/10/11/2005~critmass/v1n1/wong1.html
- Zhou, Xiaojing. "Race, Sexuality, and Representation in David Mura's <u>The Colors</u> of Desire." <u>Journal of Asian American Studies</u> (October 1998): 245-267.

ERRATA

- P. 13 l. 14: "etentre" should be "et entre"
- P. 22 l. 5: "queiery" should be "query"
- P. 24 l. 14: "secual" should be "sexual"
- P. 24 l. 17: "Marquerite" should be "Marguerite"
- P. 24 l. 21: "always, explodes" should be "always explodes"
- P. 25 l. 2: "multi-subjectivies" should be "multi-subjectivities"
- P. 25 l. 2: "mode" should be "model"

旅する歴史家

――フランシス・パークマンの歴史記述における空間性と土地の記憶――

山口善成

ー はじめに

十九世紀中葉から終わりにかけて活躍した歴史家フランシス・パークマン(一八二三―一八九 三)の仕事を簡潔にまとめるとしたら、それは「『アメリカの森の歴史』を描く、旅する歴史家」 ということになるだろう。あるいは少なくとも本人は自らの歴史記述をそのように定義していた ようである。パークマンは生前、己の人生を回顧する自伝仕立ての手紙を二通、親しい友人に宛 てて書いているが、(1) これによると彼が歴史家になることを最初に決意したのは十五、六歳の頃、 そもそものきっかけは以前から親しんでいた「森」に対する強い関心に端を発していたという。 自らを「彼」と三人称で指す少々芝居がかったその書簡の中で彼は説明している。「彼は森に惚れ 込んだ。そしてこの森に対する関心はやがて彼のもう一つの情熱であった文筆の面においても決 定的な影響力をふるうようになった。子供にありがちな無知で野心に満ちた時期を過ぎると、彼 は歴史の女神だけに尽くすことを決意したのである」(Jacobs I: 176)。そしてハーヴァード大学に 入学して間もなくすると、彼の中で「森」と「歴史」はよりはっきりとしたかたちで結びつくよ うになる。「大学二年目の終わりまでには、私のさまざまな計画は『古フランス戦争』として知ら れるストーリーを書く計画へと結晶していった。<中略>数年後、私はその計画の規模を広げ、 アメリカにおけるフランスとイングランドの衝突の経緯全体を視野に入れるようになった。ある いは言い換えるならば、それはアメリカの森の歴史だった」(Jacobs I: 184n)。実際、「読書に頼る よりも、主題と一体化できるような実体験」を重んじたパークマンは歴史の舞台となる森への旅 を何度となく繰り返している(Jacobs I: 176)。彼の北米植民地史シリーズ『北アメリカにおけるフ ランスとイングランド』(一八六五—九二)がこのような森の史跡をめぐる巡礼旅行をもとにして生 まれたことは疑うべくもない。

そして、さらに言えば、パークマンの歴史の構造そのものも「森」と「旅」によって成り立っていた。あるいは別の言い方をすれば、彼の歴史はアメリカの広大な土地を主人公とし、その土地を文字どおりあちこち移動しながら展開するという、きわめて「空間的」な歴史であると定義してよいだろう。本稿はパークマン自身の言葉にある「アメリカの森の歴史」とはいかなる種類の歴史だったのかを考察し、これによって彼の歴史記述における方法論としての「旅」の意義を検証することを第一の目的とする。具体的には一八四九年出版の旅行記『オレゴン・トレイル』(The Oregon Trail)と一八五一年に発表した最初の歴史書『ポンティアックの陰謀』(The Conspiracy of Pontiac)を取り上げ、これら二つの比較対照を交えながら主として後者の『ポンティアックの陰謀』がいかに「旅」という方法論を内在化したテクストであるかを、そしてその結果いかにこの歴史書が「時間性」よりも「空間性」に基礎を置く歴史であるかを例示しながら議論を進めたい。

パークマンの旅、とりわけ旅行記『オレゴン・トレイル』については、これまで大きく分けて

三種類の解釈が施されてきた。一つめはピクテャレスク美学の視線によって書かれた西部紀行として捉える読み方、二つめは男性性確保の手段としての西部探検旅行という解釈、そして三つめは十九世紀アメリカの領土拡張政策および先住民放逐の一つのケーススタディとして捉える見方である。⁽²⁾ これらの解釈に共通するのは、あれほどまでに実際に歴史の舞台を旅することにこだわったにもかかわらず、パークマンという歴史家はどこに行っても決して白人優位主義的でエリート主義的なものの見方から抜け出すことができなかったという指摘である。これはまったくその通りで、彼は先住民や辺境の人々に対して弁解の余地のないほど無反省で根の深い差別のまなざしを向けている。ただし、本稿はこれらの先行研究を前提にしつつ、先に述べたようにパークマンの旅を歴史記述の方法論として評価する試みである。以下、具体的な考察を経て、彼の旅とその成果である歴史書は独立期から十九世紀中葉のアメリカにおいて多量のテクストを生み出した「土地の文学(the literature of the place)」というジャンルに関係づけられることになるだろう。そして、パークマンの仕事がそのような「土地の文学」から国家の歴史へと発展する過渡期の歴史記述であったことを指摘すること、これが本稿の最終的な目的である。

二 パークマンの歴史と旅――資料収集としての旅――

かなり若い頃から歴史家になることを意識していたパークマンだが、その志しが実際に具体化してくるのはハーヴァード大学に入学した後、同大学歴史学部初代教授ジャレド・スパークス(ーセハ九―一八六六)から得た教えに依るところが大きい。(Wade xi; Jacobs I: xxxiv-xxxv)。スパークスはアメリカの歴史学研究において一次資料の収集を徹底した最初期の歴史家で、オリジナル・ドキュメントの収集のためだったら国内だけなく大西洋を越えることも厭わない精力的なリサーチ・トリップを行ったことで知られている。また彼によって本格的に始められた一次資料研究の徹底はその後十九世紀アメリカの歴史家たちに共通する特徴となり、当時の歴史資料研究の規範はヨーロッパではなく、アメリカの歴史家たちによって打ち立てられることになったという。

(③) パークマンもまたそのような当時の歴史家たちの一人である。とりわけスパークスの直接の弟子として、一次資料研究の徹底は歴史記述の最優先事項として若いパークマンの心に深く印象づけられたに違いない。実際、彼は大学やマサチューセッツ歴史協会の図書館、各地の公文書館を漁ることはもちろん、スパークスの紹介などを通じて地方の資料収集家と連絡を取り合いながら、かなり早い時期から歴史資料を集めるようになる。さらに大学の授業のない夏には、後に自身の手で書くことになる歴史の舞台、アメリカ東海岸の森を旅し、土地の人々にインタビューしたり各地の史跡をまわったりして資料収集の旅にのめり込んでいる。

オレゴン・トレイルへの旅もこのようなリサーチ・トリップの延長として捉えることができるだろう。アメリカ東部の歴史舞台を旅し、また何千ページにもおよぶ一次資料が集まったものの、主題となるフレンチ=インディアン戦争の歴史を書くためにはインディアンたちのことをもっとよく知らなければいけないという理由から、実際に彼らの生活様式に直接触れるべくオレゴン・トレイルの旅に出たわけである(Jacobs I: 23, 31, 33)。「私がこの地にやってきた目的はインディア

ンとはいかなる性格の人々なのかを観察するため、ほとんどこれに尽きる。子供の頃からこのテーマに興味を持ち続けていたものの、読書だけでは好奇心を充分満足させることができず、私は実地観察をすることに決めたのだ。私は何としてでも知りたかった、さまざまな人種の中でインディアンが占める位置について、彼らの生まれつきの性向および生活様式に由来する長所や短所について、彼らの統治の仕方や迷信、そして家族の形態についてのことを。この目的を達成するためには彼らの中で生活すること、いわば彼らの一員になることが必要不可欠だった」(Parkman, a 111)。そして、この旅によって得た知識は確実にパークマンの歴史記述に組み込まれてゆく。『ポンティアックの陰謀』序文によると、この歴史書を書くためには「書斎の中で行うのとは違った種類の調査が不可欠」だったとし、オレゴン・トレイルの旅で「ロッキー山脈に住むさまざまな原始部族を訪問し、しばらくの間西ダコタ族の村で彼らと生活を共にした」経験が大いに役立ったと表明している(Parkman, a 347)。

こうして見れば、パークマンにとって旅はまず第一に資料収集のための旅だったと言えるだろう。しかし本稿にとって興味深いのは、彼の旅は単なるリサーチ・トリップの領域をはるかに超える要素を含んでいたということである。それは本格的な歴史記述に取り組む前の準備という副次的な効果以上に、実際にはパークマンの歴史記述の根幹を成す要素ですらあったのだ。⁽⁴⁾

では「旅」はパークマンの歴史記述の成り立ちにいかに関わっていたのだろうか? この点を明らかにするためには『ポンティアックの陰謀』をより詳しく考察しなければならない。

三 『ポンティアックの陰謀』の空間性

歴史書『ポンティアックの陰謀』にとってインディアンは重要な登場人物であり、彼らをより生き生きと描くためにオレゴン・トレイルの旅で得たような実体験に基づく知識はとても貴重なものだった。しかし、我々読者はその冒頭いきなり、歴史の登場人物としては若干違和感のあるインディアンに出会うことになる。つまり、『ポンティアックの陰謀』第一章、「ミシシッピ川以東のインディアン部族」と題された章に描かれたインディアンのことである。

端的に言って、この第一章に描かれたインディアンは静止したインディアン、固定されたインディアンである。かなりの量の紙面を使って書かれたこの第一章の中心にあるのは、ミシシッピ川よりも東のインディアン部族をイロクウォイ系とアルゴンクウィン系の二つに分類し、それぞれの部族について言語、宗教、生活習慣等の特質を列挙することで、いわばインディアンを標本化し、体系化する試みである。例えば、イロクウォイの村、とりわけその住居の様式を説明した一節がある。「これらの防御壁が取り囲む内側の土地は多くの場合、数エーカーほどの広さで、そこに規則正しく並んだ住居の列は長さにして一〇〇フィートを超える場合もあった。地面にしっかりと打ち込まれたいくつかの柱が横木の枠組みでつながれ、それが住居の骨格となっていた。側面とアーチ型の屋根は楡の木の皮で何層にもしっかりと覆われた。大きめの住居にはそれぞれ数家族が一緒に住み、家族ごとに別々の炉が中央部分に焚かれ、各壁面にはちょうど厩舎の仕切のようなコンパートメントがあって、ある程度のプライヴァシーが保たれていた」(Parkman, a 370)。

あたかも博物館の陳列ケースに収められたレプリカ・サンプルを解説したような記述である。他 にも組織の形態や宗教についてなど、この第一章ではインディアンたちの生活諸様式が同じよう な淡々とした語り口で事細かに列挙される。そしてこれらのデータをもとにインディアン諸部族 に関する知識は体系化されてゆくわけである(図表1を参照)。もちろん、この標本化と体系化の プロセスに多くの文献を渉猟し、インディアンたちと直に接した経験が大いに役立っていること は間違いない。しかし、我々読者が少々違和感を覚えるのは、このような記述が「歴史」という 名の付いたテクストの冒頭を三〇ページにもわたって長々と続いていることである。^⑸ これをど のように理解したらよいのだろうか。

『ポンティアックの陰謀』第一章「ミシシッピ川以東のインディアン部族」(Parkman, a 359-89)

- Ⅰ. 概説——すべての部族に共通する慣習について—
- II. イロクウォイ系

 - 2. 部族内統治の様式
 - 3. イロクウォイ系部族の起源
 - 4. 伝説、神話、宗教
 - 5. 生活様式、住居の様式
- III. アルゴンクウィン系
 - 1. 広大なテリトリーについて
 - 2. 各部族のテリトリー
 - 3. イロクウォイ系部族との闘争
- IV. インディアンの一般的性格
 - 1. 矛盾する性格(誇り高さと卑屈さを併せ持つなど)
 - 2. インディアンの知性について

- 1. テリトリー、および地理的ポジション 6. 戦闘様式、イロクウォイ系部族の残忍さ
 - 7. 最も特徴的な性質:誇り高さ
 - 8. イロクウォイ系のその他の部族
 - 9. イロクウォイ系部族の勢力拡大について
 - 4.生活様式
 - 5.伝説、神話、宗教

図表 1:『ポンティアックの陰謀』第一章のアウトライン

図表 2:『ポンティアックの陰謀』初版時のタイトル・ページ

パークマンは『ポンティアックの陰謀』第一章を執筆するにあたって、当時アメリカで発展し つつあった民族学の専門家に幾度となく助言を求めている。例えば執筆真っ只中の一八五〇年七 月二一日付け、アメリカ民族学協会の創設者の一人であるヘンリー・ロウ・スクールクラフト(一 七九三—一八六四)に宛てた手紙では、パークマンは当時かなりの影響力を持ったというこの民 族学者にアルゴンクウィン系部族のトーテムの慣習について問い合わせており、これによって得た情報は実際に第一章の中に組み込まれることになった(Jacobs I: 75; Wade 400-01)。また第一章の本文と脚注において繰り返しなされる著名な民族学者たち(スクールクラフト、アルバート・ギャラティン)への言及はパークマンが当時の民族学に極めて近しい関係にあったことを証明している。こうして見れば、第一章に書かれた内容がスクールクラフトらによる十九世紀アメリカ民族学の成果を下敷きにするものであると言って差し支えないだろう。⁽⁶⁾

さらに『ポンティアックの陰謀』第一章に見られるような標本化、体系化といった記述の手法も元来それは民族学の方法に由来するものであった。例えば、一八四七年三月の議会決定を受けるかたちで始められたスクールクラフトの大著『合衆国におけるインディアン部族の歴史、現況、および今後の見通しに関する系統的、統計学的資料集』(Historical and Statistical Information Respecting the History, Condition and Prospects of the Indian Tribes of the United States, 6 vols., 1851-57)はパークマンの記述スタイルと驚くほどの共通性を見せている。スクールクラフトによれば、このシリーズは「現在合衆国領土内に住むすべてのインディアン部族の歴史、生活様式、言語、および知的能力や性格を例証するデータの提供」を目的とし、さらにこれらのデータをもとに「インディアン諸部族を民族学的なグループに分類することを意図している。こうしてこれまで混迷をきわめてきたインディアン研究により大きな意味での秩序が回復されることになる。このような系統的グループ分けはこの分野の研究に一定のまとまりを与えることになるだろう」(Schoolcraft II: xiv)。またシリーズ第四巻からは「テーマ別見出し」と題された、各巻に共通して用いられる目次見出しの一覧が収められているが、これと先ほどの『ポンティアックの陰謀』第一章の構造とを比べるだけでも両者の類縁性は明らかである(図表3を参照)。

I. 巻全体のシノプシス

II. 生活様式、社会の成り立ち

III. 遺跡、発掘出土品

IV. テリトリー、地理的ポジション

V. 部族内統治の様式

VI. 知的文化

VII. 先人による観察記録

VIII. 身体的特徴

IX. 言語

X. 工芸技術、建築様式

XI. 先住民の教育に関する政策

XII. 魔術、悪魔崇拝

XIII. 医術

XIV. インディアンの言語の語彙目録および文法

XV. 統計、人口

XVI. 著名なインディアンの伝記

XVII. 宗教

XVIII. 民族学的観察

図表 3:スクールクラフト『合衆国におけるインディアン部族の歴史、現況、および今後の見通 しに関する系統的、統計学的資料集』の「テーマ別見出し」(Schoolcraft IV: xi)

パークマンが『ポンティアックの陰謀』第一章を書くにあたって、このような当時の民族学の

方法論に則っていたことは間違いない。そして一八五一年五月に『ポンティアックの陰謀』が完成すると、彼は世話になった民族学者たちに謹呈本を送り(Jacobs I: 88, 89)、さらにはアメリカ民族学協会の会合で自分の本を紹介してもらえるようにちゃっかり手筈を整えさえする(Jacobs I: 80-81)。彼の中でフレンチ=インディアン戦争に関する歴史記述は疑いなく、当時の民族学研究の分野と密接に結びついていたのである。

このような民族学との結びつきはパークマンの歴史記述の特質について二つのことを示唆して いる。一つめはパークマンの歴史の「非時間性」である。歴史的コンテクストから抜き出され、 標本化された民族学的なインディアン像には、当然のことながら「非時間性」がつきまとう。事 実、スクールクラフトの民族学においては、インディアンは非時間的な存在として強調されてい る。「九世紀であろうと、一○世紀であろうと、十五世紀であろうと、あるいは初めて植民者がヴ ァージニアを訪れた十六世紀末であろうと、インディアンたちの主たる特徴と性格は現在とまっ たく同じだった。<中略>明らかに彼らはほとんど変化しておらず、身体的、精神的な原型をほ とんどまったく変えることなく未だ保持している。少しくらい生活様式が洗練され、知的に教化 されたとしても、彼らの人種としての本質は変わらないまま続いてゆくことだろう。まるで彼ら は決して変わることのない原型の足枷をかけられているかのようだ」(Schoolcraft I: 15)。そしてパ ークマンもまた『ポンティアックの陰謀』第一章の終わり近く、まるでスクールクラフトの文言 を繰り返すかのように、インディアンそのものを永劫不変、時間を超越した存在として定義する にいたる。「インディアンはいわば岩から切り出された人種なのだ。そのものを破壊してしまうこ となしに、インディアンの姿形に変化を加えることは不可能である。<中略>断固として変わろ うとしないインディアンの精神はその不変性のために我々に賞賛の念を抱かせる。そして我々は 深い興味を持って見るのだ、この矯正不可能な荒野の子、母なる大地から乳離れしようとしない 荒野の子の運命を」(Parkman, a 389)。またこの第一章の文章は基本的に過去形で書かれているの だが、しばらく読み進めると突如として現在形の記述が数パラグラフ続き、ここに描かれた先住 民の生活風景は過去のものとも現在のものとも判断のつきにくい様相を呈し始める(Parkman, a 382-83)。そこあるのはどこか時を超越したタイムレスなインディアン像である。第一章に列挙さ れたインディアンおよび彼らの生活習慣はある特定の時代のものではない。それは今も昔も決し て変わることのない普遍的な特徴として提示されているのだ。

そしてこのように標本化され、非時間化・非歴史化されたインディアンは次に、いわば「空間化」されることになる。これがパークマンの歴史記述の二つめの特質である。図表 4 の地図は『ポンティアックの陰謀』に一八五一年の初版時からこれまで常に収録されてきた。『ポンティアックの陰謀』には合計で四つの地図が収録されているが、これは一つめのもの、第一章におさめされた地図である(版によって前後することはあるが、第一章の初めか終わりかのどちらかに置かれている。初版では第一章の冒頭に収められ、Library of America 版もそれを踏襲している)。この地図には右上に「一七六三年、アメリカにおける砦と入植地」というタイトルが付けられているが、よく見るとこれはインディアン各部族の配置図になっていることが分かる。民族学的な手法によ

って非時間化されたインディアンはまず地図という道具によってその空間的な存在性を強調され ることになるわけである。

図表 4 : 『ポンティアックの陰謀』に収録されたインディアン各部族の配置図

さらに本文においてもパークマンの歴史記述は「空間性」を中心に展開してゆく。そしてここ で重要になってくるのが「旅」なのである。第一章に関して言えば、イロクウォイ系部族につい ての説明が終わり、この本のタイトル・キャラクター、ポンティアックを初めとするアルゴンク ウィン系部族の説明に移ると、パークマンはインディアンたちの土地を実際に空間移動しながら、 つまり旅しながら話を進めようとする。具体的に言えば、アルゴンクウィンの広大なテリトリー について、「旅人」のあとを追うかたちで各地にちらばった諸部族の位置を確認してゆく作業であ る。例えば我々は旅人の案内を通して、アルゴンクウィンたちがマッキノーの湖岸でウィグワム を建てたり、セント・メアリー川で魚を捕ったりしている様子を目撃する(Parkman, a 379)。また は同じく旅人の登場を媒介として、デラウェア族の戦士が闘いに勝利して村に帰ってくるのを目 の当たりにする(Parkman, a 381)。さらに「カヌーを北に向け、ミシガン湖とスペリオル湖を横切 り、ヒューロン湖の西の縁に沿って進んでゆくと、旅人は周囲を取り囲むもの寂しい荒野の所々 にオジブウェ族、ポタワタミ族、オタワ族の住居が散在しているのに気づくだろう。ミシガン湖 西の入り江や川の周辺では、彼はソーク族、フォックス族、メノミニー族を目にする。北の凍結 荒野に分け入ると、彼はそこを放浪するクリー族すなわちクニスタノウ・インディアンの手荒い もてなしをうけることになるだろう」(Parkman, a 382)。こうして旅人の先導によって、この先に 続くアルゴンクウィン系部族の陰謀の歴史舞台が空間的に読者に印象づけられてゆくのである。

パークマンの歴史記述の根底にはここに表れているような「空間性」がある。言い換えるならば、それは空間的なフィールドを「旅」するというかたちで進められる歴史記述である。また「旅人」は第一章に登場するだけではない。この後、ポンティアック戦争の歴史が本格的に始まるが、そこでも「旅人」は繰り返し登場し、パークマンの歴史記述を牽引する原動力としての役割を担うことになる。この意味において、彼の歴史における「旅」は方法論となっているのである。

では、「旅人」の存在、あるいは「旅」という方法論は歴史記述にどのような効果をもたらすのだろうか? 次の節では旅行記『オレゴン・トレイル』との比較をまじえながら、『ポンティアックの陰謀』における旅の効果について考察することにしたい。

四 「旅人」の効果

『ポンティアックの陰謀』が出版された当時、ある書評家はパークマンを歴史の舞台を案内する旅のガイドに喩え、彼の歴史を読むことが旅に似ていることを暗に示唆している。「彼は文字に印刷されたあらゆる歴史資料を調査し、深く分析しただけではない。彼は可能な限りその歴史を生きたのだ。<中略>このように彼が自らの主題にいわば直に接したことは、パークマンの本に

ほとんど唯一無二の高い価値を与えている。一歩進むごとに、我々は土地に詳しいだけでなく、その特徴をむやみに脚色することのないガイドの後をついて歩いていることを感じる。」⁽⁷⁾これが単なる言葉のあやでないことは実際に『ポンティアックの陰謀』を読んでみれば明らかである。前節でパークマンの歴史における「旅人」の存在について指摘したが、それは読者を歴史の森へと案内するパークマンそのひとに他ならない。

では歴史家 / 旅人という存在は『ポンティアックの陰謀』にどのような効果をもたらしている だろうか? まずは旅行記『オレゴン・トレイル』における旅の性質を検証し、そこに手がかり を探すことにしよう。

パークマン自身が述べているように旅行記『オレゴン・トレイル』はインディアンの生活習慣 を直に知るために試みたリサーチ・トリップという性質を持っていたが、しかし彼の旅は単なる 資料収集に終始していたわけではない。そのことは『オレゴン・トレイル』の後半に描かれるあ る奇妙な一場面からうかがい知ることができる。それはこんなシーンである。アメリカ・インデ ィアンの部族に交じって旅を続ける最中、パークマンはたまたま見つけた路傍の洞窟に吸い寄せ られるように入り込んで行く。「その土地の霊は私の心に不思議な効果を及ぼした。刺激を受けた 私の心は奇妙な働きを見せ、洞窟の奥へと進むにつれ、それまでほとんど忘れかかっていたよう な出来事や遠く離れた人や物の姿が突如として驚くほどはっきりと私の目の前に浮かび上がった。 お情け程度の文明からさえ八○○マイルも離れたあの危険な荒野にあって、地球の反対側の光景 が、洗練された古代文明の中心地の光景が目の前を通りすぎてゆくのだ。幻想的な夢というより も、それはまるで鮮明な絵画が次々と現れるようだった」(Parkman, a 244)。そしてパークマンが そこで実際に目にしているものとは、セント・ピーターズ教会、エトナ山、コロセウム、パッシ ョニスト修道院など。つまり、今引用した中にある「洗練された古代文明の中心地」とは要する にローマのことである。一八四三年から一八四四年にかけてパークマンはヨーロッパへのグラン ド・ツアーに出掛けており、もちろんローマもその旅程の中に組み込まれていた。当時の彼のト ラベル・ログを見ると、ローマ滞在中はセント・ピーターズ教会、コロセウム、パッショニスト 教会への言及が頻繁に出てくる(Journals I: 173-99)。簡単に言ってしまえば、彼がここで見ている のはその時の思い出である。しかし問題はなぜこの西部の荒野のど真ん中でそんなものを見なけ ればいけないのか、ということだ。この場面のパークマンの行動は単なる資料収集のレベルを超

これほどあからさまではないものの、パークマンはオレゴン・トレイルの旅行中、たびたび白昼夢のようなものを見ている。そしてその白昼夢は周囲の土地が彼にふと思い起こさせた「連想 (associations)」によって引き起こされたという。周囲は見わたすかぎり荒れ果てた荒野、しかしそこで彼は偶然美しい花々を見つけ、思う。「今これらの花々は突然周囲の野蛮な風景には似つかわしくない一連の連想を喚起した。そしてしばらくの間、私の思いはニューイングランドへと戻っていった。よく覚えている美しい顔が次々とまるで生きているように鮮明に私の眼前に浮かび上がった」(Parkman, a 86)。さらに同じく荒野で見かけた松林については、「その松の木立に近づい

てゆくと、そこには古い連想を思い起こさせる何かがあった。ニューイングランドの松の木で覆われた山々、丈夫で元気だった頃に越えたことのあるあの山々がまるで本物みたいに私の心の中に浮かび上がった」という(Parkman, a 158)。しかし、もちろん今パークマンがいるのは西部の荒野であり、馴染みのニューイングランドの森ではない。先ほどの洞窟の場面と同じく、これらのシーンで彼は西部の荒野に何らかの記憶なり、「連想」なりを上書きしようとしていると言ってよいだろう。

数々の旅のスケッチを書いているワシントン・アーヴィングは旅人ジェフリー・クレヨンにこ んなことを言わせている。「もし私が単なる美しい風景の愛好家であるのなら、わざわざ余所の国 に出向いてその好みを満足させようなどとは思わなかっただろう。というのも「アメリカほど」自然 の魅力が惜しみなくあふれている国は他にどこにもないからだ。<中略>しかしヨーロッパは語 り継がれた詩的な連想の持つ魅力を放っている」(Irving, 743-44)。これは十九世紀アメリカの作家 に共通する認識だったことだろう。そして同じようなことはパークマンも自身の自伝小説『ヴァ サル・モートン』の中で主人公に言わせている。「結局のところ、連想こそが概して風景の持つ力 の源なんだよ。たとえばハドソン川、ぼくは思うのだけれど、ハドソン川は単なる美しさの点で 言えばライン川に引けを取らないと思う。ただし、廃墟の城跡が二つ三つ、数々の記憶をまとっ て出てくると、完全に形勢逆転、ぼくらにはかなわないんだ」(Parkman, b 113)。これらを参考に すると、先に見たパークマンの白昼夢の意味は明らかである。彼自身も意識しているように、ア メリカの土地には歴史、記憶、語り継がれてきた「連想」が欠けている。そこで彼は旅先の荒野 の風景に自らの手で積極的に「連想」を付与しようとしたのだ。先の洞窟のシーンで西部の荒野 にイタリアの風景を重ね見るのは、ローマくらいに過剰な歴史と連想を西部のまっさらな荒野に 書き込んでゆこうとする、歴史家パークマンのいくぶん極端な意思表明として捉えることができ るかもしれない。⁽⁸⁾

そして、オレゴン・トレイルの旅で行われたこの連想付与は、歴史書『ポンティアックの陰謀』でも引き続いて行われる。結論から言ってしまえば、この連想付与こそがパークマンの歴史における「旅」(もしくは「旅人」)の効果なのである。

前節で触れたように、パークマンの歴史は時間的直線というよりも地理的ネットワークを形成するような描かれ方をしている。先ほどはインディアン諸部族を説明した第一章における旅人の存在を確認したが、ポンティアック戦争の歴史本編においても明らかに彼の記述は空間的であり、語りの推進力になっているのは「移動」である。デトロイト砦から北に向かいミシガン湖の北の端にあるミシリマッキノ一砦へと向かう移動(Parkman, a 582-83)、ペンシルヴェニアのピット砦からベッドフォード砦を通りすぎ入植地に至る道のり(Parkman, a 622-23)など、これらの移動はきまって「旅人」という案内役を媒介にして描かれる。次の一節では直接的に描かれているのはペンシルヴェニアからオハイオ川にそって西へと行軍するイングランド植民地軍だが、この兵隊たちにもやはり「旅人」の姿が重ね合わされている。

時に兵隊たちはオハイオ川沿いをその大きく渦巻く流れと岸辺の輝くような風景を眺めながら行進した。またそうかと思えば、洞窟の内奥のように冷たく静かに湿った、鬱蒼とした森に降りてゆくこともあった。<中略>まれではあったが、木々の密生が途切れる野原のような場所に出ることもあった。迷路のような厚い森から抜け出すと、森の中に空いた牧草豊かな陽光注ぐ草原へと視界が開ける。そこで兵隊たちは鳥の鳴き声に和み、牧草をはむ鹿の群れなどを見ては励まされるのだ。こういった場所は森を旅する者にとって、ちょうど砂漠におけるオアシスと同じように、ありがたいものである。そしてこのような場所こそがプレーリーの前触れなのだ。西に進むにつれ森の中に空いた野原はだんだん広くなり、だんだん多くなり、やがてミシシッピ川の向こうの広大な大草原へと広がってゆく。(Parkman, a 772)

パークマンの歴史記述はこのように実際に湖を越え、森を抜け、つまり旅することで進められ、旅人は読者を歴史の次なる舞台へと案内し、物語を推進する役割を担う。もちろん、この旅人はパークマン自身である。旅人 / 歴史家パークマンは我々読者を案内する導き手となり、歴史物語は進んでゆく。彼は歴史空間を縦横無尽にかけめぐり、我々読者は彼のあとについて同じように歴史を旅するわけである。⁽⁹⁾

そしてパークマンのガイドに従って歴史の森を旅しつつ、我々はある地点でこんな描写に遭遇 する。土地の記憶、土地に語り継がれる「連想」についての記述である。「この記憶すべき衝突は アメリカで最も美しい場所の一つに暗い連想の影を落とした。その晩の戦場からほど近く、今で は雑草と睡蓮の花でなかば覆い尽くされ、周囲を森の木々で暗く囲まれた水たまりがツーリスト に紹介される。そして彼は教えられるのだ、その淀んだ水の底に三〇〇人ものフランス人の骨が ヘドロにまみれて沈んでいるということを」(Parkman, a 440)。さらにまたこんな一節。「この場所 はすでにそれ自身の歴史的な連想を有している。もっともその生々しさはまだ時の経過によって やわらげられてはいないけれど。この地こそフランス人たちがデュケーヌ砦を立てた場所だった。 またここから数マイルのところには、ブラドックがあの凄惨な敗北を経験した戦場がある。そし て砦の裏の丘はかつてグラントの高地連隊兵とルイスのヴァージニア人たちが包囲攻撃された場 所だった」(Parkman, a 622)。もちろん、直接的に「連想」という言葉が使われていなかったとし ても、旅人/歴史家としてのパークマンの仕事はこのような「連想」を土地に付与し、読者に紹 介することに他ならない。事実、『ポンティアックの陰謀』そのものも土地にポンティアックとい う偉大な酋長の記憶を植え付け、「連想」を付与することで終わっている。次の引用はこの本の最 後のパラグラフ、ここでパークマンはセントルイスという土地に対して、その地下に眠るポンテ ィアックの連想を与えようとする。「ポンティアックの埋葬地を示す塚も碑もない。霊廟の代わり として、街がこの森のヒーローが眠る土地の上にそびえたった。かつて彼が燃えるような怨念を もって憎んだ人々が、今ではその忘れられた墓のうえを間断なく踏み歩くのである」(Parkman, a 846)。こうしてセントルイスは語り継がれる歴史を持った土地となる。そして、このように土地 に記憶を植え付け、うしろをついてくる後続の旅人(つまり読者)がその土地から豊かな連想を

喚起することができるように地ならしすること——パークマンの旅人としての、そして歴史家と しての仕事の中心はここにあったのである。

五 結び――「土地の文学」から国家の歴史へ――

ここまでパークマンの最初の歴史書『ポンティアックの陰謀』について、主としてその「空間性」と方法論としての「旅」の意義を中心に論じてきた。パークマンにとって旅と歴史記述は本質的に同義であり、そのことは旅行記『オレゴン・トレイル』と歴史書『ポンティアックの陰謀』に共通してみられる「旅人」の効果からうかがい知ることができた。

歴史家としてのキャリアの最初期に見られるこの傾向はパークマンのその後の歴史記述を理解 するうえでも重要な鍵となるようである。『ポンティアックの陰謀』以後、彼は深刻な肉体的、精 神的な疾患を抱えながら北米植民地史シリーズの執筆を続け、死の前年の一八九二年『衝突の半 世紀』の出版をもってとうとうそれは完成する。そしてこのキャリア全体を通して、彼は常に「空 間性」に基礎を置く歴史家だった。シリーズのクライマックスにして彼の最高傑作と言われる『モ ンカルムとウルフ』(*Montcalm and Wolfe*、1884)にはこんな一節がある。ここでも登場するのはやは り「旅人」、具体的には旅人に喩えられた鳥たちが歴史の舞台を案内するガイド役として読者を導 くことになる。「ようやく春がやってきた。オルバニーのオランダ系市民たちは天高く、北方の夏 のすみかへと長い列を作って飛んでゆく渡り鳥の群れの鳴き声を聞いた。この空の旅人たちが飛 んでゆく、その眼下の地上には主な戦場が地図のように広がっていた。まずは青きハドソン川、 森の中をまどろみながら進み、岸辺の砦や街、ハーフムーン、スティルウォーター、サラトガ、 そして幾何学的なつくりのエドワード砦とその土手を通りすぎる。そして次に広がるのは黒ずん だ常緑樹の森。その向こうには冬の拘束衣を解かれ輝きに満ちたジョージ湖の入り江、さらにそ の脇にはウィリアム・ヘンリー砦が黒焦げの廃墟となぎ倒しにされた木々の荒れ野のただ中に見 えてくる」(Parkman, c 1152)。新大陸北東部におけるイングランドとフランスの衝突は旅人の目か ら空間的に捉えられ、さらにこの一節ではその空間性は鳥瞰図的に提示され、歴史は文字通り一 大パノラマとして読者の目の前に広がる仕組みになっている。植民地期のイングランドとフラン スの歴史を空間的に網羅した「アメリカの森の歴史」を志したパークマンにとって、この歴史パ ノラマは彼のキャリアの上での一つの到達点だったかもしれない。

最後にこのようなパークマンの歴史記述を十九世紀当時の歴史をめぐる状況の中に位置づけ、 本稿を終えたい。

十九世紀初頭から中葉という時期はアメリカにとってようやく自らの国家の歴史を意識するようになった時期だった。それまでにも各地で古い文書の収集や編集は行われていたが、基本的にそれらは地方史の色合いが強く、国家レベルの歴史記述となると本論の最初に触れたパークマンの師匠ジャレド・スパークスの登場を待たなければならない。そしてスパークス以後ようやく、ジョージ・バンクロフトやウィリアム・プレスコット、そしてヘンリー・アダムズへと続く、いわばハーヴァード学派の歴史家たちが活躍を始めるようになる。パークマンもまたこのアメリカ

の歴史学の黎明期を支えた一人だった。この分野の研究で先駆的な仕事をしたデイヴィッド・レヴィンはスパークス以後のハーヴァード学派の歴史家たちを過去への憧憬や進歩史観といった特徴を共有する「ロマンティック・ヒストリアン」と定義している。⁽¹⁰⁾ たしかにパークマンの歴史にもそのような傾向をはっきりと見て取ることができ、彼をロマンティック・ヒストリアンの列に加えることに別段問題はないのかもしれない。しかし、とりわけバンクロフトの歴史に強く表れているように、他の歴史家たちが人類の進歩、アメリカの国家としての進歩という「時間性」を強調するのに対し、パークマンの歴史は「空間性」に基礎を置いた歴史である。ほぼ同じ時代と場所を共有しつつ、パークマンの歴史記述は他の歴史家たちとひとくくりにまとめてしまうことのできない異質さを持つと言わざるを得ない。そして、おそらくその異質さは彼の歴史記述がアメリカ独立期から十九世紀にかけてさかんに書かれた別のジャンルの流れをも汲んでいることに原因がある。すなわちそれは「土地の文学(the literature of the place)」と呼ばれるジャンルである。

パメラ・リージスによると、「土地の文学」とは独立当時のアメリカ合衆国が自らを記述し規定しようとする際に用いた自己表象方法の別名である。当然のことながらその頃アメリカはまだ国家の歴史を持たず、その代わりとして新大陸の大地や自然環境について観察と記述を行うことで自らを定義しようとした。そしてその記述方法には人間の歴史よりも普遍的な、より非歴史的な博物誌(ナチュラル・ヒストリー)の枠組みが用いられたという。構造的には、ナチュラル・ヒストリーの手法による「非時間的」な体系化の記述と旅行記のような「物語」の要素が混合したジャンル、これが「土地の文学」である。白人の旅人がアメリカの大地を探検し、そこで見つけたものを分類、体系化しようとするジャンルと言ってもよいだろう。もちろん、旅人が旅先で発見するものの中には先住民インディアンも含まれる。そして「土地の文学」においてインディアンはえてして歴史的コンテクストから引き離され、標本化と体系化のプロセスに晒されることになるのである。この分野からは植物学者のウィリアム・バートラムやクレヴクールらの著作が生まれ、その代表的テクストとされているが、それと同時にジャンルの一部は民族学へと派生、発展していったという事実も注目に値する。(11)

『ポンティアックの陰謀』の第一章はまさに非時間的・民族学的な手法によるインディアン諸部族の体系化の試みだった。また『ポンティアックの陰謀』という歴史書全体は「旅」や「空間性」に重心を置き、歴史記述を進める原動力になっていたのは「旅人」の存在だった。この意味において、パークマンの歴史記述は今述べた「土地の文学」と共通するものを多く持ち合わせている。あるいは、むしろパークマンの歴史は「土地の文学」という、独立革命期から続いてきたアメリカの土地を記述するジャンルの直系子孫と言ってもいいほどである。

もちろん、前節で指摘したような土地に対する記憶の埋め込み、もしくは「連想」の付与には必ずしも非時間的・民族学的な「土地の文学」に合致しない部分がある。いくら言葉の上でのことであるにせよ、それは土地に変化を加えることにほかならないからである。また、変化とは「時間化」を意味する。そしてこの「時間化」はパークマンの中でやはり「進歩」と結びついていた。したがって、この点は同時代のロマンティック・ヒストリアンと共通する時間性ないし進歩史観

が表れている箇所と言っていいだろう。彼は『ポンティアックの陰謀』冒頭で歴史記述、すなわち連想付与の作業を荒野の開墾に喩えて書いている。「歴史のフィールドというのは開墾されていない未開拓の荒れ地のようなもので、私を待ち受けていた作業はちょうど辺境入植者のそれと同じだった。つまり、粗末な住居を建てる前に森の木々を切り倒し、下生えの草を燃やし、土地を切り開き、そして倒れた幹を適当な長さに切り出すといった作業のことだ」(*Pontiac*, 348-49)。パークマンの歴史記述は歴史を持たない新大陸に記憶を書き込むことで、荒野という生の素材から国家を加工することだったわけだ。

当然ながら、このような土地の加工によって果たされる国家の進歩は十九世紀アメリカの領土拡張政策や先住民インディアンの放逐と無関係ではない。そもそもパークマンは『ポンティアックの陰謀』が目指すのは「アメリカの森とアメリカ・インディアンの両方が最終的な破滅を運命づけられた、その瞬間を描くこと」だと言っている(Pontiac, 347)。またその結末はポンティアックの死とその上に栄えるセントルイスの街という極めて非対称な搾取の構図で終わっていた。パークマンが書いているのはあくまでも白人の歴史である。インディアンたちは彼の歴史の中で重要な登場人物ではあるが、あらかじめ没落と絶滅を宿命づけられた存在、いわば白人たちの勝利とその国家の進歩を際立たせる引き立て役でしかない。このような描き方に重大な問題があることは明白である。

しかし、このことと同じくらい私にとって重要に思われるのは、アメリカの歴史学の黎明期に あって、「土地の文学」という^{*}博^{*物}誌 的興味に満ち、空間性を前面に押し出したジャンルが

国家の歴史の創設に果たした役割の実例をパークマンの歴史記述に見ることができるということである。あるいは、パークマンの歴史を「土地の文学」から国家の歴史へとシフトする過渡期の歴史として捉えることも可能だろう。それは非時間的・空間的な存在としてのアメリカを国家として時間化・歴史化しようとする試みでもある。この意味において、同時代のロマンティック・ヒストリアンの中でもパークマンの仕事が持つ意義は非常に大きいと言えるだろう。

『モンカルムとウルフ』を上梓した翌年、パークマンは『北部ツアーのための歴史ハンドブック――ジョージ湖、シャンプレーン湖、ナイガラ、モントリオール、ケベック』(Historic Handbook of the Northern Tour: Lakes George and Champlain, Niagara, Montreal, Quebec, 1885)というタイトルの旅のガイドブックを書いている。書くと言っても、これまで出版してきた歴史書から副題にある土地にまつわるエピソードを抜き出し、まとめたものである。その他のパークマンの仕事に比べたら何でもない本なので、通常、パークマン研究でまともに取り上げられることはまずない。しかし、これまでパークマンの旅と歴史記述の関係性を見てきている我々にとって、キャリアの最終盤になって彼がまさに「歴史」と「旅」をガイドブックというかたちで結合させていたことは非常に興味深い事実である。ここにも彼にとって歴史記述と旅が同義であったことの証左を見出すことが出来るとともに、キャリアの最初期に見られたこの傾向はその後もずっと彼の歴史記

述をコントロールし続けたことが分かる。彼は生涯、アメリカの歴史の森のガイド役として、後 続の旅人(読者)を案内し続けたのである。

【註】

- 1 一通はジョージ・エリスに宛てたもの、もう一通は一八八六年十一月十四日付け、マーティン・ブリマーに宛てたもの。エリスに宛てた手紙は最初の数頁が紛失しているため、残念ながら正確な日付までは特定できていない。ただしその終わりのほうでパークマンは北米植民地史シリーズの執筆の進度と今後の出版計画について言及しており、そこから判断するかぎり、この書簡は一八六四年の暮れ、もしくは一八六五年のはじめに書かれたものと推測できる。Jacobs I: 184n を参照。
- パークマンのピクチャレスク美学に着目した議論としては、Kris Lackey, Eighteenth-Century 2 Aesthetic Theory and the Nineteenth-Century Traveler in Trans-Allegheny America: F. Trollope, Dickens, Irving and Parkman," American Studies 32 (Spring 1991): 33-48; Joseph L. Tribble, "The Paradise of the Imagination: The Journeys of *The Oregon Trail*," New England Quarterly 46 (1973): 523-42 がある。男性性回復の手段としての西部旅行という観点については、Frank M. Meola, "A Passage Through 'Indians': Masculinity and Violence in Francis Parkman's The Oregon Trail," American Transcendental Quarterly 13 (1999): 5-25; Phillip G. Terrie, "The Other Within: Indianization on The Oregon Trail," New England Quarterly 64 (1991): 376-9; Harold Beaver, "Parkman's Crack-up: A Bostonian on the Oregon Trail," New England Quarterly 48 (1975): 84-103 を参照。またパークマンの旅は十九世紀アメリカの領土拡張政策および先住民の放逐のケー ス・スタディとして捉えられることが一番多く、多かれ少なかれほとんどの研究者はこの点 に言及している。代表的な論考は次のとおり。Richard C. Vitzthum, The American Compromise: Theme and Method in the Histories of Bancroft, Parkman, and Adams (Norman: U of Oklahoma P, 1974); Stephen P. Knadler, "Francis Parkman's Ethnography of the Brahmin Caste and The History of the Conspiracy of Pontiac," American Literature 65.2 (June 1993): 215-38; Francis Jennings, "Francis Parkman: A Brahmin among Untouchables," William and Mary Quarterly 42.3 (July 1985): 305-28; L. Hugo Moore, "Francis Parkman on the Oregon Trail: A Study in Cultural Prejudice," Western American Literature 12.3 (1977): 185-97.
- 3 十九世紀アメリカの歴史家たちの一次資料研究については James J. Barnes, "Bancroft, Motley, Parkman and Prescott: A Study of Their Success as Historians," *Literature and History: New Journal for the Humanities 5* (1977): 55-72 のとりわけ、六二—六三頁を参照。またジャレド・スパークスの歴史記述については拙論「歴史学部スパークス教授の苦悶——十九世紀前半のアメリカにおける歴史記述」鷲津浩子・森田孟編『イン・コンテクスト: Epistemological Frameworks and Literary Texts』(つくば、Epistemological Framework と英米文学研究会、二〇〇三年)二八五一

三〇五頁で詳しく論じている。

4 パークマンの日記を編集したメイソン・ウェイドは『オレゴン・トレイル』をその後の歴史書に準ずる二次的なものとして捉え、さらには出版された旅行記そのものよりも、日記のほうが生のデータとして歴史的価値があると主張している(Wade II: 385-404)。これにはさすがに批判が多い。代表的なウェイド批判としては E. N. Feltskog, "Editor's Introduction," in Francis Parkman, *The Oregon Trail* (Madison: U of Wisconsin P, 1969): 11a-75a.

パークマンの旅と歴史の関係については、多くの批評家が彼の歴史における生き生きとした描写は旅で得た実体験の賜物だと高く評価する一方、その本来の意義はこれまで充分論じられてこなかったのが現実である。この点は十九世紀当時の書評家たちが指摘していることとほとんど変わっていない。パークマンの実況中継的な描写法を評価した代表的な書評は次のとおり。"Parkman's History of Pontiac's War," The North American Review 73 (October 1851): 495-529; "Reviews ad Literary Notices," The Atlantic Monthly 16 (October 1865): 505-10; "Mr. Parkman's Montcalm and Wolfe," The Atlantic Monthly 55 (February 1885): 265-70; John Fiske, "Francis Parkman," The Atlantic Monthly 73 (May 1894): 664-74; James Russell Lowell, "Francis Parkman," The Century Magazine: A Popular Quarterly 45 (November 1892): 44-45; Henry C. Vedder, American Writers of To-day (1894: Freeport, NY: Books for Libraries Press, 1972): 27-42.

- 5 『ポンティアックの陰謀』の初版時のタイトルは History of the Conspiracy of Pontiac, and the War of the North American Tribes against the English Colonies after the Conquest of Canada という具合に、当初頭に「歴史」という語が冠せられていた。図表 2 を参照。
- 6 民族学者ではないが、先に引用したインディアンの家屋に関する記述は植物学者ウィリアム・バートラムによるインディアンの村の観察記録を参考にしていることが脚注から分かる (Parkman a, 370-71n)。バートラムもまた十九世紀の民族学者と同じく、対象を記述し、固定し、標本化することを仕事の中心とした。後述するように、彼はアメリカ合衆国独立期の「土地の文学」を代表する一人である。尚、アメリカ民族学協会は一八四二年、ニューヨークでギャラティン、スクールクラフトらによって設立されている。
- 7 "Recent Literature," *The Atlantic Monthly* 27 (April 1871): 522-23.
- 8 「土地と記憶」という問題については次の研究書を参考にしている。Simon Schama, Landscape and Memory (1995; New York: Vintage Books, 1996); Larzer Ziff, Return Passage: Great American Travel Writing 1780-1910 (New Haven: Yale UP, 2000). 尚、サイモン・シャーマはパークマンの歴史記述を題材に独創的なナラティヴ・ヒストリーを書いている。本稿は必ずしもシャーマの見方と一致するものではないが、これに大きな刺激を受けている。Simon Schama, Dead Certainties (1991; New York: Vintage Books, 1992)を参照のこと。
- 9 当然のことながら、「空間性」はそのまま「視覚性」に直結している。パークマンの記述スタイルの「視覚性」に関してはすでに優れた研究があり、前述のピクチャレスク美学についての論考もこれに含まれる。とりわけ秀逸なのは Otis A. Pease, *Parkman's History: The*

- Historian as Literary Artist (New Haven: Yale UP, 1953).
- 10 David Levin, *History as Romantic Art: Bancroft, Prescott, Motley, and Parkman* (New York: AMS Press, 1967). 特に「ロマンティック・ヒストリアン」の定義については、三—四五頁を参照。
- Pamela Regis, Describing Early America: Bartram, Jefferson, Crevecoeur, and the Influence of Natural History (1992; Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1999). とりわけ「土地の文学」に関する議論は二一三九頁、「土地の文学」から派生した民族学についての議論は一三五—五七頁を参照。

【参考文献】

- Barnes, James J. "Bancroft, Motley, Parkman and Prescott: A Study of Their Success as Historians." Literature and History: New Journal for the Humanities 5 (1977): 55-72.
- Beaver, Harold. "Parkman's Crack-up: A Bostonian on the Oregon Trail." New England Quarterly 48 (1975): 84-103.
- Feltskog, E. N. "Editor's Introduction." In Francis Parkman, *The Oregon Trail*. Madison: U of Wisconsin P, 1969: 11a-75a.
- Irving, Washington. History, Tales and Sketches. New York: Library of America, 1983.
- Jacobs, Wilbur R. Letters of Francis Parkman. 2 Vols. Norman: U of Oklahoma P, 1960
- Jennings, Francis. "Francis Parkman: A Brahmin among Untouchables." William and Mary Quarterly 42.3 (July 1985): 305-28.
- Fiske, John. "Francis Parkman." The Atlantic Monthly 73 (May 1894): 664-74.
- Knadler, Stephen P. "Francis Parkman's Ethnography of the Brahmin Caste and *The History of the Conspiracy of Pontiac.*" American Literature 65.2 (June 1993): 215-38.
- Lackey, Kris. "Eighteenth-Century Aesthetic Theory and the Nineteenth-Century Traveler in Trans-Allegheny America: F. Trollope, Dickens, Irving and Parkman." *American Studies* 32 (Spring 1991): 33-48.
- Levin, David. History as Romantic Art: Bancroft, Prescott, Motley, and Parkman. New York: AMS Press, 1967.
- Lowell, James Russell. "Francis Parkman." *The Century Magazine: A Popular Quarterly* 45 (November 1892): 44-45.
- Meola, Frank M. "A Passage Through 'Indians': Masculinity and Violence in Francis Parkman's *The Oregon Trail.*" American Transcendental Quarterly 13 (1999): 5-25.
- Moore, L. Hugo. "Francis Parkman on the Oregon Trail: A Study in Cultural Prejudice." Western American Literature 12.3 (1977): 185-97.
- "Mr. Parkman's Montcalm and Wolfe." The Atlantic Monthly 55 (February 1885): 265-70.

- Parkman, Francis. a. The Oregon Trail; The Conspiracy of Pontiac. New York: Library of America, 1991.
- ---. b. Vassall Morton: A Novel. Boston: Phillips, Sampson and Company, 1856.
- ---. c. France and England in North America: Volume II. New York: Library of America, 1983.
- ---. d. Historic Handbook of the Northern Tour: Lakes George and Champlain, Niagara, Montreal, Quebec. 1885; Boston: Little, Brown, and Company, 1899.
- "Parkman's History of Pontiac's War." The North American Review 73 (October 1851): 495-529.
- Pease, Otis A. Parkman's History: The Historian as Literary Artist. New Haven: Yale UP, 1953.
- "Recent Literature." The Atlantic Monthly 27 (April 1871): 522-23.
- "Reviews ad Literary Notices." The Atlantic Monthly 16 (October 1865): 505-10.
- Regis, Pamela. Describing Early America: Bartram, Jefferson, Crevecoeur, and the Influence of Natural History. 1992; Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1999.
- Schama, Simon. Dead Certainties. 1991; New York: Vintage Books, 1992.
- ---. Landscape and Memory. 1995; New York: Vintage Books, 1996.
- Schoolcraft, Henry Rowe. Historical and Statistical Information Respecting the History, Condition and Prospects of the Indian Tribes of the United States. 6 Vols. Philadelphia: Lippincott, Grambo & Company, 1851-57.
- Terrie, Philip G. "The Other Within: Indianization on *The Oregon Trail.*" New England Quarterly 64 (1991): 376-92.
- Tribble, Joseph L. "The Paradise of the Imagination: The Journeys of *The Oregon Trail.*" New England Quarterly 46 (1973): 523-42.
- Vedder, Henry C. American Writers of To-day. 1894: Freeport, NY: Books for Libraries Press, 1972.
- Vitzthum, Richard C. The American Compromise: Theme and Method in the Histories of Bancroft, Parkman, and Adams. Norman: U of Oklahoma P, 1974.
- Wade, Mason. The Journals of Francis Parkman. 2 Vols. 1947; New York: Kraus Reprint Co., 1969.
- Ziff, Larzer. Return Passage: Great American Travel Writing 1780-1910. New Haven: Yale UP, 2000.
- 山口善成「歴史学部スパークス教授の苦悶——十九世紀前半のアメリカにおける歴史記述——」 『イン・コンテクスト: Epistemological Frameworks and Literary Texts』鷲津浩子・森田孟編 つくば、Epistemological Framework と英米文学研究会、二〇〇三年。二八五-三〇五。